公立大学法人　滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2018年度　活動報告書

近江楽座は「学生らしさを生かして、地域に学び、育ち、貢献できる場」を目指しています

はじめに

ゴールの先にあるもの

地域には様々な課題がある。その課題を解決するために目標を定めて行動を起こそうという視点SDGs「Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標」がグローバルな考え方として社会で広く認知され始めた。これまで近江楽座が積み上げてきた多くの活動実績と経験はそんな大げさなものではない。地域というフィールドには、学生や研究に携わる者たちが異なった目標を、異なったスケジュールで主体的に活動を始められる多くの入り口がある。そしてそれらの目標を、彼らにとってはゴールではなく、これから持続していかなければならない地域社会の長く遠い将来を、自分たちの近い将来と重ね合わせて展望しているのである。異なる目標を有機的に結びつけながら広い視点で解決策を導き出すことが、学生たち近江楽座のミッションと言える。地域で SDGs を印籠に活動しようとするにはまだ少し無理があるかもしれない。国際的な企業や国レベルのグローバルガバナンスの手法としての新しさはあるが、地域スケールのまちづくりや、伝統資源、日常の豊かさへの価値観、コミュニティの結びつきにまで包括的に考えられているわけではない。169 のテーマ内容を具体的に地域課題に置き換えてイメージすることはまだ難しい。国際レベルのグローバルな視点を持ちつつ、地域レベルでどう目標を設定するかが求められているのである。

今年は近江楽座のこれまでの活動を、それぞれ SDGs の視点で評価する試みを始めた。活動の応募申請にも、17 のゴールについての選択項目を記入し評価を受けるようになった。つまり学生たちの活動が持続可能な社会を築く上で、小さな手のひらサイズの試みから、その積み重ねがしっかりとした社会的道筋となることが求められるようになってきたのである。すでに学生たちは、これまで漠然と考えてきた持続社会とはどんな社会なのか、ということを学び、理解しようと、問い始めている。その活動を共有してきた仕組みが近江楽座だったのだ。

SDGs が目指すゴールは様々だが、誰も取り残さない協働の社会行動を具現化していることは、大学教育の本質と重なる部分が大きい。学生たちは入学し、学び、卒業し、社会に出て成長していく。持続社会とは常に次々とバトンタッチして続けていく社会のことである。それは、環境、資源、経済の維持、延命だけではない。その過程で革新的なイノベーションや、構造転換などが起きたり、新たな視点、価値観を持った地域共同体が出現することで、目標は刻々と変化して行く。規制やルールで縛られない、そんな融通無碍な社会になっても持続可能にして行くために、皆が仮説のゴールを立てて、それを目指している。多くのハードルを超えてたどり着いたゴールで見えるものは、イメージしていた社会だろうか。その先に次のゴールが生まれているかもしれない。そこで一旦思考停止してもまた社会は動いて行く。また課題が生まれゴールを探す行動を開始するのである。ゴールは終わりではない。

2020 年 3 月

近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志
（人間文化学部 生活デザイン学科）

目次

はじめに 1

1 近江楽座について 5

1-1 近江楽座とは 6
1-2 プロジェクト区分 7
1-3 プロジェクトの採択について 8

2 各プロジェクトからの活動報告 11

2-1 活動実績報告 12
2-2 『らくざしんぶん』 56

3 共通プログラムの報告 63

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座 64
3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」 66
3-3 活動報告会 まちづくり famer's festa - まちをたがやす人たちの感謝祭 - 69
3-4 SDGs 学生大会 びわ湖で考える SDGs 76

4 学生有志活動 79

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」 80
4-2 オープンキャンパス 81
4-3 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」 82

5 他大学等との交流 83

5-1 鳥取大学 地域価値創造研究教育機構 視察 84
5-2 大学 SDGs ACTION AWARDS 2019
スタディツアー〈下川町× JAL〉賞を受賞 85

6 情報発信 87

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット 88

7 付録 89

7-1 プログラム推進メンバー 90
7-2 メディア掲載一覧 91

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」－まち・むら・くらしふれあい工舎－”は、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

2004 年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム (現代 GP)」に採択され、2006 年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取組として学内外で高く評価されました。そして、翌 2007 年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、2018 年度までの 15 年間で延べ 336 のプロジェクトが地域と連携した活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- ■ 地域の課題に大学・学生が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- ■ 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- ■ 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局（地域共生センター）の連携の下、3 つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

■ 活動助成システム

“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

■ コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

■ 地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係わる情報を他大学、研究機関、行政、NPO 団体などと共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

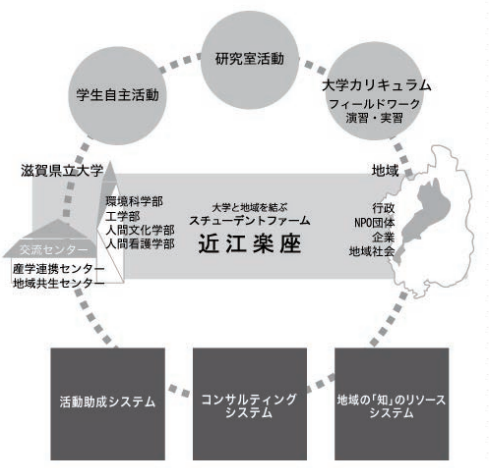
＜3つのサポートシステム＞

地域「知」のリソースシステム
他大学、研究機関、行政、ＮＰＯ団体等と共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

コンサルティングシステム
教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介等、プロジェクト進行に必要なコンサルティングを行います。

活動助成システム
選定したプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

＜サポートシステム概念図＞



1-2 プロジェクト区分

2007 年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「A プロジェクト(学生主体型プロジェクト)」に加え、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「B プロジェクト（地域協働型プロジェクト)」がスタートしました。

A プロジェクト（学生主体型プロジェクト）

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を 4 つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

①継続プロジェクト

過去に近江楽座の助成を受けたことがあるプロジェクト。

②新規プロジェクト

近江楽座の助成を受けたことがないプロジェクト。

③ S プロジェクト（2011 年度〜）

近江楽座でのこれまでの実績をもとにステップアップを目指し、活動資金の助成を必要としない自立したプロジェクト。（上位 senior、特別 special の S）

④ E プロジェクト（2018 年度〜）

国連が提唱している「持続可能な開発目標（SDGs)」の達成につながる SDGs 推進に特化したプロジェクト。とくに自分たちの取組を学校や地域等に普及することに力をいれている活動。（教育 education、拡張 extend の E）

B プロジェクト（地域協働型プロジェクト）

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターが支援し、依頼先と共同で取り組みます。

A プロジェクト（学生主体型プロジェクト）

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。

- ① 継続プロジェクト
  - ③ S プロジェクト (2011 年度より開始)
    活動資金の助成を必要とせず、これまでの実績をもとにステップアップを目指す取組
- ④ E プロジェクト（2018 年度より開始）
  SDGs が掲げる 17 の目標達成につながる課題解決を推進するプロジェクト
- ② 新規プロジェクト

B プロジェクト（地域協働型プロジェクト）

学生が主体となって取り組むのがふさわしい自治体や企業等から提示された課題に、学生チームと依頼先とが協働で取り組むプロジェクト（2007 年度より開始）

1-3 プロジェクトの採択について

プロジェクト募集期間

A プロジェクト
日　時：2018 年 4 月 13 日（金）～ 5 月 7 日（月）

募集説明会

A プロジェクト
日　時：2018 年 4 月 13 日 (金) 12:30-13:00
場　所：講義室 A4-107

応募件数

A プロジェクト　26 チーム
・継続プロジェクト 22 件
　(うち S プロジェクト1件、E プロジェクト 6 件)
・新規プロジェクト 4 件
　(うち E プロジェクト 3 件)

プロジェクト審査

A プロジェクト「公開プレゼンテーション・審査会」
日　時：2018 年 5 月 19 日 (土) 9:30-15:30
場　所：中講義室　A7-101
内　容：プレゼンテーション（プレゼンテーションシートによるプロジェクト説明）および質疑応答、審査（非公開）

選定委員（順不同　敬称略）：

○ 滋賀県立大学 地域連携担当理事
COC+推進室長　田端克行
○ 滋賀県立大学環境科学部 教授　上河原献二
○ 滋賀県立大学人間文化学部 助教　谷口真紀
○ たかしま市民協働交流センター
事務局長　坂下靖子
○ 滋賀県私学・大学振興課 課長補佐　西川清彦

採択および採択通知

A プロジェクト
日　時：2018 年 5 月 24 日（木）
通知方法：近江楽座ホームページおよび学生ホール掲示板にて通知

採択件数

A プロジェクト　23 チーム
・継続プロジェクト 21 件
　(うち S プロジェクト1件、E プロジェクト 9 件)
・新規プロジェクト 2 件
　(うち E プロジェクト 2 件)

活動説明会

A プロジェクト
日時：2018 年 6 月 1 日 (金) 12:30-13:00
場所：講義室 A4-107
内容：採択プロジェクト代表者に対する事業計画、会計処理等の進め方に関する説明会

＜公開プレゼンテーションの様子＞

事前に審査員の先生方にそれぞれの応募チームの事業計画書と予算計画書に目を通してもらい、公開プレゼンにて各チームの発表・質疑応答をふまえて、採点・審査を行いました。

チームはプレゼンシートを用い、プロジェクトの目的・意義や活動内容について４分間の発表を行いました。

プレゼンテーション後は、３分間の質疑応答があり、審査員の先生方からプロジェクト内容に対してのするどい質問がなげかけられました。

田端地域連携担当理事からのあいさつ

会場風景

2 各プロジェクトからの活動報告

2-1 活動実績報告

01 とよさと快蔵プロジェクト 12
02 人と環境を救う雨水タンク 14
03 あかりんちゅ 16
04 政所茶レン茶゛ー 18
05 BAMBOO HOUSE PROJECT. 20
06 おとくらプロジェクト 22
07 信・楽・人 -shigaraki field gallery project- 24
08 とよさらだプロジェクト 26
09 内湖の再生と水辺コーディネート 28
10 タクロバン復興支援プロジェクト 30
11 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム 32
12 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY- 34
13 未来看護塾 36
14 子ども学習支援サポーターズ 38
15 Taga-Town-Project 40
16 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト 42
17 座・沖島 44
18 地域博物館プロジェクト 46
19 フラワーエネルギー「なの・わり」. 48
20 たけともミライ 50
21 木興プロジェクト 52
22 Jesuit House プロジェクト 54

次ページ以降のチームデータについて
補足説明

※近江楽座活動年度について
□：不参加
■：参加
を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の総数です。

01 とよさと快蔵プロジェクト

古民家改修でまちを元気に

使われなくなった民家や蔵が点在する豊郷町で、空き家をまちの資産として活用し、地域を盛り上げる活動を行っています。地域のイベントへの参加やイベント企画、蔵を改修した BAR 運営なども行い、まちを盛り上げるまちの人をサポートしています。

TEAM DATA

チーム名： とよさと快蔵プロジェクト
代表者： 上田健太郎 (環境科学部)
メンバー数： 75 名
指導教員： 迫田正美 (環境科学部)
活動場所： 犬上郡豊郷町
関係団体： NPO 法人とよさとまちづくり委員会
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT　**実施事業**

(1) 宮川倉庫改修コンペ

(2) 宮川倉庫改修合宿
★見出し写真：改修作業（8/11-8/17）

(3) ビアガーデン

(4) ミツマルシェ

(5) カイゾウノススメ 2018 編集合宿

(6) 新入生歓迎会

(7) 湖風祭（夏・秋）

(8) 大運動会（夏・冬）

(9) 15 周年快蔵 OBOG 会

イベント参加者（学生・OBOG・地域の方）と（09/15）

(10) とよさとハロウィン

(11) Bar タルタルーガ通常営業

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

活動を通じて様々なことを得ることができた。その中でも 2 つの得たものがある。一つはプロジェクトメンバーの大切さである。今年度、学生 70 名を率いる代表を務めたが、大小様々な問題に直面することがあり、そのたびに頭を抱える場面もあったが、中心メンバーの同期や後輩たちの支えのおかげで無事終えることができた。組織をマネジメントする難しさを痛感した一方で、仲間を信頼し助け合うチームプレーの大切さを知ることができた。プロジェクトを進めるためには、メンバーだけでなく、ほかの団体の社会人の方の協力も必要不可欠である。私たちの活動は、とよさとまちづくり委員会のみなさんはじめ、大学や豊郷町民のみなさんに協力を得て、活動することができている。そのような点において人との信頼の大切さをはじめ、対人能力やコミュニケーション能力のアップにつながっていると感じる。

もう一つは、自分たちが考え抜いた空間が形となりそれが街の魅力の要素としてまちづくりにつながる愉しさである。この活動では物件の選定から用途の決定、設計デザイン、施工、その後のイベント運営などすべてを学生主体で行っている。それぞれの場面でそれぞれの愉しさ、難しさがある一方で、ものづくり・空間づくりをとおして、まちづくりの愉しさを知ることができた。空き家・古民家の活用という観点からまちづくりとは何かを根本から考える起点にもなった。その土地の現状を知り、問題を知り、そこに隠れたポテンシャルを見出すことで空間の用途やデザインを考え抜くことができ、また、そこに愉しさを見出すことができた。大学で学ぶ座学とは違った観点からの能力を鍛えることができたのかなと思う。一つひとつの問題を解決し、プロジェクトを終えた時の達成感は他では味わうことのできないものだった。

活動を通して学んだこと （抜粋）

豊郷町の人の温かさというものを感じる場面が何度もあった。実際に一番成長できたのは、町の方や作業を一緒にしている人との関わりの中でのコミュニケーション能力や、集団の中で自分がどう動くべきかなどの、次を考える力だと思う。来年度ではこの経験を生かして今年以上に主体的に動いていきたいと思う。

岡田龍介（環境建築デザイン学科 1 回生）

学生がいかにたくさんの方々に支えられているかを実感した。改修合宿の時も、まちの方々が気にかけてくださり竣工できた。1 年生のときは参加しているだけだったが、副代表として活動し周りの方々の協力がどれだけありがたく、大きなものであるか痛感した。このことを胸に刻み、豊郷町に貢献できる活動をしていきたい。

福元美希（環境建築デザイン学科 2 回生）

副代表として活動の意味や目的を考えながら過ごした。まちの人と触れ合える場に出向き、このプロジェクトが多くの方に支えられ、愛されているのを実感することができた。来年度から代表を務める。同じ気持ちを多くのメンバーに感じてもらえるよう、支えてくださっている方々に恩返しができるような活動をしていきたい。

萩原咲楽（生活デザイン学科 2 回生）

優しい町の皆さんや先輩方、頼もしい同期、熱心な後輩たちのおかげで 3 年間在籍することができた。豊郷町をよりよくしようと活動しておられる方々と、大学生という立場で輪の中に入れてもらい、町の様子を感じることは大きな経験となった。今後も、町にとっても学生にとってもプラスとなる関係が続いていければと思う。

大西温子（生活デザイン学科 3 回生）

地域からのコメント （抜粋）

NPO法人とよさとまちづくり委員会　理事長　北川稔彦さん

今年、吉田地区の空き倉庫を店舗として改修する活動をしてくれました。地区のメイン通り沿いにあることもあり、地域の方たちが見に来たり、差し入れもあったりしました。改修したメンバーからも「達成感を感じることができました。」と言う声も聞けました。何年も続けて来た事で、地域の認知度も上がってきたように思います。この先も地域の方たちと繋がり活動することを後輩たちにも伝え、愛されるとよさと快蔵プロジェクトになって行くことを期待しています。

NPO法人とよさとまちづくり委員会 副理事長　岡村博之さん

今年度も 1 年間お疲れ様でした。大きな物件のリノベーション事業を見事にやり遂げました。改修に留まらず、多くのイベント事業や運営をこなしてまちの活性化に尽力してくれました。この時期、プロジェクトの卒業生が社会に旅立ち、一方で新たに新入生が加わります。メンバーも変わる中で、勢いを止めることなく 15 年もの期間、活動を良くやったなと思います！皆さんが手掛けてくれたもの一つひとつの物件には、それぞれに学生の魂が吹き込まれています。その魂を断たさぬよう、この地域に住む我々がしっかり受け継いでいくことが皆さんへのお返しであると考えています。

指導教員より （抜粋）　環境科学部　迫田正美

今年度は用途変更を含む大きな改修を行った。施主の希望を聞きながらコンペを開催し、改修までを成し遂げることができたのは、学生メンバーにとって良い経験になったと思う。地域の専門家や社会に出た先輩たちとの協力関係を広げていけていることは素晴らしい。今後は、地域の活性化に寄与するプログラムを踏まえた改修作業となるものと思われるので、まちづくり委員会の方々との連携を深めるとともに、行政の方々とも十分に意見交換しながら活動を展開してくれることを期待している。

DELIVERABLE　成果物／制作物

カイゾウノススメ 2018

ミツマルシェポスター

ビアガーデン
ポストカード

02 人と環境を救う雨水タンク

目指せリサイクル社会

プラスチックの成形技術を用いて、廃プラのリサイクルをテーマに活動しています。リサイクルプランターに続き、3 年前から雨水タンクの開発を行っています。企業や就労支援施設と連携した hana-wa 活動や清掃活動にも参加し、地域との繋がりを大事にしています。

TEAM DATA

チーム名： 廃棄物バスターズ
代表者： 金谷敦史 (工学研究科)
メンバー数： 14 名
指導教員： 徳満勝久 (工学部)
活動場所： 彦根市、滋賀県内、県外
関係団体： 社会福祉法人いしづみ会 他
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 雨水タンクの開発

(2) hana-wa 活動
★見出し写真：hana-wa 活動（09/19）

(3) 彦根市清掃活動

荒神山春祭り（05/04）

(4) ゆるキャラ博実行委員会

ゆるキャラ博のゴミ分別啓発（10/20）

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

メインの事業である雨水タンクの作成では、実寸大の試作に向けた原料の組成選定、力学物性評価はできた。しかし、昨年に引き続き目標としていた実寸大の試作までは至らなかった。その理由としては、会社とのコンタクトがしっかりとできていなかったためであり、この課題を生かしたいと考えており、今後は試作を実際に行い雨水タンクの PR 活動を進める予定である。また、地域の企業からの相談を受け、発泡ウレタンや不織布のリサイクルについての検討も考えている。

hana-wa 活動では NPO ぽぽハウスでのペットボトルキャップの回収量が過去最高となり、ペットボトルキャップ回収の活動が浸透していることがわかった。今後は広報活動により事業所の拡大を検討している。プランターメンテナンスは昨年度と同様、 1回しか行けなかった。来年度はもっと行けるようにコンタクトを取る必要がある。広報活動においては、ビジネスコンテストでの入賞など実績を残すことができた。

彦根市内の清掃活動は来年度も引き続き継続していく。この活動により地味ではあるが廃棄物バスターズの広報をするとともに、地域の方と交流をはかり、雨水タンクのことを知っていただく機会にしていきたい。来年度も地域の近いところから活動を広げ、また滋賀グリーン購入ネットワーク (GPN) の幹事に就任するので、環境問題に対する取組を強固にしていきたい。

活動を通して学んだこと （抜粋）

計画通りに物事を進めることの難しさや企業の方との交渉の難しさを学んだ。企業の方の対応の早さや情報の提供など積極的にコンタクトをすることで多くの可能性広がることを体験できた。地域の人との交流の中で、「ありがとう」の言葉をかけて頂くことがあり、活動は小さなことかもしれないが役立っているのだと感じた。

金谷敦史（工学研究科材料科学専攻１回生）

ビジネスコンテストに参加し、hana-wa 活動の PR が行えたことは一番の成果。反省点は、雨水タンク作成のための金型を借りることを前提で予定を立てていたため、金型が確保できなくなったことで、事業が一時凍結してしまったことだろう。計画性や、予定外の事態が発生しても柔軟に対応できる能力の大切さを痛感した。

北﨑勇亮（工学研究科材料科学専攻１回生）

雨水タンクの試作を行うにあたり、単純な思い付きだけでは物事を達成することができないことを痛感した。またビジネスコンテストに参加し、活動をぜひとも継続してもらいたいという声をいただき、この活動は周りに期待されている活動であり、責任をもって取り組まなければならないということを改めて感じた。

黒瀬直也（工学研究科材料科学専攻１回生）

ビジネスコンテストに出場し、この活動の広報と新たな企業団体の探索を行った。特に、金銭面における企業と我々ボランティア団体の考え方の違いを感じた。この活動は多くの人の善意の上で成り立っている活動だと感じた。是非、この善意の輪を広げていき、人々の廃棄物に対する考え方を変えていきたい。

鈴木涼平（工学研究科材料科学専攻１回生）

地域からのコメント （抜粋）

社会福祉法人 いしづみ会　八田尚樹さん

廃棄物バスターズと PCR（ペットボトルキャップリサイクル）作業所連絡会との協働活動も早いもので 9 年が経過しました。回収については、最近では小学校を中心に学校からの回収が増加しており私たちの活動が地道に広がっていることを実感しています。プランターリース活動については名神高速道路の菩提寺 PA・大津 SA の定期メンテナンスに各作業所の利用者（障害のある方）と共にバスターズのメンバーが参加、利用者と仲良くコミュニケーションをとってもらいながら花の手入れの作業に関わってもらっています。社会性を養うという点について、会話・挨拶をすることはとても重要な部分ですので、大変助かっています。今後の展開・活動の検討においても、新たな製品・企画の提案などを柔軟な発想力でしてもらい、重要な部分を担ってもらっています。

指導教員より （抜粋）

工学部　徳満勝久

“ 地域での地道な活動 ” を継続して実施すると同時に、新たな取組として「地域分散型治水ダム」と銘打った取組を開始し、今年度はその目途が漸く立ったという印象である。しかしながら、外部企業との意思疎通や情報交換には多くの難があり、一時は遅々として進捗しない時期もあったものの、自分たちで調べる努力や外部協力者の支援も得て、その製造実験ができるまでに漕ぎ着けたのが今年の成果であろう。また、今年度「大学によるアイデアコンテスト 2018」に参加し、審査員特別賞を受賞できたのは特筆すべき事項であったと思う。しかしながら、続く「しがニュービジネスプランコンテスト 2018」では、グループ内での意思疎通もままならず、また実行計画も確定することができなかったのは、グループとしての活動指針が明確に定まっていなかったためであり、今後の教訓になったのではないかと思う。来年度こそ、本来の目標を達成し、それを実際の ” 芽 ” に育ててくれるものと期待している。

DELIVERABLE　成果物／制作物

03 あかりんちゅ

エコでスローな夜を

お寺などから使えなくなったろうそく、「残ろう」をいただき、それを再利用してリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイト、キャンドル作り教室、キャンドル販売などを行っています。自分たちで運営資金をまかない、独自予算で活動している唯一のＳプロジェクト。

TEAM DATA

チーム名：あかりんちゅ
代表者：大橋日菜子（人間文化学部）
メンバー数：13名
指導教員：平山奈央子（環境科学部）
活動場所：学内、彦根市、県外
関係団体：滋賀教区浄土宗青年会
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 石寺納涼祭 2018
(2) 豊郷地蔵盆キャンドルナイト
(3) 草津まちあかり てらこやふぇすた
(4) 子ども学習支援サポーターズ コラボ企画
★見出し写真：キャンドル作り教室（11/11）
(5) 湖風祭
(6) OKB ストリート キャンドルナイト

キャンドルを並べた様子「OKBstreet 5th OGAKI 100th Anniversary!!」（12/07）

(7) ティーライトキャンドルの製造委託
(8) 商品開発
(9) 湖風夏祭
(10) ミツマルシェ
(11) 残ろう回収

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年一年は昨年に比べ、活動の幅が広がった一年であった。特に、今年度は大阪府の中学校からクラブ活動として「あかりんちゅ」のような活動をしてみたいと問い合わせがあり、「あかりんちゅ」が持つノウハウ（キャンドルの作り方や注意点、イベントの行い方等）を教える機会があり、「あかりんちゅ」の活動が少しずつ広がっていることを実感した。また、「あかりんちゅ」が設立当初よりお世話になっている滋賀教区浄土宗青年会との合同イベント「てらこやふぇすた」を行えたことは、とても大きかった。「あかりんちゅ」が独立した活動をしていく中で、設立当初にお世話になった団体と関りが薄くなりつつある中、滋賀教区浄土宗青年会との初の合同でのイベントが行えたことはとても良い機会となった。

課題としては、売り出し用の新商品の開発があまりできなかったことや、10月～12月初めの繁忙期にうまく情報共有ができていなかったことが挙げられる。特に11月は月初めから3週間連続で休日にイベントがあり、さらに11月の最終週から中間報告会とOKBストリートでのキャンドルナイトが2週間続いていた。そのため、依頼の調整・メンバーへの指示・中間報告会の資料作成を行っていた代表への負担が重く、情報が行き届かないことがあった。かねてより11月周辺は繁忙期であると分かっていたにもかかわらず、このような事態となったため、今後は少なくとも11月周辺は副代表や他のメンバーに仕事を振り分けるべきである。来年度の課題になるが、「あかりんちゅ」の現幹部（3回生）が1回生の時と同じく、今年度を以って7人抜ける。そのためメンバーが6人となり、人手不足が見込まれる。同じ学部学科だけでなく、他学部他学科からもメンバーを集めることが来年度の一番の課題である。

活動を通して学んだこと （抜粋）

エコなキャンドル作りを通して既製品ではないリサイクル商品販売の重要さ、活動を伝えることの大切さを学ぶことができた。ただ活動するのではなく、どのような目的を持った団体かを伝え、知ってもらうことで興味を持ってもらうことができ活動の幅が広がることを知ることができた。

荒木ひかる（国際コミュニケーション学科 1 回生）

キャンドル作成や箱詰めなどに積極的に参加するようにした。グラスを割ってしまうなどの失敗もあったが、製作のときはキャンドルの色や特徴を考えながら新しいデザインのキャンドル作りに積極的にチャレンジした。自分には何ができるかを考え積極的に行動して、新しいことに挑戦していくことが大切だと考えた。

田中美帆（地域文化学科 3 回生）

キャンドルナイトやキャンドル作り体験に参加してくださった方々に喜んで貰えたのがとても嬉しかった。それらのイベントを成功させるには、前回の反省を踏まえて入念に準備することが重要であると感じた。

大石琴美（地域文化学科 2 回生）

地域からのコメント （抜粋）

滋賀教区浄土宗青年会 第 25 期会長　稲岡賢純さん

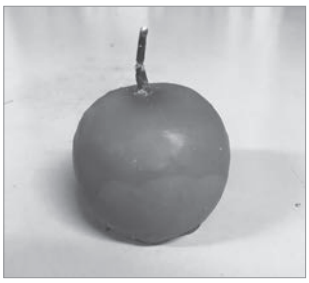
我々の主催する『てらこやふぇすた』で初のコラボが叶った。そのイベントのメインを飾ったのが「あかりんちゅ」によりディスプレイされた本堂におけるお念仏体験であった。20 畳程の部屋の中心にキャンドルを数多く並べ、極楽浄土の蓮の華を描く。その奥におられる阿弥陀如来という仏様に手を合わせ、木魚をたたきながら「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」とお念仏を称えていただくお念仏体験。少し部屋を暗くして蓮の花が綺麗に浮かび上がった時の「うわぁ、きれい！」という子どもたちの歓声は忘れられない。

この際に使用したキャンドルは元々我々が「あかりんちゅ」に提供した物である。今回初めて、我々の手から旅立っていった残蝋たちが新たな命を吹き込まれ、形を変えて我々の元に戻ってきてくれた。その灯は仏様の周りを照らしてくれるだけでなく、多くの方々の心をも綺麗に照らしてくれた。これほど嬉しいことはない。きっと阿弥陀如来様もお喜びのことであろう。新たな命を吹き込まれたキャンドルで多くの方々の心に輝きを灯してくれる「あかりんちゅ」。今後も良きパートナーとしてお付き合いを続けたい。

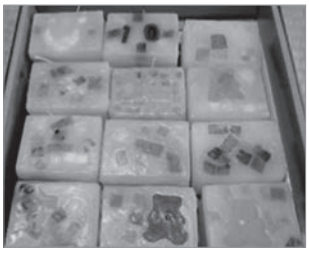
指導教員より （抜粋）　環境科学部　平山奈央子

昨年度の課題を踏まえ、既存の活動を継続しながらも一つひとつの取組に改善や工夫が見られ、積極的に活動を実施していると思います。また、様々な年代の地域の方々や他大学の学生とのコミュニケーションから学ぶことも多かったと思います。さらに、限られた資源、人材、時間のなかで複数の活動を実施するために、団体の組織運営の面でも難しい局面があったかもしれません。大学生の活動は活動者が年々変わることが大きな特徴です。それと同時に、組織運営や活動内容の見直しや継続を考える必要が出てきます。社会貢献、地域貢献を考えた場合に、あかりんちゅが解決したい課題は何なのか、その課題は地域の現状に合っているのか、大きな課題の中で貢献できる部分はどこなのか、などについて活動メンバーで話し合ってみることをお勧めします。今後もあかりんちゅとして魅力ある活動を行っていくために、3 年後、5年後の中期目標・計画を立てる時期にきているかもしれません。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



リンゴ型キャンドル



子ども学習支援サポーターズ
コラボ商品

＜その他成果物＞
あかりんちゅのキャラクターを用いた
ウィンドブレーカー

04 政所茶レン茶゛ー

一緒にお茶づくりしませんか？

滋賀県東近江市政所町にて、お茶づくりを通して政所の魅力を伝えていきたいと思い活動しています。本学の授業をきっかけに結成されました。茶畑をお借りし、お茶づくりから販売までを行い、地域の魅力を発信しています。

TEAM DATA

チーム名： 政所茶レン茶゛ー
代表者： 寺前翼（環境科学部）
メンバー数： 25 名
指導教員： 上田洋平（地域共生センター）
活動場所： 東近江市政所町
関係団体： 茶縁の会
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 **2013** **2014** **2015** **2016** **2017**

PROJECT　**実施事業**

(1) お茶づくり

茶摘み（05/12）

(2) 販売

(3) イベント
★見出し写真：春の奥永源寺「山歩道」（04/29）

たこたこ交流会（12/15）

(4) ほうじ茶活用

(5) 全国エコツーリズム学生シンポジウム参加

(6) 近江地域学会 研究交流大会
「地域に根ざす SDGs」参加

(7) SDGs 学生大会参加

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

お茶づくりにおいて今年度は天候の影響もあり、煎茶は昨年の 2/3 程度しか収穫できなかった。毎年畑の状況が変化する中で、臨機応変に計画を変更することができず、作業が遅れてしまうことがあった。そのような中で、茶畑をお借りしている白木駒治さんの畑の農作業をお手伝いする機会があり、その作業の丁寧さに感心した。それらを参考に、より良いお茶を作るためにも計画的かつ確実な作業を心掛けるようにしたい。

販売においては昨年よりも回数を増やすことができ、また新たなイベントにも積極的に参加した。自分たちの活動を改めて振り返り、それを全国に広める、もしくは他の活動を聞き参考にするよい機会となった。このようなイベントがきっかけで京都文教大学の宇治☆茶レンジャーといったお茶に関わり、政所茶にも関心を寄せてくれる学生とつながりを持つことができた。お客さんにも積極的に話しかけ、政所茶の味や栽培方法、背景に興味を持ってもらうことができた。しかし、今年も売り切れなかったお茶はまだ多く存在し、活用法や販売方法を考えていく必要がある。

ほうじ茶活用についてはお客さんの評価が良かったので、茶葉やラテ、シロップの販売を今後も続けていきたい。また、おとくらプロジェクトとコラボの予定があるため安定した量のほうじ茶を生産できるよう、茶生産の管理を徹底したい。

E プロジェクトとして SDGs の普及に寄与するような活動がほとんどできていないという点は課題である。しかし、自分たちはあくまで持続可能な開発そのものを実践しているプロジェクトであると考えているので、その点では今の活動を更に長く続けることができるよう努力したい。

活動を通して学んだこと

活動を通して楽しく、多くのことを学ぶことができた。特に販売においては、自分たちが一生懸命に作ったものを買ってもらった時の喜びの大きさを知ることができた。また、そのお金の重みを感じることもできた。心を込めてお茶を育て、魅力を伝え販売する楽しさを学ぶことができた。

大原悠人（地域文化学科 1 回生）

今年度は話すという機会が増えたことで様々な経験ができた。それは政所の人、政所へ来てもらえる人、お茶を購入してもらう人、他大学や社会人などと話すことで、様々な考えや経験にふれ、自分たちが今、何をしないといけないのかを考えさせられた。この一年、新たに活動の糧になる経験ができた。

寺前翼（環境政策・計画学科 2 回生）

大学に入ってお茶の販売、栽培に関わることになるとは思っていませんでした。この 1 年間、農作業や政所茶を通して出会えた人との交流はとても貴重な経験でした。これからも政所や政所茶の魅力を外へ広めるとともに、地域の方と一緒になって政所を盛り上げていきたいです。

藤原未奈（環境政策・計画学科 1 回生）

地域からのコメント（抜粋）

政所茶農家　白木駒治さん

今年度も皆さん力を合わせて頑張ってくれました。手を入れれば入れるだけ良い茶ができるので、何回も作業で来てくれて、こちらとしてもうれしい限りです。お茶は 1 年たつとだんだん劣化してしまうので売り切ることを目標に頑張ってほしいです。せっかく力を合わせて作ってくれたお茶なので、それを味わってくれるお客さんがもっと増えるとよいですね。

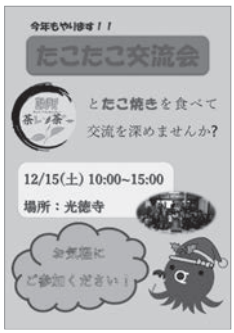
今年は京都の大学が政所にきて研修などを企画したり、よい交流をしているなと思ってみていました。来年度もこの調子でがんばってください。

指導教員より

地域共生センター　上田洋平

この世代までくると、顧問といっても「孫」に接するような心もちである。茶レン茶゛ーの運営を「飛び級」で引き継いだ若いリーダーたちには、毎度ハラハラさせられるが、一方で、あたまをぶっつけてたんこぶをつくってきたとか、転んで擦り傷をつくってきたくらいのことなら、むしろ出番がきたくらいに思えて、ちょっと嬉しくなる（怪我した当人にはヒドイ話だね）。もっとも、泣いて帰ってきても「イタイのイタイの飛んでいけ」というまじないを唱えるくらしかしないけれど。人権を踏みにじること、人身を傷つけること、人道をはずれることでなければ、失敗や葛藤というのは、プロジェクトにとっても、メンバーにとっても、成長のチャンスである。なのでこれからも私は「失敗・葛藤するチャンスを奪わない」ようにする。意地悪だね。でもみんな、とくにリーダーたちは、メキメキと頼もしくなった。活動フィールドである東近江市・政所にも、様々な大学の色々な学生が関わりつつある。来年度は大学の枠を超えた学生同士の横のつながりを期待したい。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



たこたこ交流会チラシ

05 BAMBOO HOUSE PROJECT

生きる自然は地域を育む

全国、どこにでもある放置竹林。この問題を地域の方々と学生が協力して解決しようという取組です。滋賀県湖南市菩提寺区の竹林で、毎年竹林整備を行い、その際に出た竹廃材を再利用し、子どもや地域の方々が集まる憩いの場となることを目指します。

TEAM DATA

チーム名：BAMBOO HOUSE PROJECT
代表者：本多山成昭 (環境科学研究科)
メンバー数：36 名
指導教員：陶器浩一 (環境科学部)
活動場所：湖南市菩提寺
関係団体：菩提寺まちづくり協議会
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 **2016** **2017**

PROJECT　実施事業

(1)　竹廃材の撤去（竹チップ制作）

竹チップ散布（10/20）

(2)　週末ワークショップ

(3)　環境学習講話

(4)　甲西北中学校合同竹林整備

竹刈り（12/10）

(5)　サイン計画

(6)　「竹の庭」竹林見学会
★見出し写真：竹林見学会（12/16）

(7)　ポートフォリオ作成

(8)　菩提寺まちづくりフェスタへの出展

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

このプロジェクトは、継続した活動が重要である。

まず 4 月に菩提寺まちづくり協議会地域活性化委員会の皆様と 1 年間の活動内容の共有を行った。そして今年度は以前までに行っていた 3 月のワークショップをまとめて行わず、竹の伐採に最適な 10 月から 12 月の3か月間に渡り、週末を利用してワークショップを行うことにした。週末ワークショップに合わせて竹廃材の除去や「竹の庭」竹林見学会を行うことで、ワークショップに参加してくれた学生が活動する機会も増え、学生と地域がお互い無理なく継続して活動を行うことができたのではないかと考えている。

また、昨年度から制作物に対して、ただ解体し更地にするのではなく、段階的に解体・再構築することで、既存の建築を残しながらも、新たな場所を築いていくという方針に変化してきた。今年度もバンブーハウス 2 号とスクリーンが新たな姿へと形を変え、以前にもまして魅力的な「竹の庭」になっている。

これからの活動でも、竹建築の姿・形は変わっていくことが考えられるが、モノが変化しても場所としてはいい環境を残していきたいと考えている。この「竹の庭」が地域の人々に愛され、地域に寄り添ってこの場が続いていくように、これからも継続して活動を行いたい。

活動を通して学んだこと （抜粋）

竹に悩ませされる地域の方々と、竹の性質を学びたい学生とが、竹によって繋がり、とても良い関係にあると感じた。中学生との合同竹林整備は、学生が教えることにより、学生自身が理解を深めるだけでなく、地域の中学生が竹について知る機会にもなっている。これは、今後の活動の助けになると思う。

岩田慧（環境建築デザイン学科１回生）

地域の人々と一緒に活動することの大切さを感じた。竹チップを敷いて作った道は地域の方と一緒にやらなければでき上がらない長い作業だった。また、地域の子どもたちが楽しそうに作ったもので遊んでくれていて、作って良かったなと思った。来期からの活動にも参加したいと思った。

岩本万慈（環境建築デザイン学科３回生）

プロジェクトが行われている竹林では、小道を挟んで整備された竹林と放置竹林を対比し、違いを観察することができ、人が環境整備することの大切さを感じた。地域の人だけでは人手が足りず整備が困難だが、学生が参加することでそれを可能にし、学生の学びの場になるという素晴らしいプロジェクトであると感じた。

川上滝登（環境建築デザイン学科３回生）

竹林を整備し、竹建築を作り、その後竹チップにし竹林に戻すサイクルを通し、煙たがられていた放置竹林が子どもたちの遊び場やお散歩コース等、地域交流の場として訪れてもらいとても嬉しく思った。地域の方々にとって更なる魅力的な竹林になるように来年の活動も頑張りたい。

浜口美悠（環境建築デザイン学科３回生）

地域からのコメント （抜粋）

菩提寺まちづくり協議会 地域活性化委員会 委員長
浅井基義さん

2012 年度から菩提寺まちづくり協議会が借用して管理している竹林で、滋賀県立大学の皆様と共同で始めたバンブーハウスプロジェクトも今年で 6 年が過ぎようとしています。毎年継続して、地元の中学生に環境講座の開催や、竹林に施設の整備してもらい大変感謝しております。例年、年度末 3 月に整備に来ていただいていましたが、今年度は時期を少し早めてもらい、10 月～ 12 月に作業をして頂き、今期の事業計画が予定より早く終了して助かりました。県立大学との共同の事業も今では、地域の皆さんにも毎年竹林の施設が変化するのを楽しみにして貰っています。今後とも継続して御協力をよろしくお願いいたします。

指導教員より

環境科学部　陶器浩一

昨年度までは 3 月に行う一週間程度のワークショップを中心とした活動であったが、今年度は 10 月～ 12 月にそれぞれ週末ワークショップ、地元中学校への出張授業等、一年を通しての継続的な活動を行った。

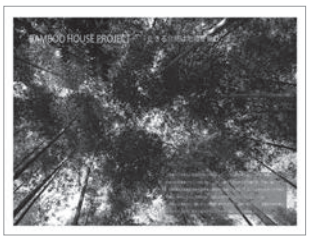
現地では傷んだ制作物の補修および新しい制作物の制作、サインの設置、廃材の撤去を行い、以前に増して魅力的な場となってきている。

継続した活動が地元中学校にも認められ、総合学習としてのカリキュラムにも取り入れられるようになった。

まちづくり協議会の方々と連携した継続的な活動により、この場所の存在と我々の活動が地域の中に根付いてきている。竹林整備のモデルケースとして見学の申し込みも来るようになったと聞いている。

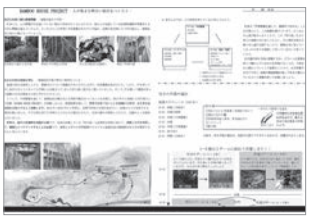
この活動は継続性が最も重要である。今後も地道な活動が続いてゆくことを願っている。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



ポートフォリオ

制作物のネームプレート



環境学習講話 授業プリント

＜その他成果物＞
竹林マップ

06 おとくらプロジェクト

高宮に新しい風を吹かせよう！

旧中山道高宮宿をより元気にすることを目的に活動しています。築200年の古民家を学生が改修してできたコミュニティスペース「ギャラリー喫茶おとくら」の運営を軸とし、地域活動への参加、イベントなど幅広い活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名： おとくらプロジェクト
代表者： 辰巳佳穂（人間文化学部）
メンバー数： 20名
指導教員： 迫田正美（環境科学部）
活動場所： 宿駅 座・楽庵、彦根市高宮町
関係団体： 高宮経友会
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 喫茶活動

政所茶メニュー考案会（01/19）

(2) イベント活動

★見出し写真：高宮太鼓祭り（04/08）

高宮アーティストインレジデンスWS（07/15）

(3) ギャラリー運営

(4) 座・ギャラリー活動

(5) 広報活動

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、新メニューの考案や夏ピザイベントの開催によって、若い人や子どもたちにおとくらの存在を知ってもらったり、興味を持ってもらうことができた。また、「政所茶レン茶ー」とのコラボメニューの開発によって、他の楽座団体との横のつながりを築くことができた。ミーティングの体制を変えたことで、メンバーそれぞれの活動に対する自覚が高まり、班ごとの動きが機能しやすくなった。全体を通して、喫茶おとくらの存在が地域の中や、幅広い年齢層、地域外や海外へと広めることができたことが大きな成果である。そして、イベントを通してそれぞれが自分の得意分野や、興味のあることなどを生かすことができたのも、良かった点として挙げられる。

課題としては2点挙げられる。一点目は、シフトに入る人数の少なさ、偏りである。これからは、希望調整をなるべく早くとることや回答は全員が行う事などの対策を行っていきたい。二点目は、おとくらメンバーがもっとおとくら喫茶をより良いものとするためにメニューやイベント等を積極的に考え、動けるようにしていきたい。一人ひとりが考え、全員で協力して計画し、実行に移せるようにしていきたい。

おとくらプロジェクトは今年の9月に10周年を迎える。これまでの歴史を振り返り、関係者に感謝を伝える場を企画するだけではなく、10周年記念メニューの考案や、他の楽座団体とコラボし、本大学の音楽系サークル等に依頼して記念イベントも企画していきたいと考えている。また、通常の営業でのお客さんと学生との会話を大事にし、「また来たい」と思ってもらえる、居心地がよい空間をこれからも目指していきたい。喫茶おとくらが様々な人と人を結ぶことのできる場所となるように学生自らが積極的に地域や地域外にも働きかけていきたい。そして、メンバーがおとくらで自分のやりたいことを実現したり、得意な事を生かして活動を行えるようにしていきたい。

活動を通して学んだこと

コミュニケーション力の大切さを学ぶことができた。おとくらに訪れるお客様とお話ししたり、高宮の地域行事に参加して地域住民の方とふれあったりする機会が多くあったが、そのような経験を重ねるたびに自身のコミュニケーションスキルが伸びていくのを感じた。

山添美玖（人間関係学科 1 回生）

おとくらに集まる人たちみんなで楽しい時間を過ごせることが一番たいせつ。地域の人やお客さま、学生との交流、喫茶店・ギャラリー・イベント運営など、おとくらでだからこそできる経験がある。おとくらが温かく、地域に開かれた空間であるように、これからもみんなで楽しみながら活動していきたい。

石神愛海（人間関係学科 2 回生）

今年度も、地域の子どもから御年配の方まで、そして海外のアーティストの方や落語家の方など、たくさんの人と出会うことができた。これからもおとくらでの活動を通してたくさんの人と出会い、様々なことを経験し大学生活の自分にとっての財産としていきたい。

浅井恵（人間関係学科 2 回生）

地域からのコメント

おとくら家主・おとくら応援隊長　加藤義朗さん

今年度一番嬉しかったのは、広報ひこね5月1日号に市民活動の代表として表紙を飾らせていただき、ちゃっかり、おっちゃんも、載ったことです。そして、一番印象に残ったのは「嵐にしやがれ」の松潤のピザ釜を作ろうという無謀な発想から始まった「夏ピザ」!! 小学校を巻き込み、ポスターも準備も当日も良かったですよ。記念写真のみんなの笑顔が最高です。

来年度は、「おとくら10周年イヤー」!!　いっぱい楽しい企画を待っています。メンバーみんなで、楽しんでください。

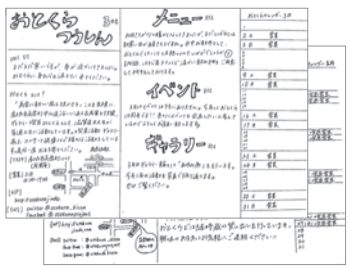
指導教員より

環境科学部　迫田正美

今年度は「高宮アーティストインレジデンス」という国際的なイベントが長期間にわたって行われ、共催という形で運営にも加わり、ワークショップにも参加できたことで、大きな視野の中で高宮での活動を考えるきっかけになったことは、「おとくら」の今後の活動を考えるうえでも貴重な経験となったのではないか。「夏ピザイベント」を新しく企画したことも含めて、積極的に町へ働きかける可能性を広げることができたので、今後の活動に期待したい。

自主的に研修の内容や研修先を決め、実行できていることもそれぞれのメンバーにとって良い経験になっていると思う。今後とも地域で支えていただいている人たちや、ギャラリー、コンサートに出展、出演していただいている方々とのつながりを大切にして、新たな発展を目指すことを期待する。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



おとくらつうしん

ピザイベントのチラシ

＜その他成果物＞

おとくら寄席チラシ
ギターワークショップチラシ
湖風祭宣伝チラシ

07 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

信楽の隠れた良さを再発見！

焼物のまち信楽で活動する窯元さんや商店街のみなさん、信楽を盛り上げようとしている方々と共に地域の隠れた魅力を再発見し、いろいろな形で発信。陶器を製作したり、パンフレットやマップ作成するなど、ここでしかできないことを学生自らが提案しています。

TEAM DATA

チーム名： 信・楽・人
代表者： 岡田京子 (人間文化学部)
メンバー数： 8 名
指導教員： 印南比呂志 (人間文化学部)
活動場所： 信楽窯元散策路、甲賀市信楽町
関係団体： 信楽窯元散策路の WA
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 第 13 回ぶらり窯元めぐりのお手伝い

新宮神社前でのインフォメーション補助（04/08）

(2) 「アロマボール宙」のブランディング

ミーティング（12/02）

(3) 夏湖風祭の屋外企画での自作陶器の販売
★見出し写真：陶器制作（05/12）

(4) 信楽窯元散策路マップ (英訳版) の制作

(5) 第 14 回ぶらり窯元めぐりに向けた準備

(6) 土喜友の会講演会
『信楽の歴史ー創始からの考察』参加

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は信楽窯元散策路の WA の定例ミーティングに参加するようになっただけでなく、他大学の学生が信・楽・人とともに活動したり、普段あまり交流することのなかった窯元さんと関わりを持ったりするなど、窯元散策路を中心に様々な人と交流することができ、視野を広くして信・楽・人の活動を行うことができた。今までの活動を継続することも大事だが、続けながら変化していくことで、窯元散策路の特定の場所ではなく散策路内全体を使い、最終的には長野地区に止まらず、信楽全体を見渡せるような団体になれば理想である。

その一方、昨年度 3 月以降活動メンバーが非常に少なく、一人当たりにかかる負担が大きくなってしまったことで、事業実施期間が予定より伸び、あまり活動できない期間が生じてしまったことが課題点として挙げられる。来年度継続して参加できるメンバーが現在 1 名しかいないので、慎重かつ適切に引き継ぎ作業と来年度の活動計画を行いたい。

今後、信・楽・人としての活動が人数的に制限される中でも、観光地として成熟してきている信楽とどう関わり、信・楽・人をどう変えていくかが大切になってきているのではないだろうか。

活動を通して学んだこと （抜粋）

この一年間、様々な人たちと関わっていく中で、人のあたたかさに触れたり、信楽について深く学んだり、アイデアを出すことの難しさ、それらを相手に伝えることの難しさを学んだりすることができた。来年度は、もっと多くの方と関わり、更に多くの視点から物事を見ることができるようになりたい。

片桐七彩（国際コミュニケーション学科 1 回生）

活動を主体的に行わなければならない立場になり、ただ楽しむだけの活動だったものが、信楽のために自分は何ができるのか、色々考えさせられる 1 年間となった。イベント参加を中心にしていたが、観光の力をかなりつけてきた信楽と今後どのような形で付き合うか、変化に対応した活動になっていけばと思う。

坂口亜弥（生活デザイン学科 3 回生）

信・楽・人は少人数であるため、活動をするにも人数が集まらないときに意見を纏めたり、かたちにすることが難しいこともあったが、協力して進めていくことができた。湖風祭では、食器などを制作し販売したが、思うような結果が得られなかったことから、使いやすい形や作る種類について、工夫していく必要があると感じた。

槇沙也加（生活デザイン学科 3 回生）

地域からのコメント （抜粋）

窯元散策路の WA 代表　奥田泰央さん

今年は「信・楽・人」と「窯元散策路の WA」が密に連絡、意見交換ができた年ではなかったかと嬉しく思っています。4 月に行われた「近江楽座」の報告会で「信楽の課題」や「信・楽・人の状況」を改めて話し合えましたね。そして、信楽で月一回行なっているミーティングや常滑研修旅行に御参加頂き、「WA」の現状を知っていただいた上で、色々と御意見や御協力ありがとうございました。次への課題は、信･楽･人の現状打破ですね。＾＾ 信･楽・人企画の「窯元散策路ツアー」をされるなら協力させて頂きますよー。 来年度もよろしくお願いいたします。

指導教員より

人間文化学部　印南比呂志

ここ数年の信楽町では、地域でのイベントが多く開かれている。伝統産業、観光、文化施設などが一体となって活動し始めている。学生たちの活動も多岐にわたるようになってきた。これまで同様の窯元との連携のみならず、観光支援、イベント支援のための商品開発や、広報デザイン、ガイドマップの英訳などまで行うようになった。単なる人手の補助支援だけでなく、学生たちが大学で学ぶ様々な専門領域のスキルが生かされる活動となってきている。この状況は、学生の地域活動が当たり前のことになってきただけでなく、地域の人々もそれらの活動への理解を示すとともに、地域住民自身の本来の活動を見出すようになってきている。これこそが大学という地域資源の役割でもある。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

消しゴムハンコ

信楽窯元散策路マップ（英語版）

第 14 回ぶらり窯元めぐり予告 DM 裏面

＜その他成果物＞

信楽焼（湯のみ、小皿、角皿）

08 とよさらだプロジェクト

ひと刈りいこうぜ！（野菜）

豊郷町の耕作放棄地で、地域の方にアドバイスをいただきながら野菜づくりを行っています。栽培した野菜の直販所、大学生協への販売、イベント出店を行い、地産地消の促進を目指しています。

TEAM DATA

チーム名： とよさらだ
代表者： 堀口実紀 (環境科学部)
メンバー数： 17 名
指導教員： 鈴木一実 (環境科学部)
活動場所： 犬上郡豊郷町
関係団体： 豊郷町役場
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 農家さんとの米作り
★見出し写真：田植え体験（04/29）

(2) 豊郷町での野菜作り

耕起作業（03/06）

(3) 湖風祭参加

(4) 地元のイベント参加

とっと祭り（08/04）

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は昨年度に比べ多種の野菜を育てることができた。また、雑草の防除方法を変えたことで草抜きを省力化できたことや、地域の方の協力のもと、年月や台風によって劣化していたハウスの修補も進み、畑全体の整備を進めることができた。しかし、天候異常や活動に参加できるメンバーの人数不足のため、野菜栽培の管理が上手くいかず、地元の市場などに野菜を出荷することができなかった。これらの原因を踏まえ、来年度は作業時間帯を変えるなど、メンバーがより参加しやすいような活動にしていきたいと思う。

今年度は地元の方からたくさんの地域のイベントにお誘いしていただけた。とよさらだでは地域交流も目的の一つであるため、地域の方と直接交流し、話を聞けたことは学生にとってとても新鮮な体験になったと思う。微力ではあるが地域活性化に貢献できただけではなく、実際に地元の現状を体感したことで、改めて自団体の活動目的を確認することができた。

来年度も引き続き野菜の栽培、地域のイベントへの参加を通した地域交流などを行っていくとともに、野菜販売や他団体との交流を増やしていきたいと思う。また SNS などを使って、とよさらだの活動についての PR も積極的に行っていきたいと思う。

活動を通して学んだこと（抜粋）

豊郷町の方々に外側から来た人間として関わることで、地域活性のために頑張る人たちの姿を学んだ。アプローチの形は違えど、みなさんが地域のことを考え、行動して、そして支えているのだと、「ヨソ者」だからこそ気づけたことが多くあった。

梅田朱里（生活栄養学科 1 回生）

地域の方々に優しく野菜の作り方を教えてもらう中で、協力のありがたさを強く感じた。地域の方々から頂いた学びを、今後どのように返していくかが最重要であると思う。さらに、これからは自団体だけの活動だけでなく、他団体とも交流を広げていきたい。

野崎正興（地域文化学科 1 回生）

とよさらだの活動に参加するまで私は畑作業を行ったことがほとんどなった。実際に行ってみると作業のほとんどが力仕事で農業という職の大変さを痛感した。しかしその一方で収穫の喜びもまた大きなものであり、作業に対しての意欲・姿勢も大きく変わるいい経験をしたと感じている。

外村優真（環境生態学科 1 回生）

野菜栽培の作業を実際に行うことで野菜を見る目が変わった。綺麗で大きな野菜を作るのは難しく、畑で野菜を育てるのはどれだけ手間暇がかかるものかを実感できた。また、地域の祭りに参加する、野菜作りの指導を頂くなどの地域との交流は活動を通じてできた貴重な体験である。

和田真歩（生物資源管理学科 2 回生）

地域からのコメント

豊郷町エコファーマー　森久仁彦さん

今年のとよさらだは夏祭りに参加するなど、やる気があるのは認められる。しかし、もっと自団体の PR をし、豊郷で活動する他団体と交流するなどしてより地域と交流を深めていってほしいと思う。また、連絡や相談をもっと積極的にしていってほしいと思う。

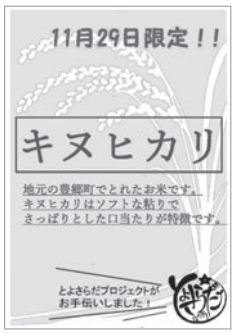
指導教員より

環境科学部　鈴木一実

昨年度に引き続き、週 1 回の会議の定例化は良かったと思う。年間を通してイベントやさまざまな作業スケジュールがあり、積極的に活動されている様子がよくわかった。学生数 17 名でよく頑張っていると思う。

豊郷町のハウスまで遠いので、車を運転できるメンバーがたくさんいるといいですね。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



無農薬米宣伝チラシ

サツマイモ

＜その他成果物＞

新入生勧誘ポスター
ビニールハウスの修繕
ヒョウタン
野菜
（スナップエンドウ、ミズナミニトマト、青しそ、アズキコマツナ、ハクサイ、ニンジン）

09 内湖の再生と水辺コーディネート

水辺の生き物をたくさん知ろう！

琵琶湖の内湖、彦根市内・神上沼や流入域である滋賀県立大学内の環濠において、ブラックバスやブルーギルなど、侵略的外来種を駆除するとともに魚類のモニタリング調査を行なっています。人々がもっと水辺に親しんでもらえるような啓発活動も行なっています。

TEAM DATA

チーム名： 滋賀県大生き物研究会
代表者： 奥井啓介 (環境科学部)
メンバー数： 13 名
指導教員： 浦部美佐子 (環境科学部)
活動場所： 学内 (環濠)、神上沼
関係団体： びわ湖サテライトエリア研究会
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 神上沼における活動

(2) 環濠での活動
★見出し写真：環濠調査（07/16）

(3) 曽根沼における外来魚駆除釣り大会

(4) 土地改良区生き物観察会

(5) 外来魚駆除協力隊の活動

(6) 展示による啓発活動 /
水族展示「県大ミニ水族館」

(7) 湖風夏祭

淡水魚すくい（06/16）

(8) 3 大学合同ワークショップ
（滋賀県立大学・近畿大学・茨城大学）

(9) 城西小学校出前授業
「芹川の生き物について知ろう」

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度からは、新規プロジェクトとして滋賀県立大学の環濠での活動を開始した。調査を開始した 4 月ごろは投網や刺し網を用いて外来魚の駆除および在来魚のモニタリングを順調に行うことができていた。しかし夏以降、環濠で水草や藻が繁茂し始めると、それらが外来魚にとって隠れ場所となり、投網による捕獲量が減少した。釣りによって、大型個体を捕獲することはできたが、釣りによる調査は個人のスキルに依存するため、今後は汎用性があり水草や藻の影響を受けにくい調査手法を模索していく必要があると感じた。今年度の活動によって環濠に生息する外来魚は減少したと考えられるが、来年度の繁殖状況によっては、環濠で外来魚釣りをイベント化し、外来魚の駆除と啓発を同時に行うことが有効であると考えられる。

今年度も昨年度と同様に、愛西土地改良区や湖風祭、科学の祭典で生き物観察会を行い、行政が開催している釣り大会の補助、そして曽根沼にて地域の子どもたちと外来魚駆除釣り大会を主催することができた。こうしたイベントにより、地域の方々と交流し、水辺の環境に興味を持ってもらう機会を提供することができた。そして今年度は、湖風祭において生き物観察だけでなく、淡水魚すくいやイモリすくいといった体験型の催しをすることができた。今後も水辺の生き物に興味を持ってもらうために、生き物観察にとどまらず、魅力あふれるイベントをどんどん企画していくとともに、そこで培われたノウハウを後世に引き継いでいきたい。

最後に、団体が発足してから今日に至るまで、滋賀県大生き物研究会の活動は地域の人々をはじめ、行政や組織の方々に支えられてきた。そのような方々の期待に応えられるように、我々の活動理念である駆除・啓発・育成を 3 本柱とし、これからも活動を継続していく。

活動を通して学んだこと（抜粋）

この活動に参加する前は単に釣りなどをして楽しく生物と関わるのみであった。しかし、外来種の問題などを学んだことによって、より深く生き物について考える良い機会となった。また、投網という新しい捕獲方法も学ぶことができた。

大西太郎（生物資源管理学科 1 回生）

投網や定置網などの普段はあまり体験することのない捕獲方法や、他団体の方との連携、および外来魚の種類を学ぶことができた。今後の課題は、まだ在来魚の種類を覚えられていないことと、活動への主体的な参加ができていないことが挙げられる。

菅沼拓己（生活栄養学科 1 回生）

高校時代から投網での淡水魚類の採集や水生生物の観察会への参加等の経験はあったが、生き物研究会に所属してからは、淡水魚類に特化した活動を行うようになったので、淡水魚に関する知識を更に身につけられた。だまだ分からないことも多いので、今研究会の活動を通して様々な知識を身につけていきたい。

谷口雄哉（環境生態学科 1 回生）

外来魚問題に取り組むうえで、駆除だけでなく、釣りイベントや生き物観察会といった啓発イベントを実施することで、子どもが地域の水辺に興味を持ちやすくなることを実感した 1 年だった。これからも魅力あふれる啓発イベントについて考えていきたい。

奥井啓介（生物資源管理学科 3 回生）

地域からのコメント

彦根市立城西小学校 くすのき学級担任　高仁実香先生

生き物研究会の皆様方には本校児童の活動のためにお力添えいただきまして、ありがとうございました。芹川にいる生き物を実際に見て学ぶことで、子どもたちの興味もいっそう深まり、もっといろいろな魚を見てみたいと、意欲的に取り組むことができました。頂きましたナマズも、大切に子どもたちと育ててまいります。どうか、今後とも城西小学校の子どもたちの成長を見守っていただきますとともに、ふるさと彦根市を大好きだと感じる子どもたちの育成に向けて御支援賜りますようお願い申し上げます。

指導教員より

環境科学部　浦部美佐子

今年度は県内および県外の団体とのコラボレーションを多く達成できたようで、過去の活動と比較しても大変充実した年度となったと思います。メンバーがかなり入れ替わりましたが、新メンバーの皆さんは過去の先輩たちの積み重ねてきた成果や周囲とのつながりをしっかり引き継ぎ、活動を展開させていってほしいと思います。定期的なフィールド活動による地道なデータの蓄積、過去のデータのまとめと公表、イベントや他団体とのコラボに対して責任をもって関与すること、どれも大学での大切な学習の一環です。わからないことは地域の皆様や専門家の方々、先輩からしっかり学んで、どんどん吸収していってください。

DELIVERABLE　成果物／制作物

学術論文
「琵琶湖北湖に流入する野瀬川の魚類相」

投稿文
「守ろう！琵琶湖の在来種
滋賀県大生き物研究会 8 年間の取り組み」

10 タクロバン復興支援プロジェクト

現地の人と共に建物とコミュニティをつくる！

台風により大きな被害を受けたフィリピンのレイテ島タクロバンで復興支援を目的に活動しています。建物の建設を中心として、地域の人と共に、現地の文化や習慣に根ざした暮らしづくり進めています。

TEAM DATA

チーム名： タクロバン復興支援プロジェクト
代表者： 大野宏 (環境科学研究科)
メンバー数： 10 名
指導教員： 芦澤竜一、J.R.ヒメネス.ベルデホ、川井操(環境科学部)
活動場所： フィリピン レイテ州 タクロバン
関係団体： San Carlos 大学
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 現地調査と設計ワークショップ

現地住民との打ち合わせ（08/12）

竹の強度試験（08/21）

(2) 現地建設ワークショップ
★見出し写真：建設作業（02/14）

(3) 設計活動

(4) 建設計画と準備

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の大きな事業は、昨年度から計画を始めた「コミュニティチャペルの建設」であった。2018 年の 8、9 月での建設を目指し、その後、年度末にかけてつくった建物の場づくりを行う予定であったが、建設地の変更に伴いスケジュールが遅れ、今年度中に竣工できなかった。しかし建設地の変更という大きな問題が発生したことに対応し、2018 年 2 月に着工できたことは大きな進展であり、途上国でのプロジェクト進行に対する難しさや注意点について学ぶ良い機会となった。

建設にあたって、住民の中心人物との話し合いを重ねてきたが、800 世帯ある地区の住民と意識共有する難しさを感じた。地域住民のミーティングの回数を増やすこと、もっと多くの人とコミュニケーションを行うことで、建設に対する意識の共有を広めることがこれからの課題だと感じた。また今回、学校に通えない子どもたちが毎日、建設活動に参加してくれた。これは若い子が、まちづくりの一部に参加することであり、非常に良い状況だと感じた。同時に、この建設活動を通してどのような学びや意識を共有できるかという点に関して考える必要があると感じた。設計・建設に関しては、計画を立てた時よりもスケジュールが厳しくなった。フィリピンという熱帯の土地で、肉体労働を据える事に対して、慎重にスケジュールを組むことが必要だと感じたと同時に、ローテクでやることの大変さを痛感した。この経験をもとに今後はきっちりとした建設計画を練っていきたい。

活動を通して学んだこと

フィリピンタクロバンには日本では経験できないような暮らしや温かい人と人との繋がりがあった。笑顔で作業を手伝ってくれる子どもたち、会うたびに様々な話をしてくれる現地の方々と過ごした時間を大切にして、これからも頑張っていきたい。

樋口貴大（環境建築デザイン学科 1 回生）

日本では当たり前のことがフィリピンではそうではないことがたくさんある。自分が 21 年過ごしてきた生活とは違った生活があった。学校に行けず働く子ども、日中暇を持て余す子どももいた。この活動を通じて彼らが少しでもいい暮らしができるようにしていきたい。

溝口裕司（環境建築デザイン学科 3 回生）

初めての海外での建設ワークショップでは、戸惑いや失敗することが多々あった。しかし、それ以上に得たものが大きかった。現地の人たちとコミュニケーションをとりながら関係を築き、プロジェクトを進めることで、その土地に根ざした、親しみのもてる建物ができるということがわかった。

玉村昌平（環境建築デザイン学科 3 回生）

2 月の初めからチャペル建設 WS に参加した。材料の調達、部材の加工を含め施工を行った。外部の人間である私たちがコミュニティスペースを設計し、施工では住民に助けてもらいながら、建築を作るという相互扶助の関係は、机上では学べないものであり、建築の醍醐味を改めて感じる事ができた。

橋本光祐（環境科学研究科環境計画学専攻 1 回生）

地域からのコメント

NewHopeVillge Block Leader　Marife Juano

海沿いから北部に移住してきて、教会もない状態でこの地区のコミュニティを育んでいくことは、私たちにとって困難なことでした。片道 30 分から1時間かけて教会に出かけています。ここに教会が建設されれば、みんな時間を取られることもなくなるし、誰もが教会にいけるようになり、街のみんなに力がみなぎるだろうと思います。プロジェクトメンバーである日本の学生に感謝します。

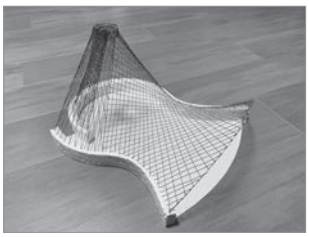
指導教員より（抜粋）

環境科学部 J.R. ヒメネス . ベルデホ

2013 年 11 月 8 日、台風ヨランダがタクロバン市に影響を及ぼし、市街地全体の 46.3%が被災し、35.3%が完全に消失し、12.5%が中程度の被害を受けた。台風の中心から半径 100 km 以内に位置する住居の 78%が影響を受け、木造構造の建物の 83%とニパ構造の建物の 94%が完全に破壊された。被害が最も大きかったのは南部地域とタクロバンの沿岸地域だった。海岸から離れた繁華街や市内中心部に位置する建物は、主に鉄筋コンクリートとコンクリートブロック構造で建てられているため、被害は比較的少なかった。

この都市の復興は、BBB（Build-back-better）プロセスとして知られる災害後に都市を再構築する興味深い事例である。 BBB プロセスの枠組みの中で、このチャペル建設プロジェクトは、第一に、超台風ヨランダ後の影響を受けたタクロバン市のコミュニティーの研究と建設に焦点を当てている。第二に、現地の建設手法と材料（ニパと竹）、そして第三に、地域全体でチャペルをつくることでコミュニティを強化しようとしている。

DELIVERABLE　成果物／制作物



コミュニティチャペルの模型

New Hope Villge で建設している
コミュニティチャペル

11 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム

「復興」のその先へ！

東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県南三陸町田の浦地区で、コミュニティ再生のボランティア活動を行っています。現地での交流イベントの企画・運営を行うとともに、活動で得た繋がりや経験を滋賀県内に広めるために広報活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名： 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
代表者： 杉村麗 (工学部)
メンバー数： 22 名
指導教員： 鵜飼修 (地域共生センター)
活動場所： 宮城県南三陸町歌津地区田の浦、滋賀県内
関係団体： NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 **2013** **2014** **2015** **2016** **2017**

PROJECT **実施事業**

(1) 定期訪問
★見出し写真：おちゃっこクリスマス会（12/23）

(2) 海の大運動会

ウキうき浮き玉転がし（08/11）

(3) 3.11 キャンドルナイトの開催

キャンドルを並べた様子（03/11）

(4) 広報活動

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は 4 月まで 4 回生 1 人、3 回生 1 人で活動をしていたが、新メンバーの募集を積極的に行ったことでコアメンバーが 2 回生 1 人、1 回生 5 人を加えることができた。より意欲的なメンバーが増えたことで今まで行っていた活動を見直し、海の大運動会では新競技の開発、新たな情報ツールの開拓などを行うことができた。また、次のイベントでは何が必要なのか、次の会議では何を行うのかを伝えることで密な情報の共有ができたと考える。そして、今年は積極的に活動記録を残すことを心掛けた。というのも、今まで記録がほとんど残っていなかったために経験者の記憶や写真の断片的な記録で賄っていた部分が多く引継ぎに苦労していた。さらに今年度は 1 年目の者が多かったため来年以降に活動を引き継ぐには資料が必要だと判断したからである。

反省としては 2 つある。1 つ目はイベントに参加できなかったことである。湖風祭や外部の防災イベントにあまり参加できなかったため宣伝活動が SNS ツールに頼るものになってしまった。今後は早くからイベントの開催日程を調べ積極的に申し込んでいくとともに、学内の他団体と協力してより宣伝できればと考える。2 つ目は地域の若者を巻き込めなかったことである。今まで関わってくださった地域の方だけでなく新しい方と関わる機会がつくれなかった。今後も活動を続けていくにあたり若者とより関わっていくことが重要だと考えられるため、来年度以降積極的に若者を呼び込める企画、宣伝方法を作っていきたい。

活動を通して学んだこと （抜粋）

宮城県田の浦へこの１年で計３回訪れた。初めはただ被災地を見たい気持ちで参加したが、東北の小さくも豊かな漁場に暮らす人々と会って話すことで、滋賀とは異なる方言や慣習に触れ、被災者と支援者の関係だけでは終わらない多様性を感じることができた。

川嶋凜海（国際コミュニケーション１回生）

東日本大震災があった当時、私は小学生だった。当時は東北の状況はテレビや新聞でしか知る事ができず、被災地を直接助けることができなかった。しかしこの活動を通して被災地の方々と交流し、直接支援できている。

長島宏祐（地域文化学科１回生）

イベントの企画や運営について学んだ。特に海の大運動会では、現地の漁師の方と打ち合わせするなど、普段できないことが経験できた。地域の高齢者や漁師の方、他大学の学生など様々な年代の人と交流することで、自分のコミュニケーション力が高まったと感じる。

早崎水彩（環境政策・計画学科１回生）

田の浦に訪れたことで改めて東日本大地震の津波被害の大きさを実感した。そして私たちが震災などの自然災害とどう向きあって行くべきなのかを考えるきっかけになった。また、被害を最小限にするための取組の大切さを学んだ。

内堀桜花（環境政策・計画学科２回生）

地域からのコメント

佐藤涼さん

自分の母がおちゃっこ会に参加していなかったらこの存在を知らなかったと思う。若い人は仕事があるし、いまさら行っていいのかという思いもあって参加しにくい。海の運動会には参加したいなと思っている。

阿部みとりさん

漁業をしている家庭は仕事があるから若者に来てもらうことは大変だと思う。学生が手伝うことでつながりができると思うけど、手伝った家庭だけ少し楽できたりするから偏りが出るっていう人もいる。難しい。チラシを配るのはあまり効果がないと思う。ちゃんと面と向かって「こんなイベントがある」と言いに回った方がいいと思う。

指導教員より （抜粋）

地域共生センター　鵜飼修

2011 年 6 月からはじまった田の浦での活動も 8 年目を迎えた。県大からの延べ訪問人数は 1000 人を超えるのではないだろうか。3 月 9 日には木興プロジェクトの OB 会が現地で開催された。学生時代の活動の場が、卒業後の拠り所となることは大変うれしいことである。学生にとっても、田の浦での体験や人々とのつながりは、人生の中で変えようのない楔となるのだと思う。現地は少子高齢化、人口減少の最先端のような状況にある。一方で、世界三大漁場の三陸の豊かな海とともに生きる貴重な暮らしがある。そうした場との出逢いや交流活動、様々な体験は、なかなかつくろうと思ってできることではない。東日本大震災がきっかけではあるが、そのきっかけに感謝して、住み続けられるまちづくりに参画できることを現地の方々との交流でかみしめてもらえればと思う。現地では学生たちと年令の近い若い人たちの動きが見えるようになってきた。震災当時、仮設住宅で鬼ごっこをしていた子どもたちは高校生や大学生になろうとしている。今後は同じ世代の交流を深め、新しい思考と実践力で、田の浦のまちづくりが展開されていくことを期待したい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

メンバー募集兼海の大運動会協力者募集チラシ

12 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

地域よし、学生よし、古民家よし

築 140 年の古民家で、改修作業、イベント企画、ひょうたんの栽培・加工販売など様々な活動を行っています。地域の方とはもちろん、学部学科を超えた学生のつながり、留学生との交流といった古民家を拠点にあらゆるつながりが生まれることを目指しています。

TEAM DATA

チーム名： かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
代表者： 中江祥子 (人間文化学部)
メンバー数： 20 名
指導教員： 林宰司 (環境科学部)
活動場所： 彦根市上岡部町
関係団体： 上岡部町自治会
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 **2012 2013 2014 2015 2016 2017**

PROJECT **実施事業**

(1) 古民家改修事業

外壁補修（03/13）

(2) イベント開催事業
★見出し写真：節分パーティー（01/27）

(3) ひょうたん事業

ひょうたん水出し作業（09/16）

(4) 地域行事への参加

(5) かぶの栽培

(6) かみおかべ新聞の発行

(7) ひょうたんの出展

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

活動の成果としては三つ挙げられる。一つ目は、地域行事に多く参加できたことだ。今回は複数の地域行事に参加する事で、より上岡部町のことや、地域の方々のことを知ることができた。

二つ目は、新たなイベントを開催できたことだ。特に足湯イベントでは、地域のお年寄りの方々に感謝の気持ちを伝え、コミュニケーションを図ることが目的であり、 よい交流の場となった。

三つ目は、ひょうたんを使って本団体の存在を広めることができたことだ。外部でのひょうたんの加工体験や販売を行うことで、子どもたちにもひょうたんに触れ合う機会をもってもらうことができ、ひょうたんについてあまり知らない人にもひょうたんの良さを知ってもらうことができた。

課題としては二つ挙げられる。一つ目は、活動に積極的に参加するメンバーの固定化である。特にひょうたんやかぶの栽培、地域行事に参加するメンバーが固定化され、 負担が偏ってしまっていた。ひょうたんの継承の思いや、上岡部町の若者不足の現状、地域行事へ参加する事の意義を共有し、全員で分担し、協力して取り組めるようにしたい。二つ目は、古民家のメンテナンスをしっかりと行うことができなかったことだ。今後は正しい掃除の仕方を学び、分担し、交代制で掃除に行き、古民家の状態を維持できるようにしていきたい。

現在イベント、ひょうたん、改修の三つの班体制で活動を行なっているが、各班で情報を共有し、自分の班の仕事だけではなく、お互いに協力し合って取り組めるようにしていきたい。また、もっと上岡部町全体へと視野を広げた活動をおこなっていきたい。そして、他の近江楽座団体と連携をとったり、コラボ企画を考案することで、横のつながりを作ることも考えていきたい。

上岡部町の歴史や現状を知り、私たち学生ができることは何か、そしてメンバーが自分の学んでいることを活動にどのように生かしていけるのかについて改めてメンバー間で話し合っていきたい。

活動を通して学んだこと

古民家で催した行事には多くの方が参加してくださり、また地域行事に参加させていただいたことで地域の方、特に子どもたちと触れあうことができた。来てくださる方に適した行事を考えることや、それに伴う事前準備の大切さ、古民家維持の大変さを学ぶことができた。

岩佐紗歩（地域文化学科１回生）

子どもたちの活気が印象的でした。古民家にたどり着くまでは「賑わい」とは程遠い雰囲気の道を歩むのですが、イベントを開くとたくさんの人が集まって下さいます。子どもたちはもちろん、親御さん同士も交流する場の一つとなれていました。素敵なことだと思います。

雁瀬真七実（生物資源管理学科１回生）

外部イベントに多数参加させていただき、ひょうたんの加工体験を行うことで、他地域の方々と交流をすることができた。そこで、上岡部町やひょうたん、私たちの活動を広めるという貴重な経験をさせていただいた。この経験から、伝統を次の世代に繋げることの大切さを学ぶことができた。

岩田紗矢香（生物資源管理学科２回生）

イベントを通して、地域の方々からいろいろな話を聞くことができ、かみおかべのことについて新たにたくさん知ることができまた。メンバーで話し合って企画した遊びなどにも、子どもたちが楽しんで参加してくれたので、良かった。今年度の成果と課題を、これからの活動につなげたい。

野澤瑞起（地域文化学科２回生）

地域からのコメント

2018 年度上岡部町自治会長　大西省三さん

上岡部町も独居家庭、空き家が多くなり高齢化率も高くなってきている現状は、他町と変わりない状況です。そうした中で「かみおかべ古民家活用計画」で若い力が町内に入ってきてくれることは、町の活性化になり元気をもらえるので、ありがたいです。ひょうたん作り、ピザパーティー等、多くのイベントを催したり、春と秋の祭り、地蔵盆、道普請等の町内行事にも積極的に参加して明るいニュースを提供して頂いていることに感謝しています。今後、ますます活発に活動して町内に「古民家活用あり」の位置づけになる事を期待しています。

指導教員より（抜粋）

環境科学部　林宰司

今年度は建物の中で開催のイベントだけでなく新しく屋外でのバーベキューや足湯イベントを開催したり、地域行事に多く参加するなど、外向きの活動ができたことがよかったと思います。また、屋外バーベキューの企画は、住民の方からの要望で実現したものでした。住民の方との共同で企画・運営する方法を確立し、建物の活用ができるようになればよいと思います。

その反面、課題も多く見られました。課題の第1は、重要な事項の引継ぎです。組織内のメンバーは毎年一定数が入れ替わり役員も交替しますが、外部から見たら同じ組織です。事業の継続性を持たせるために引継ぎを確実に行う方法を確立して下さい。伝統野菜の種子についても引継ぎが不十分なために紛失してしまったようですが、保存会の方に連絡を取って復活して頂ければと思います。第2は、過去の資産の有効活用です。数年前に上岡部町の歴史について調査した結果を小冊子にまとめましたが、その存在自体を知らないメンバーが多数います。自分たちで作った重要な資産ですので、メンバー間に周知し、これを活用するような方法を考えましょう。第3は、自分たちでも住んでみたくなるような魅力的な場所にすることです。メンバーの皆さんにとっての秘密基地的な場所だけではなく、居住性のよい空間に改修をしていけるよう心掛けて下さい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

かみおかべ SB 新聞

ひょうたん加工品

小かぶ

13 未来看護塾

すべての人に健康と福祉を

子どもや高齢者、障がいの有無に関わらず、ボランティアを通して地域の方々が心身ともに健康になってもらえるよう活動しています。様々な人とのふれあいの中でコミュニケーション能力や健康についての知識など、将来に必要な力を身につけていきます。

TEAM DATA

チーム名： 未来看護塾
代表者： 北村菜都美 (人間看護学部)
メンバー数： 142 名
指導教員： 伊丹君和、米田照美 (人間看護学部)
活動場所： 学内、彦根市、宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： 彦根市立病院、NPO法人ぽぽハウス、どんぐり保育園
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT **実施事業**

(1) ビバシティ彦根「応援！生き活き健康生活！」（生き活き健康支援活動）

(2) 田の浦 生き活き健康広場

ズンドコ体操の様子（09/23）

(3) 健康しがマルシェ

(4) 彦根市立病院ふれあいまつり

(5) 湖風夏祭、湖風祭 ちびっこ広場出展
★見出し写真：湖風夏祭（06/16）

(6) 西今町・野瀬町での長寿会に参加

(7) 野瀬町での地蔵盆、防災訓練に参加

(8) もりのこ保育園の夏祭りに参加

(9) 彦根市立病院での小児アレルギー講座にて託児のお手伝い

(10) 彦根市立病院 院内デイケアでのクリスマス会、新年会に参加

(11) NPO ぽぽハウス主催イベント他、クリスマス会、卒業式のボランティア

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の大きな成果としては、11 月に開催された「健康しがマルシェ」に出展させていただいたことである。未来看護塾では、発足当時から継続している活動が多くあり、先輩方から受け継ぎ毎年行なっていたからこそ、次の活動につながったのではないかと感じている。

8 月と 11 月に行ったビバシティ彦根での健康イベントや、湖風祭のちびっこ広場では、地域に住む人々が対象であるため、子どもからお年寄りまで多くの方が参加してくださった。「毎年来ている、楽しみにしている」と言ってくださる方もおられ、活動を継続していくことの大切さを強く感じた。それと同時に、新しいことを取り入れつつ、地域に住む人々がより健康でより良い生活を送るには何が必要かということを考え、活動内容を企画・実施することも重要であると分かった。

課題としては、ミーティングを上手く活用できず、所属している多くのメンバーの活動への参加に繋げられなかったことだ。今年度はミーティングに参加する人が前半からとても少なく、声かけをしたり、集まりやすいタイミングで行うなど工夫をしたが減少する一方だった。来年度に向けて中心メンバーでどうしていくべきかを考え改善していくことが必要である。

未来看護塾の活動は、地域の方々と関わりを持つ中で生き活きと健康に笑顔で生活できるよう支援することが目的であり、活動を行う私たち学生自身も生き活きと楽しみを感じられることが重要である。多くの所属メンバーがいることを強みとできるよう、全体で明るく楽しく活動していけるよう今後も頑張っていきたい。

活動を通して学んだこと

一年間を通して施設に行ったことで、子どもたちの成長過程を感じることができ、座学では学ぶことができない経験ができた。また、様々な子どもとの関わり方や個性、子どもの日常の小さなことを大切にする姿勢に、自分自身のコミュニケーションの取り方や生き方を改めて問い直すきっかけとなった。

遠藤優希（人間看護学科 2 回生）

地域の活動においては関わる方々の多くが初対面であり、コミュニケーションの面で学びを深めることができた。また、受け身ではなく自ら考えて動く大切さについても学ぶことができた。これからの人生において、看護に限らず様々なところで生かされる経験ができたと思う。

太田康祐（人間看護学科 2 回生）

大学周辺の方々だけでなく地方を超えて様々な年代の方と接する機会があり、大学生活だけでは体験することができない経験ができた。私たちの笑顔を届けることが目標であり、その目標が達成できたと同時に、様々な年代の方からの「ありがとう」という言葉や笑顔を見ることができ、元気を与えてもらえた活動であった。

福井智華絵（人間看護学科 2 回生）

地域に住む様々な方々と関わらせていただく中で、健康状態や年齢などそれぞれの個性に合わせ、私たち看護学生ができること・すべきことを自分たちで計画し実施することで、知識や技術の未熟さや自分にとっての「看護」を見つめなおすきっかけとなった。

北村菜都美（人間看護学科 2 回生）

地域からのコメント

彦根市立病院　藤井裕子さん

未来塾の皆さんには、院内デイケアでお手伝い頂いています。認知症の患者さんに温かく手を添え、寄り添い、また、行事やゲームでは大いに盛り上げて頂き、御家族も驚かれるような患者さんの笑顔をたくさん引き出してもらっています。また、クリスマス会では、プレゼントを用意して頂き、患者さん同様にとてもうれしい気持ちになりました。院内デイケアの開催にはなくてはならない存在として、感謝しています。

指導教員より（抜粋）

人間看護学部　伊丹君和

「未来看護塾」は、滋賀県立大学人間看護学部の 1 期生たちが立ち上げました。少子高齢社会の今、地域では高齢者さんや子育て中のお母さんたちが心と身体の健康について相談できる仲間を求めておられます。また、いつ起こるかわからない災害への対策をはかる必要もあります。そのためには地域のネットワークを拡大していくことが大切です。

「未来看護塾」は、彦根市内の病院や施設などで、入院患者さんや障がいをもつお子さん、まだ発達過程にある保育園児などを対象として、心と身体の健康、発達支援を行うなど、日々奮闘しています。毎年実施しているビバシティ彦根における「応援！生き活き健康生活」では卒業生たちの協力も得て、健康や防災などのイベントも行っています。また、被災地である宮城県南三陸町においても健康交流活動を継続しており、笑顔と元気を交換し合っています。このような「未来看護塾」が行うさまざまな活動は、看護学生ならではの視点で地域課題の解決にもつながるとともに、自ら学ぶ力、それぞれの専門分野への興味・関心や知識・技術を高めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。また、悩み、試行錯誤を重ねながらボランティア活動を行う中で、実行力と豊かな感性も育んでいます。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

活動パネル（夏湖風祭）

活動パネル（病院祭り）

＜その他成果物＞

健康しがマルシェ用活動紹介パンフレット

14 子ども学習支援サポーターズ

子どもの学習支援と居場所づくり

彦根市の中地区公民館で行われるLL教室を中心とし、子ども食堂や外国にルーツを持つ子どもたちの教室など、7つのフィールドを用意。子どもたちの学習支援と居場所づくりの活動に取り組んでいます。子どもたちに寄り添い、一緒に考え、話し、元気に遊びます。

TEAM DATA

チーム名：子ども学習支援サポーターズ
代表者：石神愛海（人間文化学部）
メンバー数：10名
指導教員：原未来（人間文化学部）
活動場所：学内、彦根市、愛荘町
関係団体：NPO法人Links
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 子ども学習支援活動

(2) サポーターズ交流会
★見出し写真：サポーターズ交流会（10/08）

(3) 各種イベントの参加・実施

中地区文化祭出展（10/21）

卒業お祝い会（03/10）

(4) 広報活動

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

一年間、LL教室での子ども学習支援活動を中心に、子どもサポート活動を実施した。

子ども学習支援では、子ども一人ひとりに合ったコミュニケーションをとり、それぞれの習熟状況に合わせた学習指導を行った。単に教えることよりも、子どもを受容すること、自ら学習に向かえる心や学習基盤をつくることを大切に活動した。今後もそうした基盤づくりや、宿題や定期テスト、入試など子どもが直面する学習課題に対して適切な援助を行っていきたい。

サポーターズ交流会実施では、子ども学習支援サポーターズ主催で計5回のサポーターズ交流会を行い、こどもサポートに関して学生・地域の大人が意見を交換した。また、毎回サポーターの中から発表者をたて、自由発表会を行った。サポーター同士がお互いの専門や活動について知り、交流が深まるとともに、お互いに知識を広げ、学びあうことができた。課題は、学生と地域の大人の予定を合わせることが難しいことである。今後は、参加したい人ができる限り多く参加できるように、早めに日程調整をしていきたい。

Links主催イベントへの参加や、学サポ主催イベントの実施では、子ども・地域の大人・学生の交流を深めるとともに、子どもの経験の幅を広げることができた。来年度は、レクリエーション系のイベントに加えて、子どもが将来を考えたり、入試制度や志望高校について詳しく調べたり理解できるようなイベントを、子どもの現状に即して考えていきたい。

今年度実施した事業を振り返り、改善点を踏まえて、来年度も継続していきたい。継続にあたって、メンバー不足という課題がある。SNSや広報チラシを活用して、積極的に新メンバーを募集していきたい。

活動を通して学んだこと

小学生、中学生と関わることを通して今の子どもたちは何に関心を持ち、何を考えているのかを知ることができた。また勉強を教える時は子どもたちの立場になって物事を考える必要性があると気付かされた。サポーターズとの交流で自身の視野を広げることができた。

長島宏祐（地域文化学科 1 回生）

「子ども学習支援」ではあるが、5 歳程度の年齢差しかない大学生が「子ども」と呼ぶことに若干の違和感を覚えている。学習面でも精神面でも子どもに対して何かできるほど、大人ではないと改めて感じる 1 年だった。何かを与える立場ではなく、一緒に考えて活動や空間を作っていく身近な一人として今後も活動していきたい。

池上笑（人間関係学科 2 回生）

子どもとの信頼関係が一番大切だと学んだ。それがないと、学習指導は子どもに響かない。信頼関係は子どもの心の安定を生み、学習の基盤をつくる。勉強を教えるだけでなく、楽しい時間を一緒に過ごして繋がりを深めたい。そのうえで、子どもに必要なサポートを提供できるよう今後も活動していきたい。

石神愛海（人間関係学科 2 回生）

子ども一人ひとりの個性や考え方が異なり、学習支援の現場に来るときも一人ひとり求めているものが異なることが分かった。子どもが何を求めているかを知るには、サポーター自身も子どもと同じ目線に立ってコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことが大切だと思う。

上西広粋（工学研究科機械システム工学専攻 2 回生）

地域からのコメント （抜粋）

NPO 法人 Links 代表　柴田雅美さん

私たち NPO 法人 Links は学び育ち LL 教室、ひとり親家庭の子ども支援活動など多くの子どもの居場所活動を行なっていますが、サポーターさんの存在がなくては支援活動ができません。今年度、組織として子どもサポーターズができたことで、継続的に私たちと協働していただけることになりました。居場所活動が安定でき、その居場所の安定は子どもたちの心の安定をもたらしています。また、子どもサポーターズの学生さんが、地域が大学生と協働することの意味をよく理解しておられることも、安心して連携できる大きな要因です。

クリスマス会や卒業お祝い会での県立大学アカペラサークルとのコラボ企画や、「あかりんちゅ」とのコラボ企画も、子どもサポーターズならではのアイデアで、温かみと厚みのある素晴らしい企画でした。皆さんの活動が来年度、再来年度と長く続く活動になり、地域になくてはならいものになることをに期待しています。これからも一緒に頑張りましょう。

指導教員より （抜粋）

人間文化学部　原 未来

これまで県大生が個人レベルで続けてきた取組を、近江楽座として組織化しスタートさせたことには大きな意義があります。継続性への期待が高まるとともに、より積極的な関与によって活動の幅や深みも出てきた一年だったのではないでしょうか。対人援助の活動では、援助する人々から発見や気付きを得ることが実は少なくありません。参加している学生の多くが、一方的な「支援」や上からの「支援」が子どもの心に響かないことを感じ取っているようです。子どもたちとどのような関係を取り結び、何を目的に援助するのかということは、現場で子どもたちとかかわりながら体感し、悩み、ときに仲間と話し合いながら深めていくものです。このような、目の前の対象の現実から出発し、かかわり、議論し合いながら、取組をより充実したものへと深化させていく過程は学びの基礎となるものでしょう。

今後も、自分たちの取組を定期的にふりかえり、悩みや思いを話し合いながら、活動を継続・展開していくことを期待します。地域の一員として、支え支えられる活動が、継続的に展開されることを願っています。

DELIVERABLE　成果物／制作物

ニューイヤースポーツ交流会フライヤー

あかりんちゅコラボ企画フライヤー

子ども学習支援サポーターズ募集フライヤー

15 Taga-Town-Project

多賀の魅力を発見・発信！

多賀町を拠点に学生目線で町の魅力を発見し、町内外に発信する活動をしています。食文化を伝えるためにレシピ動画を作成したり、「写真ワークショップ」を企画したり、お店のフリーペーパーを作成するなど、多賀の魅力を発掘、発信しています。

TEAM DATA

チーム名：Taga-Town-Project
代表者：内山夏希 (人間文化学部)
メンバー数：6 名
指導教員：迫田正美 (環境科学部)
活動場所：犬上郡多賀町
関係団体：一般社団法人杜ノ実、株式会社雄夢、多賀語ろう会 他
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 写真ワークショップ

第 3 回写真ワークショップ（12/08）

(2) 多賀の情報発信プロジェクト

郷土料理レシピ作り（06/05）

(3) フリーペーパー作成

(4) 多賀語ろう会への参加

(5) イベントへの参加
★見出し写真：あけぼのパーク多賀 20 周年事業（11/03）

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年も活動人数が少ない中、個人でもできる情報発信に力を入れ、その他様々な活動にも取り組んだ。特に情報発信に関しては、SNS やホームページを使い、それぞれにあった発信の仕方で多賀の魅力を十分に伝えることができたのではないかと思う。イベントに参加する度にブログを更新したり、多賀にあるお店をまとめた「多賀おすすめのお店」のページを分かりやすく地図にまとめたのは、多賀の活動を様々な人に知ってもらえたという点で良かったと思う。またチラシ作りや動画制作など新たなことに苦戦しながらも取り組み、メンバー自身も成長することができた。

「写真ワークショップ」など自ら企画したイベントも開催することができた。メンバーも参加者の皆さんと多賀の「写真映えスポット」を見つけることができた。3 月に行われる新中央公民館オープニングイベントでこれまで撮ってきた写真を展示し、さらにフォトブックを作り販売する予定である。

今年はあけぼのパーク多賀 20 周年事業やなど多賀町内で新しい動きがたくさんあった。準備の過程で「多賀語ろう会」の皆さんや地域の方と協力することが多かったが、地域の人が多賀のことをよく考えていることを知り、驚くと同時に町民の「多賀が好き」という気持ちが伝わってきた。またイベント時に切り絵のサークルや地域の人同士で料理を作るサークルなど様々な活動団体があることを知り、そのような方たちとも交流を深めることができた。今後はそのような方たちの活動も紹介していきたい。

反省点として、人数が少ないゆえに個人での活動が多くなってしまったこと、またミーティングに全員が集まることが少なく、メンバー全員に連絡を行き渡らせることができなかったことがある。特に新入生に対して、Taga-Town-Project の活動内容をしっかりと伝えることができなかったのが心残りである。これからはメッセージツールを使った連絡だけでなくメンバー同士対面で話す時間を増やせるとよい。

多賀町は彦根市の隣にあるが、多賀町のことを知っている人は少ないのが現状である。今年は学生や若い人をターゲットとして発信活動を行った。これを継続し、多くの人に多賀町のことを知ってもらえれば嬉しい。

活動を通して学んだこと（抜粋）

今年度は、新中央公民館準備部会「多賀語ろう会」に参加することや、絵馬通りの店舗のフリーペーパーを作ることによって多くの地域の方と関わることができたので良かったと思う。来年度以降も、学生からみた多賀のいいところ、面白いところを発見・発信していきたい。

龍見瑞季（環境生態学科 2 回生）

メンバーが少ないながらも、イベントのお手伝いやワークショップの主催を積極的に行えた。今までの活動を振り返り、やって良かったこと、できなかったこと、やりたかったことなど後輩に伝えつつ、この活動が多賀町でどう発展していけるのか、学生であったことと多賀町民としての立場からも、学生と一緒に考えていきたい。

石見春香（環境科学研究科環境計画学専攻 2 回生）

今年は代表を務めることになったが、多賀を知る度にその魅力に引き込まれている自分がいた。同時に多賀をもっと色々な人に知ってほしいという思いが強くなり、よそ者からみた多賀の魅力を中心に情報を発信していった。メンバーとして活動を通し、このような素晴らしい地域に関わることができて幸運だと思った。

内山夏希（国際コミュニケーション学科 4 回生）

地域からのコメント

多賀町立文化財センター　音田直記さん

多賀町立文化財センターでは、2018 年 3 月に「多賀町歴文化基本構想」を策定し、歴史文化・自然を生かしたまちづくりを具体的に進めるための取組を検討し、様々な事業を実施しています。その中でも、昨年度より継続している「多賀語ろう会」による新中央公民館のオープニングイベント「あけぼのパーク多賀 20 周年事業」での「食まつり」開催、まち歩き事業の「多賀ぶら」を中心に、TTP には共催事業として多くの御支援と御協力をいただいています。

大学生として、地域のことを理解し、課題について何ができるのかを地域の人と一緒に見つめ直そうとする積極的な意見をいただき、活動していただいています。特に、地域の方々との交流を大切に考えていただいていることは、事業の開催意義や価値を高め、世代間を繋ぐ役割も果たしていただいていると思います。若い世代の温かい思いや考え方、情報の取りまとめや発信力は、行政に新鮮な影響を与えており感謝しています。

今後も滋賀県立大学と地域のパイプ役として、いろいろな取組に参画し、御支援いただける関係を継続し発展していただきたいと願っています。

指導教員より

環境科学部　迫田正美

今年度はそれぞれのメンバーが多賀の町、多賀の人々との交流の中から、学生として、学生だからできることを、それぞれに工夫しながら模索し、数々のイベントや会合に積極的に参加することで、地域の人たちとのつながりを深め、結果として様々な媒体を用いた質の高い情報発信につなげられたことは、これからの活動に向けて大変意義深い１年でした。また、メンバーが少ない中で、写真ワークショップを立ち上げ継続的に開催できたことも、地域の魅力を発見しながら発信にもつなげることのできる良い試みでした。個々のメンバーがそれぞれに努力と工夫をした結果だと思います。よくがんばった1年でした。

DELIVERABLE　成果物／制作物

Taga-Town-Project 活動紹介パネル

＜その他成果物＞

絵馬通りフリーペーパー（ORANGE TREE）
絵馬通りフリーペーパー（石栗庵）
絵馬通りフリーペーパー（多賀あさひや）
多賀ふるさと楽市チラシ
桃原ごぼう収穫祭チラシ
ふるさと多賀の食まつりチラシ
あけぼのパーク多賀 20th イベント缶バッチ
写真ワークショップチラシ
門前町簡単マップ
新入生勧誘チラシ
店舗フリーペーパー（大杉いわなや）
店舗フリーペーパー（夢現舎 久）
大杉地図
写真集「多賀の風景」

16 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

モットーは「無理なく、楽しく！」

障がいを有する人と学生が互いに成長することを目的に、NPO法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの支援活動を行っています。活動を通じて、障がい児・者を支える地域づくりを推進することも目指しています。

TEAM DATA

チーム名： ボランティアサークル Harmony
代表者： 保井綾華 (環境科学部)
メンバー数： 11 名
指導教員： 中村好孝、杉浦由香里 (人間文化学部)
活動場所： 学内、彦根市、東近江市
関係団体： NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 定例活動
★見出し写真：定例活動（09/22）

(2) 宿泊体験

お泊り会（11/25）

(3) クリスマスコンサート

ダンスショー（11/24）

(4) カヌー体験

(5) バス旅行

(6) 定例会議

(7) 66 まつり

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

子どもが描く絵に変化がみられました。例えば、絵を描くときに暗い色を使うことが多かった子どもが以前よりも明るい色を使うことが多くなりました。他にも、親がいないと活動することが難しかった子どもが、親が近くにいなくても学生と一緒に活動できるようになりました。これも信頼関係を築くことができたからであると考えられます。

今後も担当の固定を続けて行おうと思いますが、固定した学生と子どもの間にしか信頼関係が生まれないのではあまり意味がないと思います。新しい組合せを試してみることで複数の子どもと複数の学生の間で信頼関係を作ることができるようにしていきたいと考えています。

課題は積極的に参加する学生の人数が少ないため、負担が大きくなってしまうことです。学生の負担が大きくなってしまうことをメロディーの方も大変心配されており、改善していく必要があります。メンバー全員が場所の予約など様々な活動に積極的に関われるようにしていく体制を作っていく必要性があります。

今年度から、コアメンバーとメロディーの代表の方とで連絡をとりあうようにしたため、コアメンバー同士の情報共有がスムーズにいき、代表の負担も少し軽くなったと思われます。来年度は最上級生となる 3 回生のメンバーが非常に少ないので、下級生たちが様々な経験をすることができるようにすることで、次の世代への引き継ぎを容易にすることできるようにしていきたいです。

活動を通して学んだこと（抜粋）

ボランティア活動に憧れていて「誰かを支えてあげる人になりたい」と思い、入部しました。先輩方が率先して活動に取り組まれていたことが印象に残り、自分もそうなりたいと思いました。また、障がいのある子どもたちともコミュニケーションが取れるようになり、ハーモニーで活動ができて良かったと感じました。

中森麻由（生物資源管理学科 1 回生）

障がいのある人たちにかかわるボランティアは、私にとってほとんど初めての経験でしたが、こういった活動が子どもたちにとって大切なものなのだと感じました。今後も、ハーモニーの活動にかかわるとともに、生活の中で少しでも障がいのある人々について意識してみようと思います。

谷口あさぎ（環境政策・計画学科 1 回生）

基本的にお手伝いや準備に徹することが多かったのですが、子どもたちが見せてくれる素敵な笑顔に彼らがちゃんと楽しんでいることが分かり、こちらも自然と笑顔になれました。看護師を目指して勉強している身にとっても、貴重な学びを、ハーモニーの活動を通して得ることができたと思います。

熊谷美羽（人間看護学科 1 回生）

地域からのコメント

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー　田中千代子さん

この春に、我が家の息子は養護学校を無事卒業して、いよいよ社会人となります。障がいのある人にとって、日常はもちろんですが、余暇をどのように過ごすのかも大きな課題です。メロディーで様々な体験をさせて頂き、そのボランティアとしてのハーモニーの位置づけは大変ありがたいもので、重要なものになります。

普段の生活の中で親ならば見過ごしてしまうことや、できないことを、若いお兄さんやお姉さん方の視点で助けられて、息子は成長してくれたと思っています。

また、こういう活動を通して、大学を巣立っていく若い人たちが福祉関係の仕事に携わることも多く、ありがたいなとつくづく実感しております。

指導教員より

人間文化学部　中村好孝

当プロジェクトは、今年度も充実した活動を行なった。連携している NPO や地域の皆様にお礼申し上げます。活動は、作品展示の機会が増えるなどの成長もしているし、行事に OB も顔を見せてくれたりするなど、本活動の歴史を改めて感じた。ただ、今年度に限ったことではないのだが、参加学生の仕事量が多くて負担なのではないかという問題はある。せっかく有意義で面白い活動を続けているのだから、参加する学生の人数が増えて良い方向に向かってほしい。クリスマスコンサートなどは、ちょっとしたイベントの主催を経験できる機会だし、人によっては着ぐるみの中に入って DA PUMP を踊ったりもする。多くの学生が参加して地域と連携する活動として、今後とも続くように頑張ってほしい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

クリスマスコンサートチラシ

クリスマスコンサートパンフレット

17 座・沖島

沖島でまなぶ、まじわる、ささえる

日本で唯一、湖に人が暮らす島、沖島。島民は漁業を生業に琵琶湖と共に暮らしてきましたが、過疎化などにより、暮らしの継承が危ぶまれます。このような状況に「学生も何かできるのでは」と、「学ぶ・まじわる・支える」の3つを目標に島の振興のため活動しています。

TEAM DATA

チーム名：座・沖島
代表者：柿佑爾 (人間文化学部)
メンバー数：41 名
指導教員：上田洋平 (地域共生センター)
活動場所：学内、近江八幡市沖島町
関係団体：沖島町離島振興推進協議会、沖島自治会
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 島内の祭りのお手伝い
★見出し写真：春の大祭（05/03）

(2) 沖島ゴミ拾い

湖岸でのゴミ拾い（07/22）

(3) 近江八幡市と富士宮市の児童交歓会のお手伝い

(4) 湖風祭出店

(5) 全国エコツーリズム学生シンポジウム

沖島でのエクスカーション（12/09）

(6) 「島の未来をつくる会」会議参加

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

本プロジェクトは発足してから 3 年目であり、いよいよ体制も整ってきた時期であった。今年は一回生が多く入り、より大所帯での活動となったので、様々な視点からの意見や、アイデア出しなどが増え、活動にも大きく影響した。近江八幡市からの委託事業であったり、全国的な会議に参加するなど、活動の幅も増えた。しかしながら、大所帯故に情報共有が難しかったり、決め事を考えることが困難となってしまった。プロジェクトごとに役割や責任を分担させ、より積極的に関わっていけるチームを目指していきたい。

今年度はゴミ拾い活動など、座・沖島主体の活動が多かった。今までは、お手伝いという形であったが、主体的に関わっていくことで、学生自ら、沖島の良い点や改善点、どうしていくべきかを考えるきっかけになるのではないかと感じた。

来年度は、座・沖島を立ち上げた先輩が卒業し、代替わりの時期でもある。先輩の意思や思い引き継いでいき、より良いチームにしていきたい。

本プロジェクトは島民との関わり無くしては成り立たない。メンバーがより沖島に溶け込み、島民と共に沖島の存続のために最善の道を模索できるようなチームを作っていきたい。

活動を通して学んだこと

滋賀県民である私は沖島についてなんとなく知っていたが、座・沖島で沖島を訪れたことで、見方が変わった。島の良い点や改善していかなければならない点、これからの未来について、深く関わることで、たくさん見えてきた。その見えてきたものを来年度、どう生かせるかを考えていきたい。

今井優斗（地域文化学科 1 回生）

私は毎月の定例会や行事に参加できなかったが、久しぶりに行く沖島はやはり素敵な場所で、素敵な島民の方と祭りや行事の時にお話しすることがいつも楽しみであった。色々な経験を通して、自分が今しないといけないことは何か、したいことは何かを改めて考えることができる、座・沖島は私にとってそんな存在である。

佐野茜（人間関係学科 2 回生）

初めて沖島を訪れ、最初は風情があり良いところと感じたが、活動していくうちに、いくつか問題点があることを感じた。様々な会に参加させてもらい、問題を解決していくためには、みんなで話し合い協力していくことが大切だと学んだ。

西陽来（環境生態学科 1 回生）

地域からのコメント

コミュニティセンター職員　小川文子さん

座・沖島さんには春祭り、夏祭りを始め、運動会、イルミネーションなどで沖島の振興に多大な御協力をいただいています。若者が島内で活動してくださるだけで活気が生まれるのですが、そればかりでなく、とても気持ち良く対応してくれます。特にイルミネーションでは急な依頼にもかかわらず、さすが大学生、の出来栄えで島民みんな喜びました。他にも沖島食堂で高齢者とも関わってくださって、今や沖島になくてはならない存在です。

沖島町離島振興推進協議会　本多有美子さん

過疎高齢化地域において若者が入ることで、年間行事や日常生活の困りごとの解決につながるきっかけを作るなど地域に賑わいを呼んでくれます。また、島民とは違う視点からの意見を聞くことができ、新しい発見につながります。学生さんから多くの事を学べる事に大変感謝します。でも、その素敵な何気ない笑顔が一番のプレゼントです！

指導教員より（抜粋）　地域共生センター　上田洋平

破天荒な初代からバトンを受け取って、2 代目はこの一年、悩みながらも直向きに努力して、島の方々からのチームへの信頼を確固たるものにした。バトンを無事 3 代目に託して、彼もこれから島に住むという。秘めたる覚悟に驚いた。こうなったら、どうだろう、そろそろ誰か、船の免許をとらないか？

初代・創業者がいよいよ卒業する。卒業にあたり島出身の「他出子」とのつながりを財産として築いてくれた。この財産を生かし、育ててほしい。

「地域が求めているのは、グッドアドバイスではなく、グッドニュースである」と言われる。きみたちの活動と存在が沖島にとって 3 年にわたりその「グッドニュース」であり続けていることを讃えたいと思う。 なんて言いながら、打ち明けると、きみたちにちょっぴり嫉妬している。自分も学生だったらな、と思ったりするが、果たして自分が学生だったら、きみたちほどに立派に、愉快に活動できるだろうか。考えなおして、明日もいそいそときみたちの後からついて行こう。

DELIVERABLE　成果物／制作物

児童交歓会スタンプラリーのスタンプ

18 地域博物館プロジェクト

文化財を救え！我ら学生学芸員！

民具や古文書、お祭りなど、地域には多くの文化財があります。“地域文化財”や地域の歴史・文化などを住民の方々とともに調べ、活用し“地域博物館”をつくりあげていくことで、地域の魅力を再発見することをお手伝いします。

TEAM DATA

チーム名：スチューデント・キュレイターズ
代表者：原知里（人間文化学部）
メンバー数：24名
指導教員：市川秀之、東幸代（人間文化学部）
活動場所：学内、彦根市、米原市、高島市、近江八幡市
関係団体：白谷荘歴史民俗博物館
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 白谷荘歴史民俗博物館調査・展示事業
★見出し写真：白谷荘歴史民俗博物館での調査（06/24）

(2) 奥伊吹調査・展示事業

(3) 「博物館夏祭り」出展

ポストカード作りワークショップ（07/16）

(4) 近江八幡展示事業

展示準備（12/16）

(5) 学内展示事業

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

白谷荘歴史民俗博物館事業では、調査面では一区切りをつけることができた。これからは、調査済み資料の整理を定期的に行っていく。また、調査中心の活動から展示活動へと転換し、半年に1回のペースでまずは教科書展示のスペースで企画展の展示替えを行っていく予定である。

奥伊吹調査事業では、吉槻の地域の皆様から頂いた民具の調書作成に手を付けられていないことが課題。最終的な東草野小中学校での地域博物館作りの目標にも近づいていかなければならない。

今年、これらの継続事業と並んで目立ったのは、活動を外部へ発信することを重視した事業である。博物館夏祭りでは、事務局という役目を任せていただき、他館との連絡や夏祭りそのものの運営を密に行い、無事にこの大イベントを終えることができたが、メンバー内での仕事の分担や準備期間の短さなど、来年度に生かしたい反省や教訓が多くあった。また、近江八幡展示事業は、大きな挑戦となった活動だった。限られた時間の中で展示プランを考え、展示方法に頭を悩ませ、模型の製作など課題が山積みだったが、無事に設営を当日までに終わらすことができ、来場者も多く好評だった。この展示企画の経験というのは、他の事業でも応用でき、自分たちのスキルのステップアップにも繋がった。

今年度は、調査のようなインプット活動と、外部に向けた展示企画などのアウトプット活動のどちらにも力を入れることができ、充実した活動を展開できたのではないかと思う。地域博物館を地域の皆様と作っただけでは終わらず、その情報を発信していかなければならないと考えているため、これからは、広報活動などにも力を入れていけるとより私たちの想いが広がっていくのではないかと思う。最終的には地域のみで地域博物館を運営していける体制を整えていくという将来像を考えながら、これから私たちの地域との関わり方なども考えながら、活動を継続させていきたい。

活動を通して学んだこと（抜粋）

本物の文書や民具に触れる機会がたくさんありました。1回生でこのような経験ができたのは貴重だと思います。最初はわからないことばかりでしたが、プロジェクトを通して調書の取り方や展示作業のノウハウを身に付けることができました。このプロジェクトは、地域と学生双方にとってプラスになると思いました。

上園薫（地域文化学科 1 回生）

驚いたのは、博物館でケース越しにしか見たことのないような古文書などに、知識のない状態から先輩方に教えてもらいながら、自分で調べながら触れられることでした。また、湖風祭では、調査した明治時代の教科書から自分たちで数冊を選んで展示し、どれも楽しく貴重な体験になりました。

杉澤優果（地域文化学科 1 回生）

地域の文化を守ること、後の世代に引き継ぐことの大切さを学びました。滋賀県には、多くの民俗や文化が存在しています。地域の人々と関わる中でこれらを学び、わかりやすく伝えていくことが私たちの役割かなと思います。今年度は先輩方に頼りきりだったので、技術を引き継ぎ、来年度の活動を頑張っていきたいです。

中島みなと（地域文化学科 2 回生）

白谷荘での古文書調査では調査票を書くのに四苦八苦しましたが、良い経験だったと思います。奥伊吹での民具調査では昔の様々な道具を収集しました。収集と同時に地元の方が用途を説明してくださり、興味深かったです。普段触れる分野とは全く違うので戸惑うこともありましたが、楽しく活動することができました。

川島栄里子（材料科学科 2 回生）

地域からのコメント

白谷荘歴史民俗博物館　川島光男さん

日曜日に遠方で交通の不便な場所にある当館まできていただき民具や古文書などの調査・整理・維持・保存の為に継続して活動してもらっており学生の皆様方・先生方には大変感謝しております。一般のボランティアの皆様方とも協力して調査をして頂いております。内容整理・収納にはもう少し時間がかかりますが、整理とともに資料の展示・活用と更に活動が広がっていくことを願っています。先輩方から現役の皆様方と大変大勢の学生さんが継続して引き継いで携わっていただいています。皆様方の活動がなければ地域の大切な文化は近い将来埋もれていきます。先日の大津市のある地区の方が見学にこられ、皆様の活動内容を見本にしていきますとのことでした。若い皆様方の地域に根ざした活動が地域文化の保存に非常に貢献しています。皆様方と共に地方文化・民俗文化を守ってまいります。

指導教員より

人間文化学部　市川秀之

今年度の地域博物館プロジェクトは新たな課題に取り組んだ一年であった。白谷荘歴史民俗博物館事業では、長期間取り組んできた資料調査がほぼ終わり、展示替えを実施した。今後は定期的に同館を訪れ適宜企画展などを行うことで、白谷地域の魅力を発信していって欲しいと思う。また近江八幡でも展示作業に取り組み、大きな会場であったが無事展示を終えることができた。しかしながら展示技術や展示知識などには不十分な点もあり今後経験を積むとともにそれを次の学年に継承していく必要を感じた。今年度もっとも大きな新規の事業は博物館夏祭りの事務局を引き受けたことである。10 数館が参加するこの事業の事務局はいわばプロの集団に混じって学生が事務を引き受けるものであり、非常に勉強になったことと思う。当日は 1600 人あまりの来館者があり事業の効果も大きかったが、これを継続していくことは滋賀県の博物館の連携を強め、また多くの市民に博物館を知っていただく機会を提供することにつながるので今後ともがんばってもらいたい事業である。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

地域博物館プロジェクト活動紹介リーフレット

近江八幡展示パネル①～⑥

＜その他成果物＞

湖風祭チラシ

19 フラワーエネルギー「なの・わり」

植物でエコな活動しませんか？

化石燃料に代わり、植物を用いて資源循環型社会の形成を目標としています。植物を育てるところからバイオディーゼル燃料の生産を始め、資源循環型社会のモデルづくりを行っています。また、小学校や博物館で取組の広報活動も行っています。

TEAM DATA

チーム名： フラワーエネルギー「なの・わり」
代表者： 竹村知浩 (工学研究科)
メンバー数： 16 名
指導教員： 山根浩二、河﨑澄 (工学部)
活動場所： 彦根市
関係団体： 菜の花プロジェクトネットワーク
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 菜の花・ひまわり栽培

ひまわり種植え（07/11）

(2) 小学校出前授業

能登川北小学校出前授業（11/02）

(3) 高大連携授業

(4) イベント

★見出し写真：ヤンマーミュージアムでのワークショップ（07/28）

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

基幹事業である菜の花とひまわりの収穫量は過去最低水準まで落ち込んでしまった。原因は、播種時期が遅かったこと、地域の方とのコミュニケーションがうまく取れなかったことにあると考えている。結果として、搾油につなげることができなかった。課題としてまず、来年度の収穫量を増大させること。そのために、先輩方から引き継いだ栽培方法が正しかったのかどうかを見直す作業を 6 月末より行った。新しく調べた情報を基に、播種時期を決定し、そこから逆算して土壌づくりからしっかり行うことにした。堆肥は学内外合わせて 700kg を上回る量を撒き、菜の花を 10 月中の適期に植えた結果、昨年度に比べると大幅に生長させることができた。ただし、ひまわりの収穫時期と被るため、また土を休ませる期間が必要であるため、ひまわりの栽培を一度見送ることを考えている。

残りの事業は、バイオディーゼル燃料による資源循環型社会を広めるためと、科学実験の楽しさを知ってもらうための活動である。小学校の出前授業は、なのわり史上初の彦根市以外の小学校である能登川北小学校で授業を行うことができたのが大きな成果である。加えて、今年より SDGs について簡単に知ってもらう内容を、授業の中に組み込むことができた。しかし、小さな子どもたちは理解できないことも考えられるため、いかにして伝えるかが課題となる。もう 1 つの課題として、今年は 6 校に出前授業をお願いしたが、結果として昨年と同じ 2 校のみの授業となった。少しでも多くの学校に受け入れてもらえるよう、授業のお願いの仕方を考え直す必要があると考えている。ヤンマーミュージアムでは、昨年に引き続いて簡単な実験を行うワークショップを行った。3 つの実験はすべて大好評だった。今後は、実験の中にバイオディーゼルを取り込んで、より理解を深めてもらうきっかけづくりを行いたい。

活動を通して学んだこと

作物を育てることの大変さを学んだ。毎週の草刈り、水やりなどを学業、研究の間に行うには、人が足りないと感じた。また、天気によって左右されるため予定通りにいかず、農作業の難しさを知った。

礒本新（機械システム工学科４回生）

農作業の大変さを学んだ。なのわりに加入するまでは農作業にほとんど関わったことがなく、知識も無かった。一年を通してひまわりと菜の花を育てたことで、農作業に関する知識を得ることができた。また、育てたものから得られるエネルギーは少なく、エネルギーを得ることがいかに大変かを学べた。

片岡駿（機械システム工学科４回生）

人と共に学ぶことの楽しさを改めて知った。今年は環境教育活動として、エネルギーに関する実験を子どもたちと共に行った。子どもたちの学ぶ意欲や発想力にはビックリさせられることばかりだった。これからも地域の子どもたちと互いに高めあえる関係を築けたら良いと思う。

稲垣徹（機械システム工学科４回生）

地域からのコメント

お借りしている畑の所有者　吉島利博さん

作付け当初は、菜種のみの耕作で学生の皆んなも熱心で収穫量も多く、収穫した菜種油で「天ぷら」をして何度か町内のおばさん連中にご馳走してくれ、後の排油でバイオディーゼル油化の研究をする様に聞いていました。近年は、土壌の変化が原因か、以前程の収穫量がなく、また長年にわたって耕作しているせいか、お互い以前程の熱が感じられない様に思います。今後、耕作田の他、学生の皆さんや先生と地域活性化のため住民との交流の場ができればと思っています。

指導教員より

工学部　山根浩二

今年度は、菜の花およびひまわりの栽培ともに実績がほとんどなく、また地域との結びつきも薄く、課題が多い年であったように思う。今後は、先輩たちから引きついで続けている地元の借畑での菜の花やひまわりの栽培事業や小学校出前授業によるエネルギー環境教育で先輩たちが築いた地域との結びつきを台無しにしないようにするためには、どう展開して進めていくかを考えて来年度に進めてほしい。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

菜の花の栽培

小学校出前授業配布資料

20 たけともミライ

東北のこれからを共に考える

宮城県気仙沼市に復興の拠点となる場所を作りたい。陶器研究室が中心となって始動したのが「竹の会所」プロジェクト。竹の会所を拠点に地域と交流を続けています。活動も転換期を迎え、解体される「竹の会所」の場のこれからを地域の人と共に考えていきます。

TEAM DATA

チーム名： たけともミライ
代表者： 山原康弘 (環境科学研究科)
メンバー数： 20 名
指導教員： 陶器浩一、山崎泰寛 (環境科学部)
活動場所： 宮城県気仙沼市
関係団体： 株式会社 髙橋工業
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 **2012 2013 2014 2015 2016 2017**

PROJECT **実施事業**

(1) たけとも春ワークショップ
★見出し写真：竹の会所補修作業（06/23）

(2) たけとも夏ワークショップ

(3) たけともブックレット作成

資料をみる学生と OBOG（09/15）

(4) 竹の会所解体イベント 展示会
「竹の会所の歩み」

(5) 竹の会所解体ワークショップ

竹の会所屋根取り外し（03/13）

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の活動は、気仙沼では竹の会所の補修や改修、そして解体を行い、大学ではたけともの記録を整理しブックレット作成の準備、パンフレットの作成・発行までを行った。活動メンバーは特別多くはなかったが、学年関係なく役割を設け、後輩からの意見を取り入れることで皆が自発的に活動に参加できたと思っている。

2018 年 6 月に竹の会所の現状を確認し、思ったより劣化が進んでいたため、2019 年 9 月に予定していた解体時期を早め、2019 年 3 月に行うこととなった。この瞬間から怒涛の 1 年が始まったような気もした。夏のワークショップでは解体計画を考えた上で実物を見ながらの検討を行った。さらに今まで一緒に活動していた写真家の堀田御夫妻を祝う会を企画した。竹の会所解体に伴って、たけともの活動記録をまとめブックレット作成を行うことを決め、コンテンツ毎に整理し、たけともとは何かを客観的に見ながら内容を決めていき、2019 年 9 月以降に出版できるように編集を行っていった。

そして、今年度の一番大きな事業は「竹の会所の解体」であった。普段、建築を学ぶ上でモノづくり・建設を行っていきているが、建築の解体は珍しく、また意味を持たせた解体という点では初めての行いであった。解体を手作業で行うことで解体のワンシーンを絵に残しながら解体を行うことができた。竹を用いた建築は竹の劣化が早く、補修・改修は必要不可欠であったがその補修作業がヒトとモノを繋げ、建築に愛着をもたらすことになる。そして補修を行うために場に人が集い、賑わい新しい出会いを生みヒトとヒトが繋がる。この竹の会所はたくさんのヒトとヒトを繋げ、笑顔であふれる場になっていった。その場の今後をゆっくりと考えていき、これからの東北を地域と共に考えていきたいと考えている。

活動を通して学んだこと （抜粋）

学生活動のあり方について学ぶことができた。たけともミライは、竹の会所の建設にあたってできた地域の方とのつながりを大切にしながら、被災地の未来を考えるプロジェクトだと思っている。私自身、そうやってできたつながりを、今後も大切にしていきたい。

岩田慧（環境建築デザイン学科１回生）

建築が人に対してできることを強く実感した。解体が始まる前のイベントや街歩きでは、震災がおきた現実を目で確かめ、竹の会所が建っていた年月の長さを感じたと共に、地元の方々の笑顔をたくさん見た。震災がおきた場所で竹の会所という空間が人々の活力の一部になったことが本当にすごいことだと思った。

里本麗（環境建築デザイン学科１回生）

形あるモノを作ることだけが建築ではないことをここで学んだ。竹という構造的に不安定な材料は、壊れたら修復しこの建築の命を繋いでいくことを通して、私たちを地域に関わらせてくれる。いつしかメンテナンスのたびに出会う地元の子どもたちの成長が楽しみになっていた。そんな人を育む場としての建築が期日を迎え解体される前日には竹の会所をできるだけ綺麗にして最後の展覧会を行った。展覧会を設営しながら不思議とさわやかな気持ちだった。建築がなくなっても、その背後に地元で関わることのできた人の顔が見えるからだと思っている。生き物のような、あるいは人々の居場所のような、そんな学び舎だった。

戸倉一（環境科学研究科環境計画学専攻１回生）

地域からのコメント （抜粋）

株式会社 髙橋工業　代表取締役　髙橋和志さん

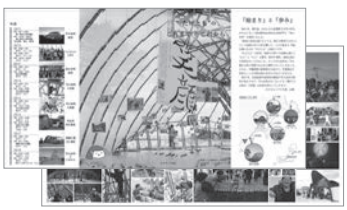
「竹の会所」も７年半の仮設建築許可が満了し、3 月にデッキ床だけを残して上部構造が解体されました。それに伴い開催された展覧会には多くの地域住民の他、たけとも OB・OG も集まって元気な顔を見せてくれました。展示された写真を見ていると色々なことが思い出されます。9 月にはデッキ床の解体撤去が予定され、竹の会所は閉所となります。これからのことは皆と話し合ってゆかなければなりませんが「竹の会所のモノとしての価値を新しい建築・場につなげてゆきたい。人と建築、人と人とのつながりが深まり豊かになっていき、”終わりの時間“が”始まりの場“となることを願っている。」との学生の気持ちを嬉しく感じています。その一方で、継続すること自体が目的ではないので、自分たちに何ができるか、何を学ぶのかを共有して、これからの活動の原点にしてほしいと思います。

指導教員より

環境科学部　陶器浩一

活動の中心の場であった「竹の会所」の７年半の仮設建築許可が満了し、3 月に上部構造の解体作業を行った。それに先立ち展覧会「竹の会所の歩み」を行ったが、“たけとも”歴代会長を含む多くの卒業生、多くの地域の方々が集まってくださり、共にこの 8 年間を振り返り語り合う機会を持つことができた。現在活動の中心となっているのは建設当時まだ小学生だった学生たちであるが「竹の会所のモノとしての価値を新しい建築・場につなげてゆきたい。人と建築、人と人とのつながりが深まり豊かになっていき、”終わりの時間“が”始まりの場“となることを願っている。」との想いで取り組んでくれている。来年度は、竹の会所閉所（床の解体）作業の他、今までの活動をまとめたブックレットの制作を中心とした活動を行ってくれる予定である。その後の活動については、学生たちの自主性を第一に尊重して地域の方々と話し合ってゆきたい。「会所を通して、私たちの想いとみんなの想いが一つとなり、地域の方々の心の支えとなれば幸いです。」という学生たちの想いを大切にしてゆきたいと思っている。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**



たけともブックレット パンフレット版

夏祭りポスター

＜その他成果物＞
初夏祭りポスター
展覧会「竹の会所の歩み」ポスター
ブックレット完全版の出版宣伝チラシ

21 木興プロジェクト

建築×被災地＆復興まちづくり

東日本大震災を受けて、滋賀県立大学の建築デザイン、生活デザインの学生による震災復興プロジェクト。建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かしなければという思いをきっかけに、ものづくりによる復興支援を目的としています。

TEAM DATA

チーム名： 木興プロジェクト
代表者： 小畑碧 (環境科学部)
メンバー数： 21 名
指導教員： J.R. ヒメネス . ベルデホ (環境科学部)
活動場所： 宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 荒神山薪棚ベンチ作成
★見出し写真：ベンチ作成（07/21）

(2) サマースクール

サマースクール交流イベント（09/19）

(3) 定期訪問

(4) 海の大運動会

海の大運動会への参加（08/11）

(5) 3.11 キャンドルナイト、田の浦大漁祭

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年で木興プロジェクトは 8 年目を迎えた。団体が活動開始しすぐに全員で話し合いを行った。それはここ数年問題になっている今後の団体の方向性についてである。話し合いの結果、これまでのような活動は今年で一区切りつけて、今後は広報を主軸としていくということになった。

まだ復興は不完全であるが、2011 年からは状況が大きく変わってきている。また、木興プロジェクトと田の浦との関係性も変わってきており、復興で繋がっているものではなくなっていると言えるかもしれない。8 年間で築き上げてきた関係は非常に濃いものとなっている。田の浦の地域の方々、そしてこれまでの木興プロジェクトに感謝を伝えなくてはならない。 そんな思いで 3.11 キャンドルナイト・田の浦大漁祭を迎えた。

今年は田の浦を訪問するたびに目的をしっかり持ち、訪れることができたと感じている。9 月には 10 日間、田の浦に滞在し、鳥居の修繕を行った。恐らくこれが最後のサマースクールである。今年も現地の大工さんをはじめ、沢山の方々に協力をいただいたサマースクールとなった。昨年から 2 年間での稲荷神社の修繕を終えた。これにより、2011 年から 2017 年までの地域の方の集う場所づくり、2018 年、2019 年で地域の方にとって意義深い場所の修繕が完了した。

そして来年からの木興プロジェクトは活動が変わろうとしている。より多くの人にこの団体の活動を知ってもらうことが必要であり、宣伝に力を入れていく。今後の活動はある意味ではこれまでの活動よりも難しいものであるに違いない。アーカイブ化するためにはこれまでの活動をしっかり振り返る必要がある。この団体が 8 年間でしてきたことをまとめるということは非常に大きなやりがいがあり、大切なことであるため、時間をかけてまとめていきたい。

活動を通して学んだこと

今年は木興プロジェクトにとって大きな転換期となった。すごく濃く難しい一年であり、代表としても苦戦したが、多くを学んだ。来年度以降は新しい木興プロジェクトとして始動する。これまでの活動とはまた違った難しさがあると思うため、自分もサポートしていきたい。

小畑碧（環境建築デザイン学科 3 回生）

他の支援団体が 2、3 年で支援を止める中、木興はこれまで復興支援を続けてきている。その中で復興はどこまでかという悩みがあるが、今年は復興のその先のもの、町の活性化のようなものを感じた。

松井愛起（環境建築デザイン学科 3 回生）

修繕という初めての経験だったため、効率的に進めるのが難しかった。現場で必要な部材の長さを確認し接合方法などを考えるため、一人ひとりが今自分はどの部材をつくっていて、どこにはまるのかなどを理解しながら作業を進めることができた。これにより、個人の能力もしっかりと身についたのではないかと思う。

今堀俊吾（環境建築デザイン学科 3 回生）

地域からのコメント

千葉昇一郎さん

立派にやってもらってくれました。夜遅くまで蚊に食べられながらも一生懸命頑張ってくれて、最後はきれいにペンキを塗ってくれて、しっかり輝いていました。ありがとう。

阿部さえこさん

来てくれるだけで本当にうれしい。いつも学生さんはニコニコと良い笑顔が印象的です。いつも差し入れをするとうれしそうにしてくれて、差し入れがいがあります。これからも飽きないで田の浦に来てください。

指導教員より

環境科学部　J.R. ヒメネス . ベルデホ

東日本大震災に対応して滋賀県立大学の建築デザイン学科の学生が実施した震災復興プロジェクトの 8 年目は、田の浦の神社の鳥居の修復とこれまで参加したメンバーすべて（100 名以上）が集まる特別なイベントが行われることになりました。

また、特筆すべきは、これまで数多くの団体がこのプロジェクトに関わっていることです。地元の人々による団体（田の浦ファンクラブ）、地元以外の団体（田の浦ファンクラブ学生サポートチーム、未来看護塾）、有限会社三浦ガス設備、丸吉木材株式会社、丸功建設等の民間企業および社会福祉法人気仙沼市社会福祉協議会といった公共団体。

この 8 年間で、田の浦のコミュニティの復興が進みました。次の世代のために、これまで行われた活動の証言を残し、将来の新たな挑戦や課題に向けて、新たなニーズを探し広める必要があります。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

神社の修繕

薪棚ベンチ

22 Jesuit House プロジェクト

建築遺産を生かした地域拠点づくり

歴史的建造物である Jesuit House を地域博物館として持続可能な形で保全、活用し、地域住民や子どもたちが集まり、さまざまな形の教育や活動が展開する場所にしていくため、プロジェクトのマネジメントや計画立案、空間デザインなどを行っています。

TEAM DATA

チーム名：Jesuit House プロジェクト
代表者：瓜生田優紀 (環境科学研究科)
メンバー数：13 名
指導教員：J.R. ヒメネス . ベルデホ (環境科学部)
活動場所：フィリピン セブ市 パリアン
関係団体：HO-TONG FOUNDATION、NPO法人セブンスピリット
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017

PROJECT 実施事業

(1) 全体計画・マスタープランの提案

全体計画プレゼンテーション（06/22）

(2) 博物館リニューアル案の提案
★見出し写真：リニューア案のプレゼンテーション（11/30）

(3) クリスマスイベント

日本の文化体験（12/01）

(4) ハウスAの保全・改修

(5) SDG s学生大会での活動紹介、パネル出展

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は、本プロジェクトの基礎となる敷地全体の改修計画・マスタープランの提案および博物館のリニューアルの計画案の提案を行った。さらに、昨年度に引き続き、実際に Jesuit House を活用したクリスマスイベントを行い、地域住民や子どもたちと交流を深めた。また、近江楽座のＥプロジェクトとして、滋賀県立大学でおこなわれたＳＤＧｓ学生大会で取組の出展、発表を行った。

敷地全体の改修計画・マスタープランの提案では、全体の改修計画の確定にまでは至らなかったものの、Jesuit House の将来像についてより踏み込んでディスカッションができた。改修後のイメージと活用についてお互いの考え方が共有されたことは成果であった。博物館リニューアル案の検討では、2021 年への実現に向けて具体的な提案にまで踏み込んだ話ができ、修正箇所が明確に示されたことから次につながるディスカッションとなった。クリスマスイベントでは、昨年よりも多くの子どもたちが参加し、共催の Ho Tong Hardware Inc. によるプレゼント抽選会など、昨年よりも充実したものとなった。さらに、お好み焼を提供したが、お好み焼をつくるところから子どもたちが体験して（手伝って）くれるなど、当初の想定よりも更に踏み込んだ交流となったように思えた。

来年度は博物館リニューアルの案を完成させ、空間実現に向けて確実に進めていく必要がある。さらにイベントについて、地域住民が参加するだけでなく、出店できるような仕組みやきっかけづくりを強化していくことが、今後、取組を地域に定着させるうえで重要であると考えられる。

活動を通して学んだこと （抜粋）

プロジェクトに初めて参加し、壁の剥離作業なども行ったが、地域の方々が集まって開催されたクリスマスパーティが最も印象的だった。地域の方々が楽しみ学ぶことのできる空間を、自分たちの手で残しながら継承していけるというプロジェクトの壮大さと魅力を感じられるワークショップだった。

神谷京佑（環境建築デザイン学科 3 回生）

フィリピン、セブに 1 週間程滞在し、クリスマスパーティでは地域の子どもたちを中心に交流したが、英語と身振りなどで相手に思いを伝えることで異国の地から来た自分を初めて信頼してもらい、関係が築けるのだと感じた。来年は今よりも責任ある立場となるので改修などでもコミュニケーションを大切にして頑張りたい。

芝田康平（環境建築デザイン学科 3 回生）

プロジェクトを通じて普段できない多くの刺激的な体験することができた。普段と環境が違う場所で言葉や考え方が違う人たちとの共同作業は自分にとってのこれからの課題が見てきてとても良い経験になった。今後、また機会があれば今回の経験を生かした行動ができたらいいと思う。

松永三恵香（環境建築デザイン学科 3 回生）

敷地全体計画協議では事前の情報共有不足もあり、施主と我々プロジェクトの熱量差に違和感を抱いた。言語や距離などの物理的な問題に加え、綿密な意識共有が重要になると痛感した。12 月には協議を重ね、施主の意向を尊重し、移転・拡大に向けた博物館提案を共有した。軌道に乗りかけた活動の今後の進展に期待する。

桂若菜（環境科学研究科環境計画学専攻 2 回生）

地域からのコメント

プロジェクトの協力者で土地・建物のオーナー　Jimmy Syさん

Jesuit House ミュージアムの生かし方についての考えや概念を共有することは非常に興味深い。ただ、多くの資材を別の倉庫に移動する必要があるため、アイデアを実現するのに時間がかかる。敷地は歴史的建築物が博物館や工芸品としての機能を持つだけではなく、訪れる人々が自由にくつろぐ機能も必要。だから、庭を配置する計画は素晴らしい。あなた方の建築の見方とアイデアに感謝する。

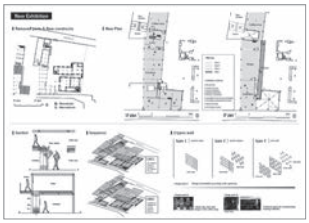
指導教員より　環境科学部　J.R. ヒメネス . ベルデホ

Jesuit House Project 1730 は、遺産とコミュニティの価値づくりに関する新たなモデルとなる可能性があります。それは、すべての固有要素を全体として扱うことができる方法論として定義できます。

その目的は、人々と協力してコミュニティに広めながら、研究と保全、および持続可能性といったその他の手段を用いて、特定の領域における文化、歴史、自然遺産の全体的ビジョンを提供し、経済、コミュニケーション、観光、不平等の削減、高度な技術を用いたリハビリテーション手法、生計など、通常は切り離された要素を統合することです。これは、フィリピンの有形遺産でこのアプローチで取り組まれた初めてのものです。学生たちは、この仕事を実行することができました。社会的に認知されるためには、リハビリテーションと保全のプロセスを社会に示していくことは非常に重要です。

DELIVERABLE　成果物／制作物

新博物館模型



博物館リニューアル学生案

＜その他成果物＞

全体計画 学生案 A、B、C

全体計画模型

SDGs 学生大会掲示ポスター

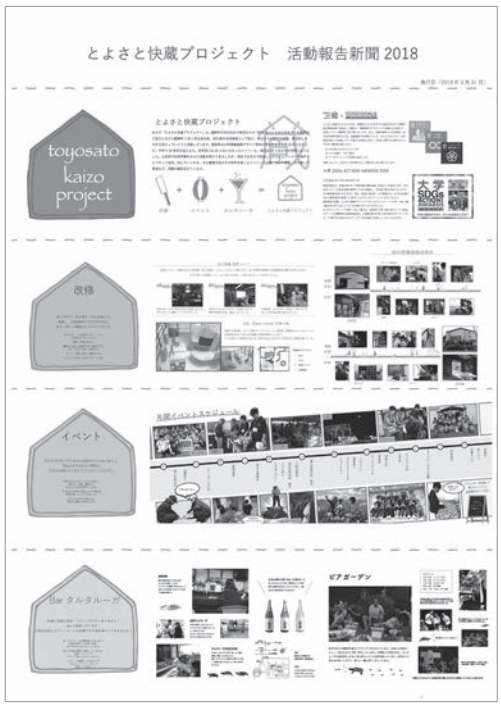
2-2 『らくざしんぶん』

チームが1年の活動をまとめた活動報告新聞です。共通トピックである①「**チームのビッグニュース**」②「**プロジェクト紹介**」③「**プロジェクト自慢**」④「**地域の声**」⑤「**成果と課題**」を中心に記事を作成しています。

近江楽座ホームページに、カラー版の PDF ファイルを掲載しています。ぜひご覧ください。

近江楽座 HP：**http://ohmirakuza.net/**

01 とよさと快蔵プロジェクト



02 人と環境を救う雨水タンク

03 あかりんちゅ

あかりんちゅ

March 31, 2019

AKARINCHU　NEWS

あかりんちゅとは

あかりんちゅとは、寺社などからやむなく廃棄されてしまう提灯、通称「捨ろう」を回収・再利用し、手作りキャンドルの販売、キャンドルナイト・キャンドル作り教室の開催を行っている。セットーは「スローでスローな夜を。」

OKB street 5th, OGAKI 100th Anniversary Candle Night

12月7日に岐阜県大垣市の OKB street5周年と大垣市100周年記念イベントにキャンドルナイトを行いました。あかりんちゅは有難いことに、OKB street が出来て以来毎年呼んでいただいています。今年の規模は例年と同様の 1000 個でした。授業後にメンバーが大垣市に向かうと、大垣共立銀行の方が先にキャンドルを並べて置いていたのでスムーズに作業を行うことができました。18時からセレモニーが開始となり、今年は大垣市市制 100 周年記念となる年でもあったためか、多くの方が見に来られました。今年は新たに 4 種類のキャンドルナイトのグラスを購入したので、例年とは違い色とりどりの明かりをともなう美しい景色が広がりました。

地域の声

長年お付き合いのある「あかりんちゅ」。我々の主催する『てらこやふとずた』で卒のコラボが叶った。そのイベントのメインを飾ったのがあかりんちゅによりディスプレイされた本堂におけるお点灯体験であった。この際に使用したキャンドルは元々我々があかりんちゅに提供した物である。今回初めて、我々の手から旅立っていった残骸たちが新たな命を伝承され、形を変えて我々の元に戻ってきてくれた。その灯は仏様の周りを照らしてくれるだけでなく、多くの方々の心をも興奮に照らしてくれた。これほど嬉しいことはない。

（浄土宗青年会）

使わなくなったロウソクを再利用してるのはエコでいいな。

（又化祭でキャンドルを購入してくださった方）

こんなに簡単に手作りキャンドルってできるんやね。

（体験教室に来てくださった親御さん）

あかりんちゅ自慢！

あかりんちゅの自慢といえば大きく言えば3つあります。

まずはBプロジェクトであること。基本的には イベントを行った際の依頼料と販売の売上金で活動しています。

二つ目は県内外、どこへでも行って活動できること。材料は自分たちが全部持っていくため、体験教室は平らなところとコンセントが1つあれば活動できます。このため、様々な人との交流の機会があります。

3 つ目は様々な団体との関わりがあること。近江東部の団体からキャンドルナイト用のロウソクを作ってくださる福祉団体のジョブカレさん。残ろうを集めてくださる滋賀県区作士宗青年会さんなど。2 つ目に挙げた特性上、様々な人と関わって活動している団体です。

成果と課題

成果はキャンドルを入れるグラスを新たに購入したので、以前よりも色鮮やかな景色を作ることができるようになったことです。

ただし新たな課題も出てきて、3 年生の引退により来年はメンバーが 13 人から 6 人に減ってしまうので、積極的に新メンバーの勧誘活動をする必要があると感じています

04 政所茶レン茶゛ー

2019年3月31日

政所茶レン茶゛ー

政所茶レン茶゛ーとは

政所茶レン茶゛ーは東近江市政所町を拠点に、活動を行っています。
政所町には新町時代から現在まで受け継がれる政所茶の歴史があります。しかし、政所町が国移転から地域に新しいものを、私たちは目指にならされた来歴まさんから来期を迎えて、地域のためのを使命が全力、学生で出来つくりをし、地域を盛上げていくことを目指しています。
またイベントでお茶を販売することで学生が発揮した政所町の魅力、また政所茶の生産地としての政所町を発信することが主な活動になります。

ピックニュース

今年度は、学生との交流も多く、学生同士で学びを深める場合が多りました。たの可能は印都文教大学の学生が茶レンジ学ーと学生団体のカネに、実際に政所に足を運んでもらい、政所の歴史や茶の特徴・販売法などを知ってもらう機会になりました。
また滋賀県立大学のやりコラボもあり、形に近に実現できる。おとくらプロジェクトのカフェで提供しているメニューに茶レン茶゛ーのお茶を使ったほうこ茶ラテを提供していただきます。

ちょっとした自慢

2018年に政所町のお弁を借りて、実際した「ちこたこ交流会」に滋賀県知事である三日月大造さんに来ていただけました。
来木の設計で出来まで来ていたいたそうで、私たちも交流会の準備をしていたところでおっかけて、後悔のことで見ますよ。知事には、実さくこ政所町のみなさんにお話していただいて、交流会を開るく、和気あいあいとした雰囲気で進めることができました。

地域の人から

今年度も高さんから生点のりで頑張ってくれました。学生入れたは入れる行は良い事ができるので、相談を内容で来てくれてこちらもしてちろいん場りです。政所は1年生ちこたんどんあ知をしてしまうので空りることを回事に頑張ってほしいです。せっかくたを自のりて作ってくれたお茶なので、その有効のってくれるお茶さんがちっと嬉えるとよいですね。今年は非都の大学が政所にきて研修はじを企画したり、よい交流をしているなと思ってみていました。
政所の活性化のために新いてくれるも嬉えて来ましたが、その中でも政所町の生産に携わってくれている茶レン茶゛ーにはいつも助けてもらっています。ありがとうございます。来年度もこの調子でがんばってください。　由木　敦治（対理を厳していただいている方）

成果と課題

お茶づくりに関しては、今年度、天候に恵まれず、思うような収穫を得ることができなかった。また茶畑後が肥料入れなど、重唱の作業が遅まっていたので、次年度から計画的に進めていくべ要がある。
お茶摘み以一般参加のたまり作業のための参加も多く、また政所町の茶摘み体験ツアーを新しい試みとして、私たちが引き受けた。また非都文教大学の学生を招いての交流会を行ったり、おとくらプロジェクトのコラボでのほうこ茶ラテの提供はどつはがりを作ることができた。

まとめ

政所町での活動で、最作業中ですれ違う時などが多のから、声をかけて、気に掛けて頂いたり、「ちこたこ交流会」では多くの参加、またはお話を頂いたり、地域の方から支えられている、またこちらも頼りにされていることが分かりました。
今年度は学生とのコラボが新しい試みなこを実践することができたので、次年度もこれにとどまらず、様々な挑戦をしたいと考えています。

05 BAMBOO HOUSE PROJECT

BAMBOO HOUSE PROJECT

変わり続ける「竹の庭」～自然と共生・再興物語～

竹林を活用する「竹の庭」に対するエネ

地域×子ども×学生　地域に愛される為に
～体験教室の取り組みを通して～

さらに魅力的な「竹の庭」へ
～HBP センター新事業～

06 おとくらプロジェクト

2019.3.31

おとくら新聞

2018年 夏のイベント

2019.8.19 夏ビザイベント

2018.8.19 ギターワークショップ

今年度夏おとくらは様々なイベントを行った。毎年恒例の夏ビザイベントやギターワークショップを開催した。

夏ビザイベントは高宮の子どもたちに夏休みの思い出を作ってもらうことと、子どもにおとくらのことを知ってもらうことを目的として企画されたイベントである。初めての形式での課題も多々あったが、子どもたちに楽しんでもらうことができた。

ギターワークショップはおとくらの来場者である仕本宏司さんが主催者となり、仕本さんの教え子の小田愛さんも出演した。また田村恕さんも出演した。アカペラサークルに入っているおとくらメンバーニーもオープニングで仕本さんと小田さんとコラボし、歌いたい様なイベントを通じて地域の方々とつながることができ、メンバーにとって貴重な体験ができたと思った。

地域の声

今回はおとくらの来主催後援会であるあかんたんの加藤さんとおとくらの関係のお茶の販売を通じて、加藤さんは、小学校の学校お茶会の準備も担当されていることを巻き込み、ポスターも準備も担当されたりして、最も印象的だったのは「夏ビザイベント」の当日、テレビ放送されていたビザ家を使ってのイベントであったことである。

応援隊長であるあかんたんの加藤さんは、「おとくらの関係のお茶の販売を通じて、加藤さんは、小学校の学校お茶会の準備も担当されていることを巻き込み、ポスターも準備も担当されたりして、最も印象的だったのは「夏ビザイベント」の当日、テレビ放送されていたビザ家を使ってのイベントであったことである。

おとくら自慢

おとくらの自慢できることは、挽きたての豆を使ったコーヒーを提供する喫茶店であると同時に、「人と人をつなげる場所」としての役割を果たしていることだ。学生はお客さんとおしゃべりを通して、様々な知識や知恵を得ることができ、その一方で学生は大学での経験や学んだことを話す。このように私たちは学生は客さんとの会話を楽しみながら営業をしている。

おとくらプロジェクトって？

おとくらプロジェクトは「ギャラリー喫茶おとくら」を活動の中心として地域活動への参加、イベント開催などによって高宮の地域活性化を目的としての活動内容である。喫茶運営が主な活動内容であり、シフト制でおとくらのメンバーがスタッフとして入っている。組織はイベント班、ギャラリー班、メニュー班、広報班に分かれている。それぞれイベントの企画・実行、毎月作家さんが変わるギャラリースペースでの展示、新メニュー考案、おとくら通信の発行や情報発信を行っている。

成果と課題

今年度は新メニューの考案や夏ビザイベントの開催によって新しい人や、子どもにも興味を持ってもらうことができたと感じている。また、「政所チャレンジャー」とのコラボメニューの開発で多個体とのつながりも深くことができた。一方で課題としてはシフトの人数のなさや、メンバー一人一人がおとくらについて考えて動けるようにするなどが挙げられる。シフトの希望調査のとりかたを工夫したり、おとくらについて考える時間を設けるなどして課題を改善していき、おとくらをより良いものにしていきたいと感じている。

07 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

2019年3月31日　信楽人新聞

信楽人新聞

ブランディング進行中

香りを楽しむ「アロマボール宙」

窯元散策路マップの英訳に挑戦

地域の方より

活動を振り返って

08 とよさらだプロジェクト

発行日　2019年3月31日

とよさらだ新聞

豚汁大人気！

今年度の湖風祭で、とよさらだは自分たちの畑で育てた大根を使った豚汁を販売した。今年の湖風祭は両日とも晴天で強い日差しに見舞われることもあり、温かい豚汁は二日間で329食と沢山の方に食べて頂くことができた。準備期間を含めてメンバーとの共同作業が多く、メンバーとの結束感より強まったように感じた。

とつとまつりに出店

2018年8月4日に豊郷町豊郷小学校旧校舎跡で行われた夏祭り、「とつとまつり」に参加させて頂いた。とよさらだは自分たちで育てたじゃがいもを使用してポテトチップスを販売した。地域の方々や普段お世話になっている農家の方にも手伝っていただき、ポテトチップスは好評だった。今回の参加で、祭りに来た地域の方々と直接交流することができ、とよさらだの活動について知ってもらう良い機会となった。

プロジェクト紹介

「とよさらだ」とは？

とよさらだプロジェクトは滋賀県大上郡豊郷町の耕作放棄地を利用し、地域力の再構築を目指すが、農地とビニールハウスで野菜栽培や直売所への販売を行っているプロジェクトである。年間を通じて様々な野菜を育てており、普段では中々経験できない農作業を地域の方と交流しながらできるのが利点である。また、とよさらだでは野菜の栽培だけでなく、農業が抱える問題に目を向けてもらい、地域活性化につなげていくことを目指している。

地域の人の声

今年のとよさらだは、とつとまつりなど地域のイベントに参加しており、やる気があることが認められる。しかし、もっと地域の人達に色々相談するなどして、地域と関わっていてもらいたい。また自分たちの団体を積極的にPRしたり、同じ豊郷で活動する他団体と交流したりするなどして、より一層地域に溶け込んでいてもらいたいと思う。

豊郷町ミライファーマー　森　久仁彦

1年間の活動を通した成果と課題

今年度はたくさんの地域のイベントに参加できたことも、多種の野菜を栽培することが可能であると思う。また、台風などで倒壊したビニールハウスの修繕も進めることができた。一方で、今年度は異常気象などにより野菜の良い苗を作ることができず、直売所などへの野菜販売を行うことができなかった。野菜販売は団体の目的の一つである「地産地消」の観点や、自団体のPR、野菜栽培地における技術や知識の蓄積などにつながるため、来年度は特に野菜販売に力を入れていきたい。

09 内湖の再生と地域の水辺コーディネート

守ろう！地域の水辺　守ろう！琵琶湖の在来種

発行日2019年3月31日　滋賀県大生き物研究会（滋賀県立大学近江楽座学生団体）

地域の水辺を豊かにするために

地域の水辺の課題

- 侵略的外来種が多く生息
  生き物―地域の大切な資源（ビワマス、アユ　etc…）
  ⇨ 豊かな在来種の復活を！
- 子どもたちの水辺離れ
  水辺の遊び…学びの宝庫（生き物採集・観察　etc…）
  ⇨ 減ってしまった川がキの復活を！

3つの活動とその目的

駆除：在来種にとって優みよい環境作り
啓発：外来種問題・地域の水辺への関心
育成：地域の活動に貢献できる人材育成

活動の成果

神上沿の魚類相の解明

- 豊富（31種）な魚類が生息
  ⇨ 文章化…冊子「神上沿の魚たち」

学術論文の執筆

地域の水辺の豊かさ、楽しさを知ってもらう

- 子どもたちが身近な水辺の生き物に触れる
  └ 将来の水辺を担う人材

SDGs関連項目

活動内容

駆除活動：在来魚の豊富な内湖の復活！

外来魚駆除活動@神上沿

- 内湖に生息する外来魚を駆除（外来魚は魚粉肥料として活用）
- 地域が必要とする情報のアウトプット

↑釣り針　↑網

投網（とあみ）　刺し網（さしあみ）
どちらも琵琶湖の魚師が伝統的に用いてきた漁法です。主にこの2種類の方法で外来魚の駆除を行っています。

↑少し網（たもあみ）　↑オオクチバスの解剖
生物採集でお馴染みですが、外来魚の駆除にも使います。　外来魚を解剖して研究のためのデータをとります。

啓発活動：地域の水辺に関心をもつ、活動を広げる

魚類相調査@野洲川

- 地域を流れる川の魚類相モニタリング
- 地域に水辺の情報を発信

↑網下は釣りで魚を追う！　↑環境は主に投網で魚類調査。

外来魚駆除釣り大会@琵琶湖

- 外来魚について参加者と勉強
- 実際に外来魚を釣る

↑釣り上げて満面の笑み！　↑参加者の外来魚の釣りの様子。

生き物観察会

- 身近な水辺で生き物採集、生き物について解説。

育成活動：生き物の知識や活動のノウハウを身に着ける

外来生物に関する勉強会、他団体との情報交換

↑ワークショップの様子。　↑外来魚情報交換会での発表。　↑2種類のカメの観察。　↑メンバーが生き物について解説。

10 タクロバン復興支援プロジェクト

2019年3月31日

タクロバン復興支援プロジェクト

現地での建設開始に向けたミーティング

変更した土地での、建設物の再設計

地域と共にある建物を！教会兼コミュニティセンター建設開始

2018年度の成果と課題

プロジェクト概要

タクロバンと滋賀県の関係

11 田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム

2019年3月31日発行

田の浦まちづくりプロジェクト

田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム

ビッグニュース

私たち田の浦ファンクラブ学生サポートチームが運営を行う「海の大運動会 in 田の浦」が昨年度も開催されました。この運動会は、その名の通り海が近い田の浦ならではのユニークな競技が行われます。子どもたちからおじいちゃん、おばあちゃんまで幅広い年代、地域の方が参加してくださいます。

そんな多くの方々が楽しみにしてくださっている海の大運動会を、さらに誰もが楽しめるように工夫するために新競技「ウキうき浮き玉転がし」が加わりました。この競技は、超特大ボールをチームのみんなで協力しながら相手チームよりはやくゴールに運ぶという競技になっています。蓋一つたまでできる競技だったため、おじいちゃん・おばあちゃんがたくさん参加してくださいました。なかなか思うように動かないボールに悪戦苦闘しながら、大きな盛り上がりを見せた新競技でした。今年度開催予定の運動会も更なるパワーアップを目指し話し合いを進めています！

プロジェクト紹介

田の浦ファンクラブ学生サポートチームでは毎月の定期訪問に加え、クリスマス会やレニキャンドルナイトなどといった取り組みをしています。地元の方たちとの交流を深め、時には柔気が残した大きな爪痕を実際に見る・聞く・感じることで学校ではあまり教えてくれない大切なことを学ぶことができます。

ちょっと聞いてよ！プロジェクト自慢

地域の声

学生さん毎月来ていたところに来てくれていつもありがとう。海の大運動会の新競技「ウキうき浮き玉転がし」はおばあちゃんも参加できて楽しかったです。ボールが頭の上を通っていき面白かったです。

成果と課題

昨年度は新メンバーが6人入り、取り組みについて新しいアイデアが提案されました。小規模な団体であるため一年の活動を通して、一人一人が田の浦と向き合うことができました。

今年度は、田の浦の魅力を外部に発信していくため、広報活動に力を入れていきます。また、今まであまりできていなかった漁業での活動も視野に入れて取り組んでいきます！

12 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

平成30年3月10日発行

近江楽座 かみおかべ古民家活用計画 ~SLEEPING BEAUTY~

プロジェクト紹介

ビッグニュース

7月14日に古民家で夏祭りを開催！

地域の方の声

プロジェクト自慢

ひょうたんの活用

成果と課題

13 未来看護塾

— 発刊日　2019年3月31日 —

活動報告新聞

ビッグニュース

プロジェクト紹介

地域の声

活動自慢

1年間の成果と課題

14 子ども学習支援サポーターズ

2019年3月31日　子ども学習支援サポーターズ発行　第1号

学サポ新聞

発行日 2019年3月31日

2018年 学サポ発足!!

子どもが作って売る！

子どもの経験広げる！

地域の声

活動成果＆課題

15 Taga-Town-Project

16 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

17 座・沖島

18 地域博物館プロジェクト

19　フラワーエネルギー「なの・わり」

発行日　2019年3月31日　　帝産新聞

フラワーエネルギー「なの・わり」

チームのヒヤダニュース

菜の花の収穫量が増大見込み

二〇一八年六月に菜の花の収穫を行ったが、収穫量はわずか百グラムほどの結果となった。「落ち込んだ収穫量を回復すべく、諦めず実践方法をわ求めて、チーム取り組んだ。この問題の解決には二つの改善を行った。一つは、肥料や堆肥の種類と量を正しく撒くことである。特に堆肥は、軽トラ二台の積載量分を撒いた。二回目は播種時期をしっかり守ることである。これまでは十一月に行っていたものを十月に前倒しした。その結果、二月の収穫時期が遅れず、実を付けることが出来た。来年春にもこの収穫できる見込みとなった。この方法を次の世代へ確実に伝えることができるよう、現在まとめているところである。一方で、別の課題も見えてきたので、来年度以降につなげていきたい。

▲学外畑の様子

▲学外畑での作業風景

▼今年度の菜の花栽培日程

10月12日	堆肥，肥料まき
10月17日	耕転
10月19日	播種
10月～12月	水やり
2月7日	追肥

プロジェクト紹介

フラワーエネルギー「なの・わり」は植物使った資源社会の形成を目指すプロジェクトである。収穫した種から菜の花・ひまわりを栽培し、収穫した種からバイオディーゼル燃料を作っている。また、この取り組みや環境問題を小学生、高校生に知ってもらうために、出前授業や大連携授業を行っている。加えて、科学実験の楽しさを体感してもらうイベントをヤンマーミュージアムで毎年開催している。

地域の声

近年は、土壌の変化が原因か、以前程の収穫量がなく、又、長年にわたって耕作しているせいか、お互い以前程の熱がなくなれば、様に思います。地元の皆さんや先生に地域活性化のために住民との交流の場ができればと思っています。

小学校でSDGsを広める

▶能登川北小学校での授業

プロジェクト自慢

昨年に引き続き、今年度も出前授業を行った。

ワークショップ大好評

ワークショップの様子 ▶

七月二八日に、ヤンマーミュージアムにて小学生以下の子ども学生を対象に、簡単な実験を体験してもらうワークショップを行った。三つの実験を行ったが、いずれの実験も大好評だった。来年度は仮ミ事ジアムるのびの改、さらに人を呼び込んで、楽しいワークショップを開催したい。

成果と課題

今年度収穫分の菜種・ひまわり種は、収穫量が落ち込んだため、土壌改善に取り組んだ。出前授業では、彦根市以外で行うことができた。安定して収穫を管理する方法を考えるのが、今後の課題だ。

この取り組みは、地球環境とバイオディーゼルについて知ってもらうことが目的である。また、彦根市以外の小学校や高校で授業を行えたのは、大きな成果である。また、授業の中にSDGsを簡単に紹介し、知ってもらう機会を設けることができた。

20　たけともミライ

2019年（平成31年）3月31日　日曜日

たけとも便り

2019年3月31日

文責：大橋あゆり

会所ちゃん
竹の会所のイメージキャラクター

竹の会所 解体後第二の竣工

2018年9月の竹の会所の姿

竹編さをしながらこどもたちと一緒にお祭りを過ごす

ちょっと聞いてよ！プロジェクト自慢

お祭りで会えるこどもたち

地域の声

一年間の活動を通して 感謝を伝える8年目

2019年3月10日に開催された展覧会「竹の会所の歩み」

たけともとは？

プロジェクト紹介

2018年9月補修後の竹の会所

21　木興プロジェクト

2019年3月31日　滋賀新聞

木興プロジェクト

田の浦

社の修繕

地域の方と共に、

22　Jesuit House プロジェクト

Jesuit House プロジェクト

3 共通プログラムの報告

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座

近江楽座における地域活動をより安全に行うために、実践的安全管理の進め方と、活動にともなうリスクの多い交通事故の防止について、専門家を招いて連続講座を開催しました。

第一回　交通事故防止について

日時：2018 年 7 月 26 日（木）12：20 ～ 12：50
会場：講義室 A4-107
講師：彦根警察署 交通課巡査長　西口しお里さん

自転車の交通ルールと車での交通事故を中心にお話していただきました。

参加した学生の中には自転車で通学する学生も多かったのですが、初めて知った自転車の交通ルールも多くあったようです。なかには自分が気付かないうちに交通違反をしていたかもしれないと考えると怖くなったという感想を持った学生もいました。

車の交通事故については、飲酒運転と彦根で事故の多い場所などについてお話いただきました。彦根警察署管内で交通事故が多発している区間をレッドゾーンと指定されており、ほとんどがくすのき通りやベルロードといった学生には馴染みのある通りであったため、より危険を身近に感じられたようでした。

また、講習の中では飲酒ゴーグルを使い、飲酒状態を体験しました。飲酒ゴーグルをつけるとまっすぐ歩いているつもりでも斜めに進んでしまっていたりと、日常当たり前にできていることができなくなることがよく分かる体験でした。

長期休暇に入ると普段とは異なる場所で活動をしたり、遠出をしたりする機会が増えます。長期休暇に入る前に交通ルール・交通事故について改めて考える良い機会となりました。

会場の様子

飲酒ゴーグルで飲酒状態を体験する

第二回　ボランティア活動における実践的安全管理について

日時：2018 年 11 月 12 日（月）18：10 ～20：00
会場：湖風会館 (A7 棟)　会議室・談話室
講師:NPO 法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）
事業部 深山恭介さん
アシスタント 杉村眞子さん(立命館大学４回生)

はじめに NPO 法人国際ボランティア学生協会についてお話いただき、安全管理についてワークショップを交えながら講習を行っていただきました。

講習は「リスクヘッジについて」「危険予測活動について」「安全管理チェックシートの作成」という流れで行われました。

「リスクヘッジについて」

どのようなリスクがあるか知ることで、予測をたてリスクに対処することができるということを分かりやすく教えていただきました。

参加者の感想には、「活動前や活動中のリスクには気を配っていたが、報告書の作成や活動でお世話になった方へのお礼といった活動後のリスク管理にはあまり気を使っていなかった」や、「どんなリスクがあるか全員で共有する大切さを学ぶことができた」といった声がありました。

会場の様子

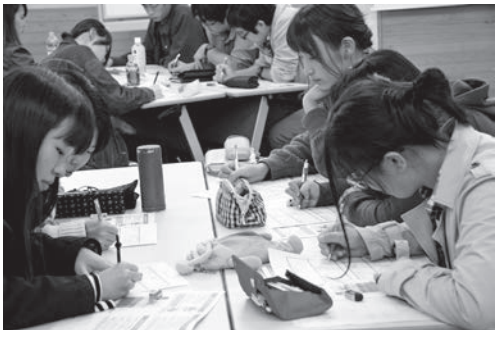
「危険予測活動について」

実際に近江楽座の活動写真を使い、写真の中にどのような危険が潜んでいるかを考え、危険なポイントをピックアップ。自分であればどうするか対策を書き出し、全体で共有しました。

「安全管理チェックシートの作成」

ハインリッヒの法則の説明いただき、自分が経験したヒヤリ・ハットを書き出し、過去の自分にアドバイスする形で安全管理チェックシートを作成していきました。書き出してみると多くのヒヤリ・ハットが日常の中にあったのだと気づきました。「今日行ったワークショップをチームメンバーや地域の方とも一緒にやってみたい」という感想のように、このワークショップをチームの活動に置き換えて考えてもらい、実際の活動で活かすことのできる安全管理チェックシートを作成してもらいたいです。

講習を受け、身の回りにある危険についてとそれを回避するためにはどのようにしていけばよいのか考えてもらうことができたと思います。参加者からは「安全管理の大切さを学んだ」「活動の反省会はしていたが事前にリスクを考えるといったことはしたことがなく新鮮だったし、必要なことだと感じた」といった感想があり、改めて自分たちの活動を安全管理という面から見直す機会となりました。



チームで話し合いリスクを書き出す

3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」

日　時：2018年11月26日（月）～29日（木）
　　各日18：10～19：40
会　場：湖風会館（A7棟）　会議室・談話室
参加者：約80名

前半の活動を振り返り、ノウハウを共有し、伝えることを目的として、中間報告会を開催しました。

＜プログラム＞

1. 各チームからの活動報告
2. 「活動記録シート」へのコメント
3. コメントの共有

第一部　各チームからの活動報告

前半の活動報告を各チーム5分で行っていきます。どのチームも前半だけで様々な活動を行っていて、それぞれが密度の濃い活動のため、発表時間の5分に収めるのが大変そうでした。

第二部「活動記録シート」へのコメント

活動報告を聞いて、質問をしたい点・共感した点等のコメントを付箋に書き出し、活動記録シートの隣に貼っていきます。

活動記録シートは前半に行った活動を事業ごとにまとめたもので、中間報告会当日はパネルに張り出しました。

＜中間報告会日程＞

	グループ①	グループ②	グループ③	グループ④
日　程	11月26日（月）	11月27日（火）	11月28日（水）	11月29日（木）
参加チーム	BAMBOO HOUSE PROJECT	とよさと快蔵プロジェクト	おとくらプロジェクト	廃棄物バスターズ
	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	政所茶レン茶ー	とよさらだプロジェクト	あかりんちゅ
	未来看護塾	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-	滋賀県大生き物研究会	タクロバン復興支援プロジェクト
	子ども学習支援 サポーターズ	スチューデント・キュレイターズ	ボランティアサークル Harmony	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
	Taga-Town-Project	木之本こじへい プロジェクト	フラワーエネルギー 「なの・わり」	座・沖島
	たけともミライ		Jesuit House プロジェクト	木興プロジェクト

第三部　コメントの共有

活動記録シートの隣に貼っていった付箋を、全体で共有をしました。司会の学生がコメントを紹介し、それにチームのメンバーが補足をおこなったり、質問に答えたりして、第1部で報告を聞くだけでは分からなかったこと等を掘り下げていきました。

グループ①（11月26日）

メンバーを増やす方法やチーム内での情報共有、活動の継承について、多く話題にのぼりました。それぞれに上手くいった方法を教えあったり、逆にあまり効果がなかった方法を話したりしました。「他のグループの活動で自分の団体にも取り入れたいものばかりだった」と感想があり、同じような悩みを持つ活動も多く、お互いに参考になったようでした。

活動報告の様子

コメントを書いた付箋をパネルに貼っていく

グループ②（11月27日）

外部の団体との関わりが印象に残りました。他大学や他団体との交流や新たな取り組みを行ったチームが多く、またあるチームはイベントの参加を続けてきて今年はイベントの運営側も任されるようになり、忙しいけれど嬉しいと話されていました。このようなやりがいや楽しさが活動の広がりにつながっていくのではないでしょうか。

グループ③（11月28日）

メンバー間の情報共有はどのように行っているのかについて、それぞれのチームが実践している方法を話し合いました。メールサービスを利用しているチームや、メールはあまり見ないメンバーが多くラインを使っているチーム等、活動にあった方法で情報共有をしていました。「情報共有で悩んでいたので参考にしたい」という声もありました。

司会の学生がパネルに貼られた付箋を紹介

参加者と寄せられたコメントを共有する

グループ④（11 月 29 日）

この日は 4 日間で一番参加者も多く、多様な質問がありました。学外からの参加者もあり、活動について掘り下げて聞いていく質問がたくさん出ました。活動についてより詳しく知ることができたことで、「活動への刺激になった」「様々な団体の考え方が知れて、とても参考になった」といった感想がありました。

まとめ

全体を通して「他のチームの活動について知ることができて良かった」といった感想が一番多く、他のチームの活動を知ったことで一緒に何かしていけないかという話し合いを行った日もありました。ここから新しいコラボが始まることを期待したいです。

また第三部：「コメントの共有」で自分たちの活動に対して参加した方からコメントをもらったことで活動を振り返るきっかけになったようでした。「嬉しい言葉ももらえて活動の励みになった」「他の団体の報告を聞いて、焦りを感じてしまった」など、様々な感想がありましたが、多くのチームが自分たちの活動の参考になったと書いてくれました。

今回の中間報告会で共有した悩みや学びを、今年度の残りの活動で活かしていってほしいです。

会場の様子

活動のあしあと展

日時：2018 年 11 月 30 日（金）～ 12 月 6 日（木）
会場：交流センター ホワイエ

交流センターのホワイエにて活動のあしあと展を開催しました。

中間報告会で掲示した活動記録シートと各チームに寄せられたコメントを展示しました。

展示の様子

3-3 活動報告会 まちづくり farmer's festa - まちをたがやす人たちの感謝祭 -

学生たちが取り組んだ 1 年間の活動内容を発表し、「学生力」を生かした地域活性化の取組について、大学が地域とともに考えていくことを目的に開催しました。支えていただいた地域の方々に感謝し、近江楽座の活動が持続・発展していけるよう、多くの方々に参加していただきました。

＜プログラム＞
- ○ 開会挨拶（髙橋地域連携担当理事）
- ○ 活動発表【パート1】、【パート 2】
- ○ 交流・ランチタイム
- ○ 活動発表【パート 3】
- ○ 活動写真 AWARD 発表・表彰
- ○ 全体総括（倉茂副学長）

日　時：2019 年 4 月 20 日（土）9:30-14:30
会　場：ナシェリア (人間看護学部棟食堂）
参加者：約 50 名

＜活動報告会　グループ分け＞

	【パート1】9:45 ～ 10:45 ＜学生力＞	【パート2】10:55 ～ 11:55 ＜つながり＞	【パート3】13:00 ～ 14:00 ＜地域資源＞
司　会	上田洋平先生 （地域共生センター）	竹岡寛文さん （株式会社タケコマイ）	島田和久先生 （全学共通教育推進機構）
チーム	あかりんちゅ	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	信・楽・人
	座・沖島	スチューデント・キュレイターズ	とよさらだ
	たけともミライ	ボランティアサークル Harmony	タクロバン復興支援プロジェクト
	おとくらプロジェクト	子ども学習支援サポーターズ	BAMBOO HOUSE PROJECT
	木興プロジェクト	とよさと快蔵プロジェクト	Taga-Town-Project
地域ゲスト	本多有美子さん 富田雅美さん （沖島町離島振興推進協議会） 加藤義朗さん （おとくら家主）	川島光男さん （白谷荘歴史民俗博物館） 田中千代子さん 藤本悦子さん （NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー）	奥田泰央さん （窯元散策路の WA） 浅井基義さん （菩提寺まちづくり協議会） 石見春香さん （株式会社雄夢）

3月のSDGs学生大会で報告を行ったチームがあるため、今回は2018年度近江楽座の活動プロジェクトのうち15チームが一年間の活動内容を報告しました。

各チームの発表7分、ゲストコメント・質疑応答5分の計12分の持ち時間で、活発な意見交換が行われました。

活動発表【パート1】テーマ：学生力

Sプロジェクトのあかりんちゅの活動に対しては、「是非うちの寺の残ろうを利用してキャンドルを作ってもらって、お寺でキャンドルナイトをやってほしい」という要望や、残ろうを生かしたビジネスとしての可能性の大きさについてコメントがあり、人材確保等の課題について意見交換を行いました。

座・沖島に対しては、「非常にたくさんの活動をやられている。それらは沖島の一部になっており、学生の存在価値が大きくなっている。学生さんがいるということが私たちにとっても励みになる。お互いに協力し合いながらやっていけたらよい」と地域の方からコメントいただきました。他のチームの学生から、もっと情報発信をすれば、沖島の魅力が広まるのではないかという問題提起やメンバーを多く集めるコツについて質問があり、プロジェクトの人数は多いが、実際に活動に参加する人が少ないといった悩みも打ち明けられました。

たけともミライに対しては、竹の会所の解体後の活動について、関わりを持っている人たちと地域の未来について話し合っていきたいということや継続的に関わりをもっている卒業生の存在等について意見交換を行いました。

おとくらプロジェクトに対しては、応援隊の加藤さんからは、「今年度、10周年になる。継続は力なり、ということを言い続けようと思っている」とコメントいただきました。他、地域の人たちの利用は、1日どれくらいなのか。数字を知りたい。多い時は15人とか、少ない時は3人くらい。常連の方も5人くらいいる。経済的にはうまく回っているのか。回っているが、課題はある等々、質疑応答がありました。

木興プロジェクトについて、地域の要望に対して、どう応えていくのかというスタンスが持てるような活動に是非なってほしいという希望や、遠隔地での活動における課題について質問があり、何度も訪れることでコミュニケーションを円滑にしていることや田の浦ファンクラブの車に同乗させてもらう等、支援があることの報告がありました。また、活動の記録を残していくことは、将来きっと役立つ時が来るというコメントがありました。

最後に上田先生から、学生力に関して、学生に対する地域側の関心が時間とともに変わっていく。学生が何かを「する」ことから出発して、何年かすると、「いる」ということが価値を持ってくる。学生は危なっかしいところがあるからこそ、地域の人を動かす力をもっている。また、いろんな人をつないでいく、そういう力もある。活動報告全体を通して、活動そのものも変わっていく、というところも見られた、とまとめがありました。

活動発表（たけともミライ）

活動発表【パート2】テーマ：つながり

田の浦ファンクラブ学生サポートチームの活動に対しては、震災がきっかけだったが、今は異文化の所で交流する、そういう機会にもなっている。地域の主体性も育まれてきてほり、すばらしい取組だと思う。毎回、新たな発見があり、13時間かけて行くだけの価値はある。向うのすばらしいものや文化を、こちらに伝えるということも期待したい、とコメントいただきました。

スチューデント・キュレイターズに対しては、地域の方から、継続的に活動されていることが大事。いろんな方がそこに集まってくる。過疎のところに若い人が集まってくる。活性化され、地域が明るくなってくる。活動だけでなく、いろんな広がりが出てくることを知っていただきたいとのコメントがありました。また、湖風祭での展示等に対する学生の反応や新入生がたくさん入ってきた要因について、親子づれやご高齢の方々が興味関心を持ってみてくれた、古文書が読めて、学芸員資格に興味がある、展示もできるので学生が魅力を感じている等、質疑応答がありました。

ボランティアサークルHarmonyに対しては、地域の方から、発達障害の子どもが多い。親子だと、つい怒ってしまったり、保護者がひきこもりになるような家庭もある。そんな中、学生さんは、やさしく接して下さったり、若い視点でいろいろ活動してもらえるので、ありがたい。クリスマス会やお泊り会など、保護者だけではできない大きなイベントをやっていただき、子どもたちは楽しみにしている、とコメントをいただいた。他、教職を目指されている方が多いのか、教員より福祉系の仕事に興味を持っている人が多いのが印象等、質疑応答がありました。

子ども学習支援サポーターズについて、子ども食堂の活動はどういうことに気をつけているかの質問に対して、地域のお兄さん、お姉さんみたいな感覚で、楽しくご飯を食べる、おしゃべりするというふうに、自然体で楽しむことを心がけているとの応答がありました。

とよさと快蔵プロジェクトに対しては、改修工事で学生は延べ何名ぐらい携わったのか。14日間、一日当たり、20名～30名近い学生が現場に入っており。総勢60名近い学生が関わっている。費用に関しては、材料費だけで25万円。何故、こういう質問をしたのかというと、学生さんにも経済観念を持ってもらいたいから。これから社会に出ていくので。民間がやるとしたら、どれくらいかかるとか。頭の片隅に置いておくと、もっとよい活動になる。大学としても、これだけのものがかかっているということを持っていることは大事。等、質疑応答を行いました。

質疑応答（子ども学習支援サポーターズ）

地域の方からのコメント（地域博物館プロジェクト）

交流・ランチタイム

おにぎりとお味噌汁を用意し、ランチタイムに参加いただいた方と交流を深めました。それぞれ違うチームに所属する方が集まって、お昼を過ごすことで更にお互いの活動を知る機会となったようです。おにぎりとお味噌汁の準備には近江楽座の学生に協力いただきました。お手伝いいただいた皆さん、ありがとうございました。

ランチタイムの様子

活動発表【パート3】テーマ：地域資源

信・楽・人に対しては、昨年度の報告会に参加して私たちと学生グループとの接点の少なさを感じたので、今年は月1回の会議に何らかの形で参加してもらって、情報共有をはかった。課題として、メンバーの少ない年もあるので、地域の側としても臨機応変に対応したい。たとえば、学生に興味を持ってもらえるような散策ツアーとか、メンバーが一人でも増えるようにサポートしていきたい。学生の方も、引き継ぎに際して、上級生に気軽に相談してもらえるような雰囲気づくりや、周りの人をうまく利用してもらえるよう心がけている。他、窯元と一緒に商品化した陶器のアロマボールについて質疑応答がありました。

とよさらだに対しては、地域のお年寄りにもっと協力してもらったらよいのではというアドバイスがあり、相談するだけでも教えられることが多いので実行していきたい。また、活動に参加する学生が少ないという悩みがある一方で、どんなところにやりがいがあったとか、楽しかったとか、セールスポイントはどうかと質問があり、個人的には自分のまいた種の芽が出てくれることが一番うれしい。その後、栽培して収穫したものをお祭りとかで食べていただける時、すごくやりがいを感じる。活動に入ってきてくれる学生には是非、体験してもらって実感してもらいたい、と応答がありました。六次化については、直売所以外の販売経路を模索して是非、実現していきたい。4月5月に植える野菜が多いので、他の団体で、つくってほしい野菜とかあれば言ってもらって、是非、コラボしていきたい、と抱負が語られました。

タクロバン復興支援プロジェクトに対しては、建設作業に参加した子どもたちの年齢は何歳くらいか、との質問があり、高校生くらいが中心。フィリピンでは自分たちでものをつくることが習慣化されているので、高校生でも密度の高い建設作業を一緒にやりながら進めた。一緒に作業を行うことで、完成後のメンテナンスを自分たちでできるようにしたいという思いもある。想定外のことでは、当初計画していた土地が使えなくなり、急きょ場所を

活動発表（信・楽・人）

変更して建てることになった。最後に、日本の災害支援に生かせることについて、工法の提案とか物ではない何か、技みたいなものを伝えることができるのではないか、と応答がありました。

BAMBOO HOUSE PROJECT に対しては、地域の方からメンバーが高齢化しており学生さんが来てくれて大変助かっている。中学生に環境講座を開催してもらったり、子どもたちが放課後、遊びに来たりして、地元でも認知してもらっている。また、竹の構造物の寿命について、無加工で防腐剤処理とかしていないので、もって5年ぐらい。場所によって条件が異なるため部分的に補修している、と質疑応答がありました。

Taga-Town-Project に対しては、2012 年度からプロジェクトに関わって多賀町で活動し、多賀町で就職。今年度の活動にもほぼ関っている県立大学の卒業生から、多賀町の食を記録に残そうという活動が印象に残っている。集落に赴いて調査をし、記録していった。いろいろな発見があって、多賀町の方も知らなかったという意見をいただいたりして、すごくいい活動だったかなと印象に残っている。また新しくオープンした公民館で写真展や食にまつわる展示とイベントを手伝わせていただき、人数は少ないながら大きな活動につながっていて、Taga-Town-Project の知名度が上った年

活動発表（BAMBOO HOUSE PROJECT）

地域の方からのコメント（Taga-Town-Project）

だった、とコメントいただいた。やりがいについての質問では、「たくさんある。地域の方からたくさん声をかけていただき、あけぼのパークでイベントを合同開催させていただいたりして、やりがいはすごく感じている」と。メンバーを増やしていくためにどんなことを発信していけばよいかという質問に対して、「立ち上げ当時と今を較べると、活動内容が変わってきている。今はソフトな部門やまちづくりに移ってきているので、そういうことに関心のある学生や食に関することが多賀で今ホットなので、生活栄養学科の学生にも是非、声をかけていきたい」と、抱負が語られました。

活動発表の最後にはパート 2 の司会を務めていただき、また近江楽座 OB でもある竹岡さんから全体に対してコメントをいただきました。

現代 GP に採択され、3 年で終わると言われていた近江楽座の活動がこうして 15 年続いていて、大学として非常にいい取組だと思う。学生だから失敗ができるチャンスだという発言があったが、もっともだと思う。学生の時にいろいろ失敗をして怒られたり、チャレンジをさせてもらった。一つだけ伝えておきたいことは、誰もがどんな状況でも失敗してもいいわけではないということ。失敗できるだけの信

頼関係とか、そこにずっと通っていること、地域の人との関係をつくっていることを大事にしてほしい。自分の都合だけで行って、失敗して行かなくなるというのは、地域にとってよくないことだと思う。こうして長く続いているプロジェクトがたくさん出てきている中で、そういうことが起こってしまうと地域との信頼関係がくずれてしまう。みなさん一人ひとりが自覚をしながら活動してほしい。地域の側からも期待がすごく大きくなっている。卒業生もたくさん出てきており、地域に関わっている卒業生も多いので、関わりをつくりながら、交流人口が増えていくとよいと思う。いろんなお願いごとができるような人間関係が出来ていくと、豊かな地域社会になっていくのではないかと思う。これからもがんばってほしい。

竹岡さんよりコメントをいただく

副賞として環境こだわり米やいちご、いちごの加工品、お菓子など「地域のこだわり農産品」が髙橋地域連携担当理事から手渡されました。

髙橋地域連携担当理事より副賞の授与

受賞写真
左：かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
右上：とよさと快蔵プロジェクト
右下：タクロバン復興支援プロジェクト

活動写真 AWARD

活動成果報告会の最後に活動写真ＡＷＡＲＤの発表と表彰を行いました。

活動写真ＡＷＡＲＤを受賞したのは下記３チームの写真となりました。

・タクロバン復興支援プロジェクト
「コミュニティチャペルの建設活動」
・とよさと快蔵プロジェクト「酒蔵祭」
・かみおかべ古民家活用計画－ SLEEPING BEAUTY －
「節分パーティー」

全体総括

倉茂副学長、教育・学生支援担当理事より以下のとおり全体の総括をしていただきました。

学生たちのパワーはもちろんだが、地域の方々に受け入れていただく、一緒につきあって、叱っていただく、場合によっては励ましていただく。学生たちは、親以外の地域の大人たちとつきあう経験がなかなかない。学生時代に大人とつきあうことがしっかりとできるということが、学生たちの成長にどれだけ大きなものになるのか。いつも感謝の

気持ちで一杯。

近江楽座の活動を何年も継続するというのは並大抵でできることではない。私たちにも自戒の念が込められている。それは学生たちの活動に教員が手を入れすぎないこと。継続は力なのだが、継続させるということは実は大変な力がいる。そういうことを乗り越え、地域の新しいニーズを踏まえた新しいものも実際にできてきている。

滋賀県立大学の目玉はなんですかと聞かれて、私たち大学を代表する者は、その目玉の一つとして、近江楽座の話をさせてもらっている。最近、近江楽座の活動に海外の大学が目をつけはじめている。こういう活動をしているんだったら、自分たちの学生を日本のこの大学に送りこんで、一緒に学ばせたいと。言葉の壁があるが、海外からも注目されている。そういう意味でこの活動は更に更に発展していくものだと思っている。

倉茂副学長より総括コメント

活動成果展示会

日時：2019 年 4 月 15 日（月）～ 19 日（金）
9:00 ～ 17:00
会場：交流センター　ホワイエ

交流センターのホワイエにて、全チームの活動成果を展示する活動報告展を開催しました。1 年間の活動をまとめた楽座新聞や活動で作成した成果物などが展示されました。また同時開催で活動写真展を行いました。

各チーム、1 年間の活動で撮影した写真から選りすぐりの 3 枚を展示してもらいました。

活動写真展で展示した写真の中から審査委員の方に審査をしていただいて、3 点の活動写真ＡＷＡＲＤが選定されました。

受賞した写真はもちろん、受賞とならなかった写真も良い写真が揃いました。

展示の様子

写真を眺める学生（活動写真展）

3-4 SDGs 学生大会　びわ湖で考える SDGs

日　時：2019 年 3 月 16 日（土）10:00-16:45
会　場：交流センター
主　催：滋賀県立大学
共　催：滋賀県、一般社団法人環びわ湖・地域コンソーシアム

県内外の学生等が、ＳＤＧｓの達成に関連する各自の活動を持ち寄って情報発信や情報交換を行い、交流を深めるとともに、新たな大学間ネットワークを構築することを目的に開催し、学生 193 名、一般 166 名　計 359 名の参加がありました。

滋賀県立大学近江楽座の学生団体の他、立命館大学、龍谷大学、滋賀短期大学、鳥取大学、静岡文化芸術大学、滋賀大学、同志社大学、長浜バイオ大学、滋賀文教短期大学、芝浦工業大学、滋賀医科大学、高知県立大学、慶應義塾大学、桃山学院大学、成安造形大学、びわ湖学院大学が参加し、県内の小中学校、高等学校からも参加がありました。

プログラムと内容

1．基調講演 (10:15-11:00)

滋賀県知事 三日月 大造氏

「なぜ、いま滋賀からＳＤＧｓなのか?」

2．パネルディスカッション (11:05-11:55)

滋賀県立大学 近江楽座・とよさと快蔵プロジェクトと立命館大学 Sustainable Week 実行委員会の活動報告があり、滋賀県知事、大津市長、滋賀トヨペット社長の皆様より応援メッセージをいただき、課題解決や協働事業の可能性などについてディスカッションを行いました。

3．ポスターセッション (12:00-13:30)

29 団体のポスター発表が行われました。

4．「ＳＤＧｓの 17 目標でつながる」ワークショップ (13:40-15:30)

参加者が 13 テーマの分科会に分かれ、グループディスカッションを行い、「サスティナブルな未来へのアクションプラン」をまとめ、成果を発表しました。

ワークショップテーマと報告団体

(1) 海外支援（飢餓・貧困・災害復興支援等）

○近江楽座「Jesuit House プロジェクト」

○近江楽座「タクロバン復興支援プロジェクト」

○ NPO 法人 ＤＩＦＡＲ

(2) 再生可能エネルギーを考える

○西村健之氏（株式会社滋賀原木）

○平岡俊一氏（滋賀県立大学 環境科学部）

○シン・エナジー株式会社

(3) 食と古民家改修

○近江楽座「とよさと快蔵プロジェクト」

○近江楽座「かみおかべ古民家活用計画」

○持続可能な食のあり方（滋賀短期大学）

(4) 復興まちづくりとソーシャルビジネス

○田中惇敏氏（九州大学）

○ NPO ツナガルドボク中国（鳥取大学）

○近江楽座「田の浦ファンクラブ学生サポートチーム」

(5) ＳＤＧｓカードゲーム体験

(6) エシカル消費とフエアトレード

○滋賀グリーン購入ネットワーク

○りとるあーす（静岡文化芸術大学）

(7) 持続可能な農業と地域ブランド

○近江楽座「政所茶レン茶゛ー」

○作物栽培学研究室（龍谷大学）

○ＣＯＭＥ☆ＲＩＳＨ（高知県立大学）

(8) 廃油リサイクルと資源活用

○近江楽座「フラワーエネルギー『なの・わり』」

○滋賀エコプロジェクト（滋賀大学）

○近江楽座「あかりんちゅ」

(9) 琵琶湖の環境

○近江楽座「人と環境を救う雨水タンク」

○佐和山小学校

○草津中学校（渋川小学校卒業生）

(10)・(11) 生態系保全・水草利活用

○近江楽座「内湖の再生と水辺のコーディネート」

○ＳＧＨホタル再生プロジェクト（守山高校）

○琵琶湖研究部（長浜バイオ大学）

○環境学生団体ＥＣＯＳＴ（滋賀県立大学）

(12) ＳＤＧｓ自体を広める

○ Sustainable Week 実行委員会（立命館大学）

○ＳＤＧｓ学生委員会準備会（芝浦工業大学）

(13) 健康と福祉を考える

○近江楽座「未来看護塾」

○リレーフォーライフ（滋賀医科大学）

○いけいけサロン活動（高知県立大学）

ポスターセッション（未来看護塾）

ワークショップでの活動発表（Jesuit House プロジェクト）

ワークショップ参加者でアクションプランを考える

4 学生有志活動

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」

"近江楽座や近江楽座チームをもっと知ってもらおう！"、"活動に興味を持ってもらおう！"という目的から、近江楽座学生委員会の呼びかけにより、14の有志チームによる近江楽座説明会が開催されました。

学生委員会とは

近江楽座を更に推進していくために、チーム間の交流・連携を目的として発足した有志学生による組織です。2006年に、当時のプロジェクトチームの代表経験者が中心となり結成されました。学部・学科・プロジェクトの枠を超えて活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指し、学生ならではの視点で近江楽座をサポートしています。

楽座市

日　時：2018年4月19日（木）、20日（金）
　　16：30~19：00
会　場：交流センターホワイエ

開催内容：
○ ブース相談会
○ 2017年度全チームの活動報告新聞の展示

＜参加チーム＞
- とよさと快蔵プロジェクト
- あかりんちゅ
- 政所茶レン茶゛ー
- おとくらプロジェクト
- 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
- とよさらだ
- 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
- かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- Taga-Town-Project
- ボランティアサークル Harmony
- 座・沖島
- スチューデント・キュレイターズ
- フラワーエネルギー「なの・わり」
- 木興プロジェクト

4月16日（月）から交流センターホワイエにて開催した活動報告展と活動写真展の最終2日間に合同説明会が開催されました。

それぞれのチームがブースをかまえて、自分達の活動について参加者に説明を行いました。成果物や模型を並べたり、お茶を振舞ったりと、それぞれの方法で自分達の活動をアピールしました。

参加者は新入生が多いですが、在校生も参加。

会場では全チームの楽座新聞と活動写真を展示しており、合同説明会に参加したチーム以外の活動についても知ってもらう機会となりました。

4-2 オープンキャンパス

日　時：2018 年 7 月 21 日（土）、22 日（日）
　　9：00 ～ 15：00
会　場：交流センターホワイエ

開催内容：

○ 学生による活動紹介、相談会
○ ムービーでの活動紹介
○ 活動展示

＜参加チーム＞

・あかりんちゅ
・政所茶レン茶゛ー
・おとくらプロジェクト
・とよさらだ
・田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
・かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-

オープンキャンパスにて、近江楽座の紹介を行いました。今年度は近江楽座・地域教育・SDGs の合同ブースで活動を紹介しました。

実際に活動を行う学生がブースに立ち、来場いただいた方に自分が行っている活動について、体験を交えながら説明をしてくれました。

また 2018 年度よりスタートした E プロジェクトとして活動するチームのパネルも展示しました。

会場の様子

4-3 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」

滋賀県と協定を締結し、県営住宅の空き住戸を活用して地域コミュニティの活性化を図る取組を進めました。活動は3つの柱からなり、1つがシェアハウス。学生が実際に暮らしながら地域と関わる活動を進めました。2つ目が、学生活動の拠点「楽座ルーム」の利用・運営。3つ目は、イベントの開催です。

シェアハウス

3名の学生が1年間県営住宅団地で生活し、年2回の草むしりや階段清掃等の共同活動、町内会費の集金、自治会総会への参加などの活動を行いました。困ったことがあった際には、相談し合える関係を築くことができたという学生もおり、団地での生活に馴染んでいる様子が伺えました。

「楽座ルーム」の利用・運営

年間、24回の利用があり、うち19回は、楽座の各プロジェクトが会議や制作、イベント準備、交流、荷物搬入等で利用し、4回が部屋の維持管理や環境整備の活動、残り1回は、2つの楽座チームのコラボ企画で地域の子どもたちや保護者を対象にイベントを実施しました。

イベントの開催

11月11日（日）に、あかりんちゅと子ども学習支援サポーターズが合同イベントを企画し、日頃、子ども学習支援サポーターズの活動に参加している子どもたちと地域の子どもたち、保護者の方がキャンドルづくりを行いました。

日　時：2018年11月11日（日）
　　13：00～16：00
場　所：楽座ルーム
企　画：あかりんちゅ・子ども学習支援サポーターズ

イベントチラシ

キャンドルを作る参加者

5 他大学等との交流

5-1 鳥取大学　地域価値創造研究教育機構　視察

日　時：2018 年 11 月 29 日（木）

鳥取大学地域価値創造研究教育機構の教員とコーディネーター、事務局職員が近江楽座の取組のヒアリング調査のため来訪されました。同日、18:10-19:40 に行われた中間報告会の見学もされました。

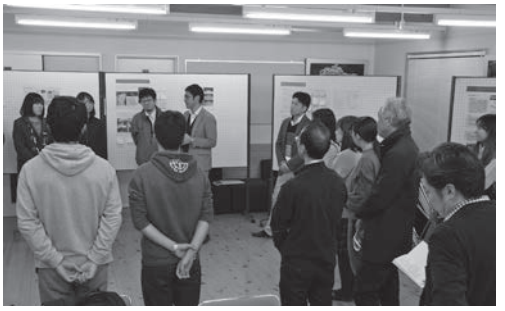
主な調査内容は、

○プロジェクトの募集要項と応募形式、審査のポイント
○プロジェクトの芽の見出し方、応募までのサポート
○プロジェクトの進捗管理や来年度に向けた活動と担当教員の関わり
○ B プロジェクトについて、案件の発掘と調整
○活動支援とコンサルティングを行うスタッフのスキル

等、実際に事業を運営していく上での課題やノウハウに関わるもので、専門委員会委員長の印南先生と事務局で応対し、有意義な意見交換をしました。

見学された中間報告会は最終の 4 日目で、「廃棄物バスターズ」「あかりんちゅ」「タクロバン復興支援プロジェクト」「かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-」「座・沖島」「木興プロジェクト」の 6 プロジェクトが報告を行い、鳥取大学の地域連携 PBL 推進室長の成清仁士先生からもコメントやアドバイスをいただきました。

また、3 月の SDGs 学生大会には鳥取大学の学生さんも参加して下さり、NPO ツナガルドボク中国の学生のみなさんが、土木や建設業の魅力を発信する活動について報告してくださいました。



中間報告会 4 日目の様子

コメント・アドバイスをいただく

5-2 大学 SDGs ACTION! AWARDS 2019 スタディツアー〈下川町× JAL〉賞を受賞（とよさと快蔵プロジェクト）

国連が掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向け、次代を担っていく若者の活動を後押しするため、朝日新聞社が「大学 SDGs ACTION! AWARDS」を創設し、第２回目となる本年度、最終選考会が２月20日、東京・有楽町 朝日ホールで開催されました。

80 件の応募の中から書類選考を通過した 12 チームがプレゼンテーションを行い、とよさと快蔵プロジェクトが「SDGs 移動仮設カフェ〈出張タルタルーガ〉の展開」でスタディツアー＜下川町×JAL ＞賞を受賞しました。

これは、北海道下川町（第１回ジャパン SDGs アワードの内閣総理大臣賞受賞団体）と協賛企業 JAPAN AIRLINES がタイアップして、下川町での学生のスタディツアーを全面的に支援しようというものです。

受賞の様子

SDGs 移動仮設カフェ ＜出張タルタルーガ＞の展開

「とよさと快蔵プロジェクト」は、滋賀県豊郷町で、町に多く残る空き家を地域資産として捉え、学生ならではの視点で改修、再活用し、まちを元気にしていこうといく活動を 15 年間続けています。活動内容は改修部門、イベント部門、BAR タルタルーガを経営するタルタルーガ部門の３つに分かれています。

本提案「SDGs 移動仮設カフェ〈出張タルタルーガ〉の展開」は、空き家の利活用という全国的な課題に対して、本プロジェクトが積み重ねてきたプロセスが課題解決の布石になるのではという考えのもと、学生と地域をつなげる役割を果たしているタルタルーガの機能を町の外にも持って行き、他の地域でも快蔵プロジェクトの活動を知ってもらい、交流できるよう＜出張タルタルーガ＞を企画しようというものです。そのために、持ち運び可能な仮設店舗を設計・製作し、持続可能な地域づくりに貢献する機会を多くつくっていくことを目的としています。

ちなみにタルタルーガとは、イタリア語で亀を意味します。童話「ウサギと亀」に出てくる亀のように遅くても着実に進んでいきたいという思いが込められています。

6 情報発信

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット

近江楽座ホームページの運営

URL：http://ohmirakuza.net/

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトでもある近江楽座ホームページの運営を行い、随時最新情報を更新しています。

＜追加コンテンツ＞

○ 楽座文庫
　過去の「近江楽座 活動報告書」等を追加

プロジェクトレポート

事務局スタッフが、実際にプロジェクトの現場を訪れ、活動レポートを作成・発行しました。2018度は計2号発行。3チームの活動を取材しました。発行したレポートは、学内食堂前にある近江楽座掲示板に掲示。近江楽座のホームページにも掲載しています。

＜2018年度プロジェクトレポート＞

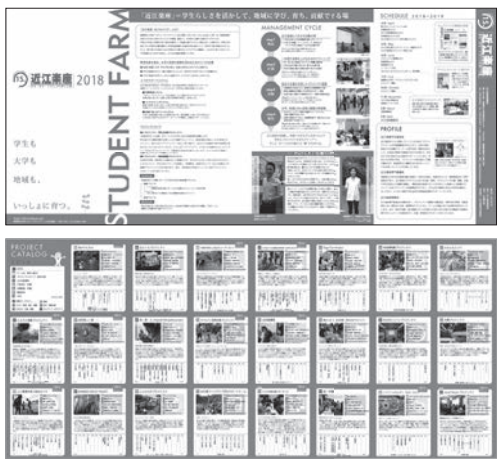
○ [あかりんちゅ・子ども学習支援サポーターズ]
○ [おとくらプロジェクト]

プロジェクトレポート
（第1号：あかりんちゅ・子ども学習支援サポーターズ）
（第2号：おとくらプロジェクト）

活動紹介リーフレット2018

デザイン：上田健太郎
取材協力：学生委員会

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取組や、2018度近江楽座に採択されたAプロジェクト23件を写真入りで紹介するリーフレットを作成しました。近江楽座OB・OGにインタビューした「-VOICE- 先輩の声」では学生委員会が取材を行いました。



近江楽座活動紹介リーフレット2018

7 付録

7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者	滋賀県立大学理事長　廣川能嗣
事業推進責任者	近江楽座専門委員会　委員長　印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部	浦部美佐子
	林宰司
	村上修一
	金子尚志
	迫田正美
工学部	河﨑澄
	柳澤淳一
人間文化学部	石川慎治
	武田俊輔
	印南比呂志
	佐々木一泰
	細馬宏通
人間看護学部	伊丹君和
	横井和美
地域共生センター	鵜飼修

近江楽座事務局	秦憲志
	前川瑛美梨
	髙谷美穂

※ 2018 年度 (2019 年 3 月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

7-2 メディア掲載一覧

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2018.7	とよさと快蔵プロジェクト	広報とよさと	まちの話題　とよさと快蔵プロジェクト
2	2018.9.15	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	夢いっぱいの雑貨店に　豊郷　県立大生が倉庫改修励む
3	2018.9.28	とよさと快蔵プロジェクト	京都新聞	県立大「とよさと快蔵プロジェクト」15 年目再生古民家　憩いの場に
4	2018.9.16	とよさと快蔵プロジェクト	一般社団法人プロモーションうるま	講演会での事例紹介
5	2018.10.16	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	古民家マルシェにぎわう　豊郷　改修した県立大生が開催
6	2018.10.16	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	豊郷町で農業祭
7	2018.10.21	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	30 種超ずらり　利き酒楽しむ　豊郷・岡村本家
8	2018.12.1	とよさと快蔵プロジェクト	おうみネット 107 号	事例紹介　学生がら学生へと受け継がれていく　活動と地域との信頼関係
9	2019.1.11	とよさと快蔵プロジェクト	豊郷町吉田公民館広報誌「よしだ」	プロジェクト紹介
10	2019.2.25	とよさと快蔵プロジェクト	関西大学広報紙 “ 関大 LinKU”	プロジェクト紹介・インタビュー
11	2019.4.10	とよさと快蔵プロジェクト	夢けんせつ増刊号（第 689 号）	地域とつながる滋賀の学生たちの取り組み
12	2019.3.8	とよさと快蔵プロジェクト	FM おおつ	プロジェクト紹介・SDG s特集
13	2019.3.29	とよさと快蔵プロジェクト	びわ湖放送	滋賀創生ゼミナール
14	2019.3.26	とよさと快蔵プロジェクト	朝日新聞	大学 SDGs ACTION! AWARD2019 スタディツアー〈下川町×JAL〉賞　滋賀県立大学　上田健太郎さん
15	2018.7.4	あかりんちゅ	朝日新聞	県民住宅　学生が新風　協定結び入居促進
16	2019.2.9	政所茶レン茶゛ー	京都新聞	東近江の魅力発信　大学生が活動報告　京滋 4 大学・5 団体登壇
17	2019.2.11	政所茶レン茶゛ー	朝日新聞	大学生が探る　東近江おこし　5 グループ、活動発表
18	2018.11.9	BAMBOO HOUSE PROJECT	読売しが県民情報	冒険心かりたてる遊び場作り　バンブーハウス
19	2018.5.1	おとくらプロジェクト	広報ひこね	市民活動のはじめ方　学生と住民が一緒に考えるまちの未来　おとくらプロジェクト
20	2018.5.18	おとくらプロジェクト	読売しが県民情報	キラキラスポット　古民家と蔵改装　喫茶や寄席も
21	2018.5.19	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	桂三度さん落語披露　高宮おとくら 27 日
22	2018.6.6	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	高宮の子ども食堂　県大生も支援
23	2018.7	おとくらプロジェクト	県大 jiman 第 23 号	AFTER SCHOOL REPORT　おとくらプロジェクト
24	2018.7.24	おとくらプロジェクト	中日新聞	海外芸術家 8 人　古民家滞在制作　彦根・不破邸

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
25	2018.8.19	おとくらプロジェクト	京都新聞	子らと県立大生　熱々ピザ手作り　彦根の古民家
26	2018.12.1	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	高宮で寄席（近江楽座「おとくらプロジェクト」）
27	2019.1.11	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-	びわ湖放送	キラりん滋賀　キラっと中継「焼き物の里信楽」
28	2018.7.27	タクロバン復興支援プロジェクト	読売しが県民情報	近江すたいる　東南アジアの人々を支援　県内大学生が住宅を建設
29	2018.8.1	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	広報南さんりく	情報ボックス（暮らしの情報）
30	2018.8.13	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	南三陸なう	【36news】2018.08.11 海の大運動会 in 田の浦開催
31	2019.1.1	未来看護塾	旺文社「蛍雪時代」1 月号	滋賀県立大学　地域活動プログラムの学生団体が宮城県で支援活動を実施
32	2018.8.8	未来看護塾	京都新聞	まちかど　彦根　県立大「未来看護塾」
33	2018.8.9	未来看護塾	中日新聞	地域の健康手助け　血圧測定や相談会　彦根で県立大生ら
34	2019.1.11	未来看護塾	滋賀県広報誌「滋賀プラスワン」Vol.178　2019 年 3.4 月号	特集1　みんなで作ろう！健康しが
35	2018.12.31	子ども学習支援サポーターズ	京都新聞	家庭や心　苦しい子の力に　県立大生「サポーターズ」結成
36	2018.5.19	Taga-Town-Project	多賀町有線放送 / 自然いっぱい多賀のまち	Taga-Town-Project の紹介
37	2018.11.20	ボランティアサークル Harmony	中日新聞	東近江の NPO 法人　油絵と陶芸の作品展　愛知川図書館
38	2018.12.1	ボランティアサークル Harmony	中日新聞	障がいある子ども　手拍子取り楽しむ　県立大で音楽会
39	2018.5.18	座・沖島	読売しが県民情報	近江すたいる　沖島に新たな活気を　大学生は地域おこし
40	2018.12.22	座・沖島	日本経済新聞	大学と地域④　琵琶湖の島　住んで守る
41	2018.12.25	座・沖島	朝日新聞	島と都会結びつき探る
42	2019.1.19	座・沖島	テレビ滋賀プラスワン	大学生が考えるエコツーリズム
43	2018.9.30	地域博物館プロジェクト	中日新聞	昔ながらの民具　県立大生が調査　米原の民家で
44	2019.1.20	地域博物館プロジェクト	朝日新聞	地域に眠る文化財に光　県立大「地域博物館プロジェクト」代表　原知里さん
45	2019.3.4	たけともミライ	新建築 ONLINE	3 月 10 日に展覧会「竹の会所の歩み」を気仙沼市・竹の会所で開催
46	2019.3.5	たけともミライ	KENCHIKU	展覧会「竹の会所の歩み」および実大実験、解体作業
47	2019.3.8	たけともミライ	三陸新報	ありがとう「竹の会所」役目終え 8 日から解体　住民交流交えた 8 年
48	2019.3.9	たけともミライ	三陸新報	竹の会所で解体作業　10 日　イベントで歩み振り返る
49	2019.3.11	たけともミライ	読売新聞	「竹の会所」の絆　大切に　気仙沼　県立大生ら建設、今月解体

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
50	2019.3.11	たけともミライ	読売新聞オンライン	「竹の会所」の絆　大切に　気仙沼　県立大生ら建設、3月解体
51	2019.3.14	たけともミライ	三陸新報	歩み振り返り、解体惜しむ　本吉町日門 竹の会所でイベント
52	2018.12.30	Jesuit House プロジェクト	京都新聞	フィリピン・セブ市　県立大生デザイン　歴史遺産にカフェ併設
53	2019.2	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム、木興プロジェクト、未来看護塾	はっさか第48号	ボランティア報告　東日本大震災ボランティア　宮城県田の浦
54	2018.4.22	近江楽座	京都新聞	県立大　地域貢献プロジェクト　学生　活動成果や課題報告
55	2018.4.23	近江楽座	中日新聞	地域貢献活動を報告　彦根　県立大の「近江楽座」

公立大学法人　滋賀県立大学

スチューデントファーム「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2018 年度活動報告書

2020 年 3 月発行

発行	公立大学法人　滋賀県立大学
	地域共生センター
	〒 522-8533　滋賀県彦根市八坂町 2500
	TEL. 0749-28-8616　FAX. 0749-28-8473
企画・編集	近江楽座事務局
印刷・製本	近江印刷株式会社
構成・デザイン	前川瑛美梨

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：http://ohmirakuza.net をぜひご覧ください

近江楽座
まち・むら・くらしふれあい工舎